

★ 目 次 ★

■ 御代田町めがね塚1号墳の保存整備	小山岳夫	1
■ 焼町土器を切る	水沢教子	4
■ 南関東の後期旧石器人の黒曜石獲得について—信州から南関東へ—	青沢禮孝・安藤正俊	6
■ 北相木村考古博物館充実式体験ツアー ピバ、えせ縄文人! 石も縄文骨角器でイフナを釣ろう	藤森英二	10
■ おしらせ	事務局	12

御代田町

めがね塚1号墳の
保存整備

小山岳夫

1 御代田町の古墳とその保存

御代田町内には、御代田地区から馬瀬口地区・塩野地区南部にかけて、細田塚古墳、塚田古墳群、めがね塚古墳群、下原古墳群、根岸古墳など5か所に古墳がある。これらの古墳は、近接する善仁古墳、牛冷古墳、三子原古墳群、寺裏塚古墳、長野原原古墳（以上小諸市）、後原古墳群（佐久市）などとともに海拔780~870mの間に小さなまとまりを示している。

御代田では5か所と数少ない古墳であるが、このうち下原古墳は本学会会員でもある土屋長久氏らの尽力で保存され、細田塚古墳も発掘・保存されている。



図1 めがね塚1号墳の位置

今回、国道18号線の北側に位置するめがね塚古墳が、町誌の資料を得る学術目的で1996年夏と本1997年秋の2年にわたり発掘調査が行われた。その際、土地所有者の山本元栄氏のご理解と町の予算措置が得られたので、復元整備を行いよりよいかたちで保存することになった。今回はその発掘調査の成果と復元整備のようすを速報的に簡単に紹介したい。

2 めがね塚1号墳

めがね塚古墳群には第二次世界大戦後間もなくまでは3基の古墳があったが、最も東側の古墳は農地改良のため解体され、その際、直刀、須恵器のほか、馬の骨が出土したと伝えられる。現存するのは2基で、そのうち主墳とみられる1号墳が今回発掘調査された。

今回の調査によると、めがね塚1号墳は、直徑10m前後の円墳で、町内最大規模の横穴式石室をもつ古墳であることが判明した。石室は立派な立柱石の玄門をもつ両袖式で、全体形状は羽子板形に近いが左（西）側壁の開きが右に比べ大きい。玄室の長さは3.43m、幅2.32m、後部の長さ3.07m、幅1.03mを測る。棺床から天井までの高さは2.20mを越え、人が悠々と玄室内を歩ける空間が確保されている。



写真1 めがね塚1号墳（▼）遠景

出土遺物は人骨(5体以上?)、鉄刀、金具、馬具(轡)、装飾品、須恵器などがある。このうち副葬品は佐久平で三番目長さ(全長92cm)を誇る直刃のほか、短刀三振りもみつかった。装飾品には耳飾りの耳環、首飾の土製丸玉・ガラス玉などが少量出土したが、当時副葬された装飾品の多くは盗掘により持ち去られたらしい。須恵器は平瓶・壺などが出土し、壺の製作年代は7世紀後半頃と推定される。

これらの遺物からめがね塚1号古墳の築造年代は7世紀後半頃と推定される。

の道を果たしてクレーンが入れるかどうか心配された。しかし、ようやくクレーンが入ると、見事に天井石が宙に浮き、原位置に復帰した。また、石のぐらつきなどで見学者に事故がないよう右組みにも細心の注意が必要だったが、それも現代の石工たちによって危険のないようしっかりと組まれた。

それにしても不思議なのは古代の人々の土木工事技術の水準の高さである。10トンのクレーン2台をしてようやく持ち上げた巨大な石を、よくここまで運び、よくここまで組んだものだとつくづく感心した。

3 復元整備

めがね塚1号古墳の復元整備の問題点は、石室内にズリ落ちた天井石二つをどのように持ち上げ、ふたたび天井に架けるかということであった。天井石の重さは後ろのものが8.7トン、前が3トンである。とくに古墳に続く細い水田

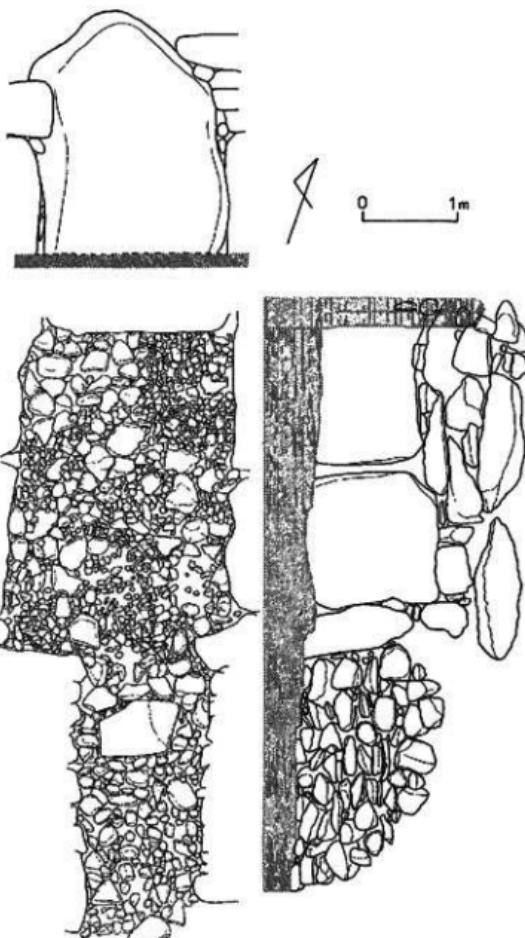


図2 めがね塚1号墳石室展開図(S-1/60)



写真2 棺床の遺物のフリイ作業



写真6 天井石のクレーン移動



写真3 石室右奥の集骨（5体分以上？）



写真7 天井石のクレーンによる設置

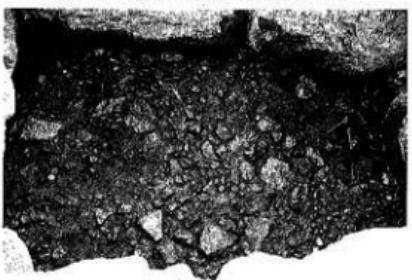


写真4 棺床の玉石



写真8 慎重に天井石を置く



写真5 玄門から見た石室内



写真9 復元されためがね塚！母塚

焼町土器 を切る



水沢教子

1はじめに

考古学は観察が命である。そのため通常目で見えないものを、可視化する様々な方法を取り入れられている。考古学を専門とする人自身が日常の観察の中で「特殊な眼鏡をかけて」肉眼では見えない領域に迫るのである。特殊な眼鏡の身近な例には、たとえば粗雑な板されから「信濃」という文字を浮き上がりさせた赤外線画像強調カメラ、機能未詳石器から「革刈り」という用途を導き出した金属顕微鏡(注1)などがあげられよう。さて、我々が最も多く目ににする遺物の一つである縄文土器。通常目に見える領域は文様、器形、論文技法、色彩などに限られる。ここから土器がどこで、どのような素地調整技法で作られ、そしてそのような土器群の中の一部はどこへ移動していたか。いわゆる土器のライフヒストリー全般に迫るには、やはり「特殊な眼鏡をかけて」見えない領域に踏み込む努力が必要である。いわゆる「胎土分析」研究はこのような目的をもって進められてきた。

2胎土分析研究チーム

国立歴史民俗博物館では、「生産と利用に関する歴史資料の多角的分析」と題する特定研究に、縄文時代における具体的な人の移動・土器の移動の解明を目指して設定した、胎土分析の分科会を発足させた。ここでは、中期中葉というホライズンの中で、北関東から中部地方(主に栃木・群馬・長野)にかけての土器の胎土と土器の型式がどのような関連を持っているかを中心にしていくつかの問題点を設定し、活動を開始した。昨年の暮れには川原田遺跡をはじめ、群馬県農毛石中山遺跡や佐久市寄山遺跡の中期中葉の土器群を見学させていただきながら、資料の検討を進めてきた。こうして今回は、川原田遺跡における、縄文時代中期中葉の集落出土の一括資料の分析をさせていただくことになったのである。

3分析資料

8月29日、天気晴れ。筆者が御代田町文化財資料室

の駐車場に着いたときには、午前4時に東京を出発したという主力メンバーの雄石徹氏・谷口陽子氏と立神倫史が待っていた。機材を下ろし、8時30分には作業に入る。

分析資料は勝坂II式(J-24)、勝坂IV式古(J-11)、勝坂IV式新(J-12)の段階(注2)を中心に、前もって代表的な土器を選択しておいた。各段階とともに川原田遺跡で主体を占める土器(焼町古段階には荒脊類型、新段階には焼町土器)と在地的な勝坂式、非在地的な勝坂式、在地的な阿玉台式、非在地的な阿玉台式など、胎土の代表的なもの42点が今回の分析対象となつた。

4焼町土器を切る

まず胎土の肉眼観察である(写真1)。分析は非破壊が望ましいのはいうまでもないが、含有鉱物・岩石の種類や粘土の組成を、正確に特定するためにはどうしても土器を切断しなければならない。そこで切断前にまず土器の表面を肉眼で丹念に観察し、大きく7つの項目を記入しておく。こうしておけばもし将来に入手される分析結果と肉眼観察結果がなんらかの相関を示せば、今後は肉眼観察だけでもある程度は胎土の状況を把握できるわけである。観察項目は粘土に対する岩石・鉱物の比率、それらの粒径、それらの大きさがどのくらい揃っているか、それらがどのくらい変質しているかなどハイサイズの用紙いっぱいになつた。いくつかこれらが役立つときが来る……。

作業の手順

I 胎土を肉眼観察し、①鉱物含有量、②粒径、③分級、④円磨度、⑤変質度、⑥鉱物・岩石組成の項目別カードをつける

↓

II ミニサーもしくは岩石カッタで1cm×2cmに土器を切断し、カードに切断位置を記入。

↓

III 切断した場所にバイサムを補填し、元の形に復元する。



写真1 肉眼観察(以下写真は全て池石氏提供)

次はいよいよ切断である(写真2)。曲医者さんが使うようなミニターに、先が針状に尖った刃を装着し、土器の文様が目立たないところへ穴をあける。その後、円形鋸のような刃先に代えて横に動かし、1cm×2cm角の破片を切りとる。勝坂式上器や阿玉台式上器は握力が弱い私でも何とか切ることができた。問題は焼町土器である。焼町土器の厚いこと、しっかりしていること、強いこと。ものによってはミニターを5分あっても10分あってもびくともしない! 強引に刃先を押しつけると「キーン」と土器が悲鳴をあげた。ここに私は焼町土器の製作者達の腰の強さ、その根性を見て取ったのである。彼女たちはおそらく長年粘土や混和材を工夫してこの頑丈な土器を作ったに違いない。火の国の土器の底力、この底力の秘密を明かさなければならない……。

それでもなんとか土器の切断が終了すると次は、補填である。L字状に切られた土器の傷跡は生々しい。そこで土器の切り口に(有)新成田総合社のバイサムというエボキシ系の樹脂を埋め込んで元の状態に戻すことにした(写真3)。御代田町教育委員会の堤さん、小山さんをはじめ、資料室の皆さんご支援をいただきて予定の全行程を完了したのは午後6時近くだった。

握力の無い私の手首が次の日まで腫脹炎状態であったことはいうまでもない。

5 今後の分析手順

今回採集した資料は、今後以下の3つの方法で分析し、結果を比較する予定である。図1に示したようにそれぞれの分析には「胎土分析」と一貫でいうことができないほど豊富な情報量が期待できる。

まず土器の約半分から薄片を作り、偏光顕微鏡を用いて胎土に含まれている岩石・鉱物や輪積みの方向を調べる(①)。ここではその岩石・鉱物が混和材として他の場所

から持つてこられたもののかそれとも粘土の中に元々入っていたものなのかという究極の問題や、岩石・鉱物と周辺の



写真2 土器の切断

地質の状況を比べることで混和材(もしくは粘土)の産地に追っていきたい。

次にEPMA(元素の定性・定量分析装置)、X線回折分析装置、螢光X線分析装置を用いた分析では(③)、おもに混和材を抜いた粘土そのものの性質を定めて、粘土が採取されたエリアを特定すべく組成の検討を行う。もちろん①と③の産地が違っているれば、いずれかの搬出関係がつかめるわけである。

さらに、長石や粘土鉱物の質量分析を加えて、より細かい素地土の特色に迫りたい(④)。また、土器の表面に塗られる顔料の分析も土器作りの技術や顔料の产地に関わる有力な情報を提供してくれるだろう(②)。

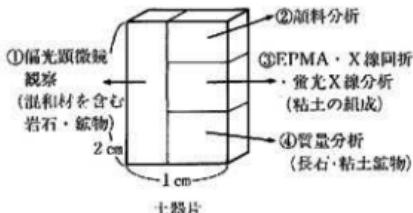


図1 分析の方法と対象概念図

6 おわりに

私が焼町土器に初めて出会ったのは、たしか1990年の夏の初めであった。真楽寺湧水の南、数十メートルに位置する川原田遺跡の現場で、住居址の床に横たわる大きな環状把手を有する赤焼きの土器群を目にして、その鮮烈な印象は今でも忘れられない。それから7年の年月が過ぎた本年5月に、川原田遺跡の報告書が御代田町教育委員会から刊行され、続いて今回の資料収集となつた。採集したサンプルが更に雄弁に焼町土器のライフヒストリーを、そして故郷佐久地方の縄文時代を語ってくれることを願つてやまない。

注1 桶澤1994『下弥生遺跡』

注2 寺内隆夫1997『川原田遺跡縄文時代中期中業の土器群について』[川原田遺跡]



写真3 樹脂の補填

表1 黒曜石の獲得法

獲得法	理由
直接採集	原産地と中間地点に交易を前提とする遺跡が発見されていない。原石との交換に倣する生産物を想定したい。
埋込戦略	一年を通じ信州と南関東を循環するスケジュールのなかに石材の獲得が埋込まれている。
交換	黒曜石の利用が始まる3万年前には利用が1割なのに対し2万2千年前には一変して各遺跡で主体的に黒曜石を用いている。

1はじめに

「南関東（武藏野台地・狭山丘陵・多摩丘陵・相模野台地およびその周辺の段丘面・沖積低地）（古城1996）」の後期旧石器時代・縄文時代の遺跡からは、信州産の黒曜石で作られた石器が数多く出土していることはよく知られています。霧ヶ峰高原から八ヶ岳にかけての地域は、質・量とともに本州最大の黒曜石原産地で、南関東の漸歴から出土している信州産の黒曜石は、この地域から運ばれた黒曜石です。

私たちは、1994年から、旧石器時代の黒曜石原産地での石器製作と遺跡である男女倉遺跡群・鷹山遺跡群で実験を継続。また、唐沢は、1996年に石器文化研究会主催の、「シンポジウムA T降灰以降のナイフ形石器文化～関東地方におけるV～IV下層段階石器群の検討～」に出席することができ、信州産の黒曜石の南関東地方への「流通」に興味をもつようになりました。旧石器時代には、それがどのような「方法」によってもたらされたのかを、私たちの考えも含めて起草してみます。

2 直接採集から交換へ

現在までの考え方を、表1にしてみました。

この他別の意見として、鷹山第1遺跡S地点の発掘調査の調査団長をなされた、安藤政雄さんによれば、鷹山第1遺跡のM地点（ナイフ形石器文化期）とS地点（尖頭器文化期）の石器組成の違いから、直接採集

から交換が考えられるそうです。（安藤1997 表2）

それによると、「M地点には一定期間居住した証拠となる礫群がなく、原石は1点・石器も4点しか残されていない。つまりM地点は、短期間に入手された原石と一緒に製作された石器とが、ことごとく搬出し尽くされた結果ではないのか。それに対して、S地点には、礫群があり、多量の原石とともに多くの石器が残されているが、それはあってもよい量の半数にもみたない。これは、一定の期間にわたり集団が、多量の原石を入手して、自給自足をはるかに上回る大規模な石器製作がおこなわれた結果ではないのか。しかも、この集団は、何らかのかたちで居住期間中の食糧が保証され、専ら原石の人手と石器の製作とに従事していたとしか考えられない。そこで、いま、そうした集団を石器製作者集団と仮称し、南関東で地域内周回移動を繰り返す、いわば移動生業集団とは区別しておきたい。すなわち、石器製作者集団は石器の作り手で移動生業集団が石器の使い手といった、石器の作りの連続の作業を分担する性格をおびてはじめているのである。これは、石器と食糧の交換へつながる、歴史的な出来事のはじまりであった。こうした意味で、旧石器時代はこの時点から、石器・食糧の連環バランスが、自給自足のサイクルだけでなく、不鮮明ながらも物々交換のサイクルへと移行するきざしをみせてくるのである。（安藤1997）」としています。

つまり、ナイフ形石器文化期では、直接採集が考



写真1 八ヶ岳の麦草峠の黒曜石露頭

表2 鷹山第1遺跡M・S地点石器組成(安藤1997)より

時 期	M地点	S地点
	ナイフ形石器文化	尖頭器文化
石 器	4	246
原 石	1	1,569
残 残	5,928	14,994
礫 群	無	有

られ、尖頭器文化期になると交換が考えられるという意見です。

そこに、私たちなりの考えを書きます。M地点とS地点の石器製作のための居住期間の違いについてですが、M地点で製作されたのはナイフ形石器の素材となる縦長剥片、もしくは石刃です。それらは、石核さえ作り出してしまえば、たとえ途中で側面調整や打面調整を繰り返したとしても、一つの石核から短時間に大量に製作することができます。(M地点の剥片剝離技術はその特徴から鹿山M型刃器技術・図1)ところがそれに対して、S地点で製作されたのは尖頭器です。

尖頭器の製作には形状調整の剝離に重点がおかれており、1つの製品を作り出すのに石刃を1つ作り出すのに比べて、何倍も時間がかかります。(図2)そのため、M地点などのナイフ形石器文化期の時代は、短期間の居住ですむのですが、S地点などの尖頭器文化期の時代では、長期の居住となってしまいます。

では何故、そんなに手間のかかる、尖頭器の製作を原産地で、おこなわなければならなかつたのでしょうか。

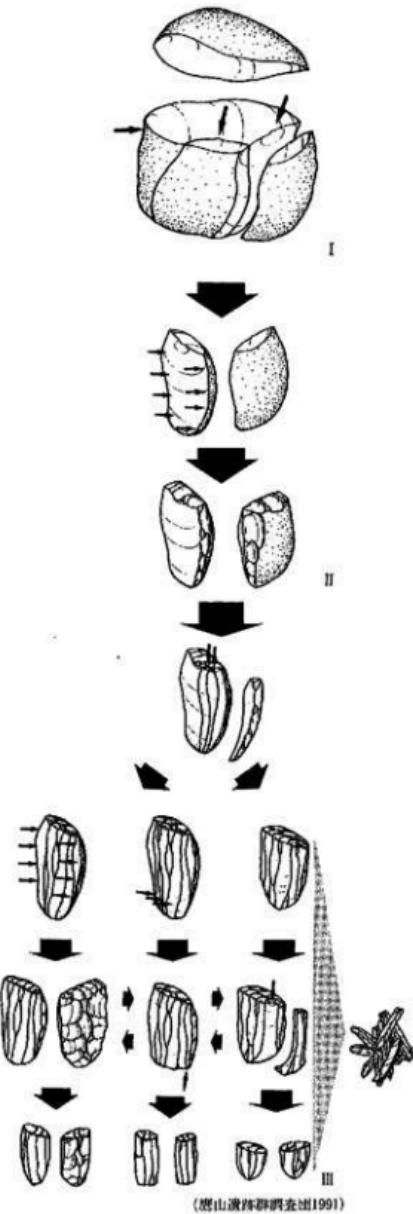
当時は、最終氷期の時代で、信州の黒曜石原産地の気候は、現在のシベリアあたりの気候だと考えられています。そのため、旧石器人の集団が黒曜石原産地で原石を集めて、石器を製作できた期間は1~2か月間位ではないでしょうか。とすれば、短時間で大量の石刃を作り出せるナイフ形石器文化期ならともかく、1つの尖頭器を作り出すのにかかる尖頭器文化期は、原産地では黒曜石を集め、石器製作は消費地である、南関東でゆっくり製作したほうがよいのではと思えるのです。しかし実際はその逆で、信州の黒曜石原産地に石器製作の痕跡が残されたのは、ほとんどが尖頭器文化期なのです。それは何故でしょうか。

その1つの考え方として、狩猟具がそれまでのナイフ形石器から、尖頭器に変わったためだと思います。

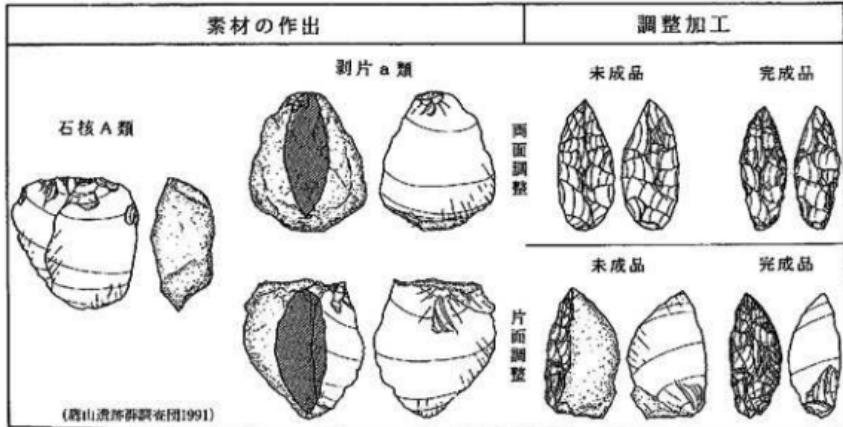
尖頭器、とくに両面調整尖頭器は、形状調整の剝離によって全面が覆われています。そのため、ナイフ形石器に比べて、製作途上で折損する可能性が高いのです。

私たちは、94年に初めて男女倉・鹿山遺跡群を訪れた時に、長門町の縄文体験館で、黒曜石の分厚い剥片から尖頭器作りに挑戦しました。その時、安藤は何とかそれらしい形になったのですが、不器用な唐沢は、ハンマー・ストーンで形状調整中に、素材の剥片を折損するなどで、尖頭器作りがいかに難しいかを体験することができました。それでは、石器作りに慣れた旧石器人は、どうだったのでしょうか。

佐久市大字香坂に所在する、IH石器時代末から縄文草創期の尖頭器製作遺跡の下茂内遺跡では、石器の後合作業の結果、安山岩製の尖頭器製作の完成品成功率は約3割だそうです(図3)。



第1図 鹿山M型刃器技術の工程模式図

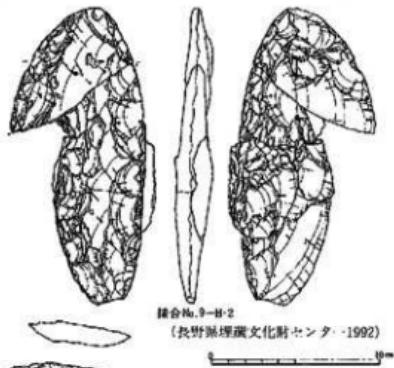


第2図 鹿山I遺跡S地点の剥片素材両面調整・片面調整槍先形尖頭器製作工程

男女倉・鷹山などの黒曜石原産地での、尖頭器製作の完成品成功率もやはり、同じ位の数字ではないでしょうか。そのため、黒曜石の原石だけを南関東を持って行き、南関東だけで尖頭器を作成したのでは、完成品はいくらも出来ません。そのため、信州の黒曜石原産地で右器製作をおこなえる期間がいかに短期間でも、またいかに居住に不向きな場所だとあっても、尖頭器文化期の石器製作者集団は、そこで尖頭器の完成品を作らなければならなかつたのだと思います。原産地で尖頭器を作成し、折損した尖頭器を廃棄しながら、たえず完成品製作目標を上回る数の原石を探集し、さらに尖頭器を作成していかなければならなかつたのです。M地点では、原石が1点しか残されていなかつたのに、S地点では1,569点もの原石が残されていたには、そういう理由もあつたと思います。尖頭器文化期になつて、信州の黒曜石原産地にかつてなかつたほどの石器製作遺跡群が誕生したのは、また、そこでおもに尖頭器が製作されたのは、そういう理山があつたからではないでしょうか。そして、消費地である南関東の遺跡からそこで作られた痕跡のない、黒曜石の尖頭器が見つかるのはそういう理由からとを考えます。もしも、狩猟具がナイフ形石器から尖頭器に変わらなければ、信州の黒曜石原産地には今日知られているような、石器製作遺跡群は存在しなかつたはずだと思います。

前記したように、石器製作に慣れた旧石器人においても、尖頭器製作は難解で成功率は低かったのです。そのため、南関東から信州の黒曜石原産地へ尖頭器を作りに行く右器製作者集団には、尖頭器作りの上手な一部の人たちが選ばれることになると思います。そし

て、南関東に運ばれたその尖頭器は、黒曜石製ということもあって、羨望の眼差しで見られたのではないでしょう。とすれば、そこには他には商品価値が生まれることになると思います。石器製作者集団には石器製作の間、食糧をなんとかしても黒曜石の尖頭器が欲しい。そういう考え方こそが、安藤さんの言われる石器と食糧の交換へつながる、歴史的な出来事のはじまりとみられないでしょうか。尖頭器の出現は、ただ狩猟具がそれまでのナイフ形石器が、形を変えただけという単純なことではなかつたと考えます。したがつて、尖頭器の出現によってそれまでの自給自足から交換が始まつたとすれば、そこには今までとは違う、新しい文化がはじまつたと考えられると思います。だ



様品No.9-B-2
(佐野埋蔵文化財センター・1992)

第3図 尖頭器製作の失敗例
(佐久市下茂内遺跡)

とすれば、1964年に流沢浩氏によって「尖頭器の存在は、ナイフ形石器文化のなかに解消されるべきである。」との意見もあり、尖頭器文化そのものの存在について、論議されてきたのですが、このことにより、尖頭器文化はナイフ形石器文化から切り離して考えられると思います。

3 石器製作者集団について

信州の黒曜石原産地での石器製作者集団は、石器製作者と原石採集者に分けることも出来るかもしれません。なぜなら男女倉遺跡J地点は、「黒曜石原石は、非常に良質の6~8cmの軽石を好んで用いており、付近に露頭はないことから、おそらく和田岬御浜側からの運び込みと考えられる。(森山1975)」とされています。同じような例が、他の地点でもみられます。このことについては、地点ごとの集団と集団との交換との意見がありました。石器製作者は石器製作のための道具などの関係で、一か所にとどまり石器を作り、原石採集者は石器製作者の指示で良質な黒曜石を求めて、他の原産地の黒曜石を石器製作者まで運んだとも考えることが出来ると思います。原産地での石器製作にも、分業があった可能性もあると思います。そして、その原石採集者が石器製作者に食料を確保していたのかもしれません。信州の黒曜石原産地で、尖頭器などの石器を作製した集団は、南関東までの道程を考えれば、おそらくは原産地で雪を見ることはなく、南関東に向かったと思います。今年そこで製作した尖頭器などの石器と、手にできるだけの黒曜石の原石を持って、しかし、それだけでは、次の年に信州の黒曜石の原産地へ、石器を作りにいくまでの間の必要量には足りません。そのため、足りない量の石器を在地産のチャートなどで補っていたのではないかでしょうか。

4 おわりに

春、古解けを待って、男女倉・鷹山の野に立つと、1万年以上の眠りから覚めた黒曜石が、まるで星を散

りばめたように地表に現れています。私たちが、その人たちと対話出来る一時です。男女倉遺跡群の各地点には、和田村教育委員会の立入禁止の立札を見掛けます。現在、男女倉遺跡群の各地点は畠地になっています。そのため、地表・もしくは地表近くの黒曜石は、農機によって破損する場合もあり、私たちの採集した中にも、新しく破損した黒曜石があります。また、斜面となっている畠地では雨などに流され、道路にまで流れている黒曜石を見つけることもあります。以前、その黒曜石を採集中に尖頭器の未完成を見つけたこともあります。立入禁止の立札を立てて、黒曜石の散落を防ぐようにされたのでしたら、次は地表面に出てきた黒曜石を、教育委員会で保護してほしいと思います。

この原稿は、中ッ原第1遺跡G地点の2次調査の仲間の、吉田行政さん・加藤先生さん・中沢祐一さん・永塚俊司さんからの具体的なご指導のおかげでまとめることができました。月日の過ぎるのは早いもので、2次調査からは、もう2年以上過ぎました。現在は皆、それぞれの道を歩み、忙しい日々を送っていて、本来ならば、素人の原稿などには、かまつていられないところを、ご指導いただけました。ありがとうございました。推測の多い原稿となってしまいましたが、これからも黒曜石の動きに关心をもっていきたいと思っています。

引用参考文献

- 古城 泰 1996 「縄文中期における信州産黒曜石の南関東への搬入路」『考古学雑誌』
堤 隆 1993 「遠き狩人たちの八ヶ岳」
鷹山遺跡群調査団 1991 「鷹山遺跡群II」
安藤政雄 1997 「石器時代の物々交換とミチ」『考古学による日本歴史』
片岡正人 1996 「石器製作の成功率は3割?一下茂内遺跡(佐久市)『現場取材信濃の古代遺跡は語る』
飼長野県埋蔵文化財センター 1992 「下茂内遺跡」
和田村教育委員会 1975 『男女倉』

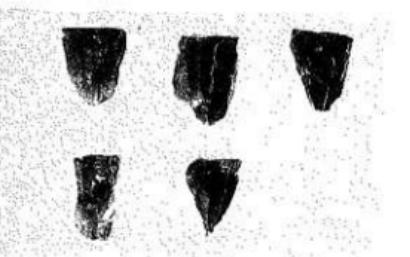
海を渡ってきた黒曜石

矢出川遺跡の細石刃石核の中に、東京湾のはるか彼方に浮かぶ神津島産の黒曜石が5点確認された。

京都大学原子炉実験所の濱野哲男先生の蛍光X線分析による原産地同定の結果判明したものである。

信州には八ヶ岳や和田岬など良好な黒曜石原産地があるのに、なぜ200kmも離れた神津島の黒曜石が海を越えて運ばれてきたのか。謎である。

(堤 隆)



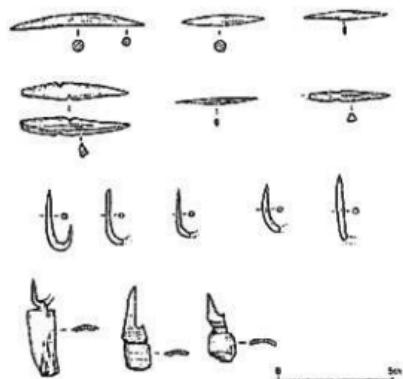
矢出川遺跡の神津島産黒曜石製の細石刃石核

ビバ、えせ縄文人！ 君も縄文骨角器で イワナを釣ろう

藤森英二

1 はじめに

すでに御存じの方もいらっしゃるかと思いますが、長野県には「地域づくりフォーラム・夢21」という、各市町村が地元の特産品を持ち寄るなどして地域の活性化を図るイベントがあります。毎年各地域ごとの持ち回りで担当するのですが、今年は佐久広域が当番でした。担当の各市町村は参加体験型の行事を何かしら用意しなければならないそうで、私の勤務する北相木村では、柄原岩陰遺跡から出土した釣り針、中でも逆T字型釣り針と呼ばれるものを模して、実際にそれを使ったイワナ釣りをしてみたらどうかということになりました。言うまでもなく、柄原岩陰遺跡からは縄文時代草創期から早期の豊富な骨角器が出土しており、お手本には事欠かないわけです（第1図）。当然（？）学芸員たる私に話しがきました。これは面白そうだと思案に了解したのですが、その先には涙なしでは語れない数々の事件が待ち受けているのでした。



第1図 柄原岩陰遺跡出土の骨角製釣り針

上2段は逆T字型釣り針。以下2段は未製品
(図は『長野県史』考古資料編から)

2 まずは学習そして製作

さて、実際作るとなると、どうしていいか皆自分が知らない自分に気付きます。今まで学んできたものの底の深さを感じずにはいられませんが、とにかく経験者の知恵を授かるうと、小県郡長門町の方々にお世話をになり、同町原始・古代ロマン体験館（ここは常時骨角器や土器、石器づくりの体験が出来る素晴らしい施設です。まだの方はぜひ）での実例を見せていただきました。

そこで学習の結果用いた手段は以下の通りです。まず牛の大腿骨を用意し、これをハンマーで砸きます。ただしこの時点ではどのように破片を用いるかを考えはせず、とりあえず次の行程のため鍋に入る大きさにするというものでした。後先は考えていません。ちなみに骨の髓はカニの肉のようでした。食べませんでしたが。

今度はこれをよく煮ます。これによって骨にある油分を抜くということなのですが、なるほど試しに油分を含んだ骨を用いても上手く腐けないようです。

さてこのよく煮た骨を今度は乾燥させ、いよいよ目的の形にしていくわけですが、ここでも骨を削る、砕く等の加工をしています。そうでもしなければなかなか目的の道具には近づけません。そこでやはりハンマーで砕いたわけですが、ここでハブニング。無造作に骨を砕いていたところ、その破片が見事私の左目に命中しました。医者に行ったところ、ちょっと傷ついただけで、もう目の中には残っていないということでお心配でしたが、なぜ目に骨が入ったかを説明するのに一苦労だったことは言うまでもありません。

さあ、それはさておき、今回目的とした逆T字型釣り針は、はっきり言えば小さく細長ければいいわけで、他の道具程にはその素材に気を使う必要はないようです。骨の構造上、ただ砕くだけでも細長い骨片は数多くくれました。また印象としては、慣れてくればある程度目的に添った骨の剥片（例えば板状のものなど）

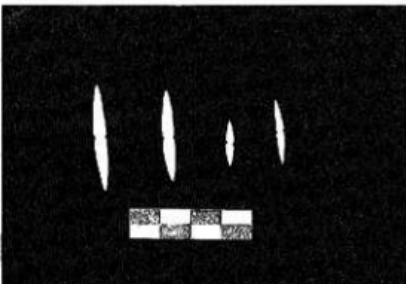


写真1 今回製作し、使用した釣り針

向かって左2点が大サイズ。残り2点が小サイズ



写真2 釣り針製作風景

を連続的に削がせたとも思えます。

次にこれを磨いて形を整えるわけですが、使ったのは相木川の河原で拾った砂岩系の石です。しかしこの砂岩系の石が案外少なく、逆に北相木のチャートの多さを実感しました。ただし砂岩系の石であればほとんどの場合で役に立ち、勢い石材を他地に求める必用もないように思えます。またこの時水を付けると作業がスムーズな様です。こうしてひたすら磨き、両端を尖らせて、中央に刻み（糸を結びつける部分）を入れれば完成です。ちなみに今回製作した釣り針の大きさですが、あらかじめ大小2サイズを用意しました。一つは実際に遺跡から出土する3~4cm程度の大サイズのもの。しかしこれは大きすぎるのではと考え、1.5~2cm程度の小サイズのものも用意しました（写真1）。

3 釣るぞ魚を

さて実際の釣りの方はというと、実はイベントの数日前、役場の担当者2名がチャレンジしたところ全く釣れず、スタッフ一同不安な日々を過ごしました。しかしイベント前日には藤森含め4人で挑み、この時はじめて釣り上げたのです、ビビビチのイワナを。やはり上手くいったのは2cm程度の小サイズの釣り針でしたが、とにもかくにも釣れたということではっと一安心です。そして9月6日のイベント当日は、11名



写真4 釣り風景 (生け簀の正体含む)

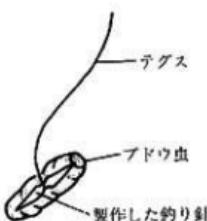
の参加者の方々にも骨片を磨く作業からやっていただきましたが（写真2）、自分たちでつくった骨針で、見事イワナを釣り上げ、なかなかの成果でした（写真3）。約1時間で合計10匹ほどの釣果となりました。

ただし、これにはいくつかの条件が付いております。まず糸については現在のテグスを用い、竿は当時あったかどうかも分かりませんが、今回は竹を使用しました。この辺が少しせ繩文人です。そして、その場所ですが、実は生け簀です。直径約4~5mの円形のブルーにイワナが放されているわけですから、つまりはどうしたって魚はそこにいるのです（写真4）。この辺りは全くえせ縄文人です。何卒ご勘弁を。

餌はミミズ、トンボ、ブドウ虫を試しましたが、いずれの餌でもイワナは食いついてきました。しかし針の構造上たいへん餌だけイワナに持っていく必要があります。ブドウ虫を針の両側から付けるのが最も適していたようですが（第2図）。しかし実際のところ、餌がなくともイワナは食いついてきます。ゆっくりと水に沈む骨の微妙な比重により、流れにのせれば水中に浮くようになり、ある種のルアーのようなものだったのかも知れません。もっとも桶原岩陰遺跡を発掘なされた信州大学では、やはりこのような実験で、餌を付けずにニジマスを釣り上げたそうです。つまり当の骨に釣っていたということでした。トホホ……。



写真3 釣ったことの証拠写真



第2図 図解・ブドウ虫の正しい付け方

4 おわりに

後日、この釣り針を、イワナをこよなく愛す塩尻市平出遺跡考古博物館学芸員の小口達志氏にお見せしたところ、いかにも欲しそうなギラギラとした目をしていらっしゃったので、その場でお渡しました。その後残念ながら釣果はなかったとのことです。いかんせん禁漁期間間際でしたので、来期こそは自然の川で釣り上げて、えせ縄文人の「え」の字くらいはとりたいと思う次第であります。そこで募集。我こそは縄文式釣り針で釣り上げると自信のある方はぜひご一報を。ただし本物の縄文の方や、テレバシーでイワナと交

信出来る方、グラハム・ハンコックをこよなく愛する方はご遠慮下さい。

また最後に思うことを一つ。先に記したように今回イワナを釣り上げた針は、実際の遺物よりも小さなサイズです。これより大きいと少なくとも20cm以下のイワナは通じていないように思えます。もしこれが正しければ、より大きな魚が対象だったのでしょうか。そこで思いつくのがサケですが、産卵のため涸上したサケをわざわざ釣ったかどうか。あるいは巨大なイワナなどが今よりも沢山いたのでしょうか。皆さんはどう思われますか。

訃報 慎んでご冥福をお祈りします

佐藤 敏さん

10月19日、68才でご逝去。佐久考古学会幹事や長野県考古学会東信地区幹事などを歴任され佐久地方の考古学の発展に寄与されました。

碓氷良さん

11月26日、76才でご逝去されました。佐久考古学会の学会活動にも積極的に参加していただきました。

ご冥福をお祈りします。

シンポジウム 信州産黒曜石の諸問題 お知らせ

98年1月24日(土)・25日(日)、諏訪市文化センターにおいて、「シンポジウム 信州産黒曜石の諸問題」が長野県山石器文化研究交流会によって開催されます。諏訪の温泉につかり、黒曜石についての遺跡を深めてみては。

●参加・問い合わせ 堤 隆まで(1月10日〆切)

御代田町文化財資料室 ☎ (0267) 32-3328

八ヶ岳西南麓の縄文遺跡見学会

晴天に恵まれた9月7日(日)、八ヶ岳西南麓の縄文遺跡見学会が行われました。参加した会員は27名、山井顧問・井出会長・臼田事務局長以下大勢の会員が参加。ファミリーで参加した会員もありました。

見学遺跡は、桜井秀雄会員が調査する原村南平遺跡。この遺跡は縄文時代中期の集落で、有孔鈎付上器などの出土が印象的でした。

また原村では阿久遺跡の収蔵庫で、原村村内の出土品の見学をしました。お昼はもみのき荘でフライ定食などをみんなで楽しく食べ、さまざまな考古学の話題で盛り上がりました。

隣の茅野市では尖石考古館を見学、副館長の竹村さんにご案内をいただきました。圧巻の縄文土器が並び、話では聞くものの、国宝縄文のピーナスの本物は、ふくよかな縄文の女性の美をみせており、みんな飽きることなくみつめています。

初秋のさわやかな一日、充実した考古学の短い旅となりました。
(佐々木宗昭)

♪ 編集後記 ♪

『発掘出土情報』12月号をみていたら日本のエライ考古学者が選ぶ過去15年間の「思い出の遺跡ベスト3」というのがあった。やっぱし一位は三内丸山。

この年の漸、なんか懐かしのメロディー100決定!みたいで、その小市民的なノリに思わず「ダッセ~」といってはみたが、自分でも知らないあいだに指を三つ折っていた(ハズカシ~から教えませ~ん)。

『発掘川柳』というナウイ本を出した酒井龍一なるオッサンも奈良にはいるそうだ。そこで私も一句。

「年度末 いまだできない報告書

キンカン・キンカン(近刊) まだ ミカン(未刊)」(つつみ)

佐久考古通信 №71

発行所 佐久考古学会

〒384-01 長野県佐久市篠原879

臼田 正 男

郵便振替 (番) 00570 9 2842

☎ 0267 (62) 8133

発行者 井出 正義

編集者 堤 隆

印刷所 ほおざき書籍館



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

東部町祢津真行寺遺跡群出土の石器石材一とくに八風山型ガラス質安山岩とツメ石型ガラス質安山岩について— … 川崎 保	1
板原岩陰遺跡出土の石核から…	藤森英二
動物考古学と縄文文化—西本豊弘先生講演会…	事務局
カーチャーの旅…	堤 隆
土偶のつぶやき…	各会員

東部町祢津真行寺遺跡群 出土の石器石材

—とくに八風山型ガラス質安山岩と
ツメ石型ガラス質安山岩について—

川崎 保

1 はじめに

筆者は現在上信越自動車道建設に伴う緊急発掘調査で主に小県郡東部町の遺跡群を整理する機会に恵まれていて、さらに昨年から特にこれら東部町の諸遺跡から出土している石器石材の同定作業を地質学専門の山岸猪久馬氏の指導のもと少しづづ進めている。当然のことながら遺跡出土の石材は時代、時期、器種によって様々であり、東部町の遺跡出土の石器石材全般についてはまだ分析途中であるし、事実についての詳細は報告書に委ねるとするが、東部町（烏帽子岳南麓）の縄文時代の遺跡出土の石材には少なからず佐久地方からもたらされた石材が存在する。その中でも最近気づいた点（ガラス質安山岩をめぐるいくつかの問題）について触れてみたい。

2 八風山型ガラス質黒色安山岩について

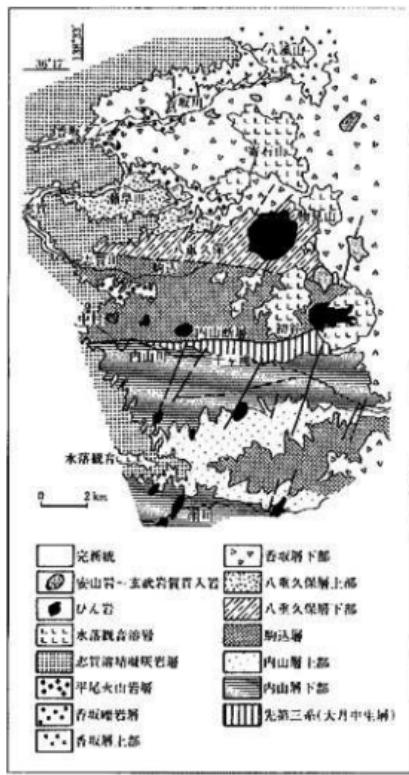
近年、石槍の製作遺跡として注目を集めた佐久市下茂内遺跡や縄文時代前期初頭の七器式の様式遺跡としても知られる御代田町塚山遺跡、中期中葉のいわゆる焼町土器を大量に出土した同町川原田遺跡などで黒色で緻密なガラス質の安山岩が石器の石材として利用

されていることが、報告されている（第1図）（近藤ほか1992）（山本・高松1997）。

この石材は、佐久市の東側、千曲川右岸を流れる香坂川上流の荒船山、八風山など長野県と群馬県の境の山々を構成する志賀溶結凝灰岩を切る貫入岩（小坂ほか1993）であるいわゆる「荒船」溶岩（第2図の水落



第1図 遺跡ほか位置図



第2図 千曲川右岸地質図 (小島ほか1993より)

観音溶岩)であるとは、だいたい見当がつけられていたようである。荒船山や物見岩の岩が玄武岩とされていてことから、漠然と八風山のものも玄武岩ないしは玄武岩質安山岩などと呼称されることがあったが、前述の遺跡出土の石器に用いられている八風山起源のものは岩石学的にはガラス質黒色安山岩と呼称すべきようである(山本・高橋1997)。

鳥居子岳南麓の東部町の真行寺遺跡群や中原遺跡群などの打製石斧には、多くの緻密な千枚岩質粘板岩が多く使用されていて、当初はこれらが表面は風化して灰白をしているのだが、新鮮な割れ面は黒色で緻密なことから当初筆者はこれもガラス質安山岩か玄武岩ではないかとも考えていて、これは川上村大深山遺跡などに多く見られる先第三系の千枚岩質粘板岩と考えられる。

しかし、東部町の縄文時代の遺跡にもどうもこの八風山起源のガラス質安山岩が少しあげられているら



第3図 真行寺遺跡出土ガラス質安山岩の剥片
(1日盛は1mm)

しいことが肉眼による鑑定で推測された(図3)。そこで実際にこれを確かめるべく御代田町下弥堂遺跡、佐久市香坂山遺跡などの遺跡出土の資料を見せて頂いたり、さらに八風山、物見岩、兜岩山、荒船山の火山岩を実地調査した。

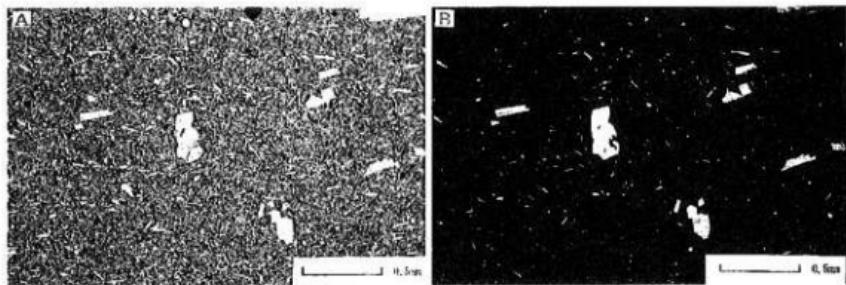
まず肉眼観察の段階で、同じ第三紀末~第四紀に噴出した溶岩とはいっても、八風山のガラス質安山岩とその他の荒船溶岩である荒船山の安山岩や物見岩の玄武岩はかなり異なっている。前者の石基は非常に細かくガラス質であり、部分的には肉眼でも微細な長石が斑晶として認められる(第4図)。その点後者の玄武岩は石基の粒が粗い感じがあり、斑晶はほとんど存在しない(第5図)。割れても前者のようなさりげない貝殻状断口は形成せず、凸凹がある面を形成する。

佐久地域の下茂内遺跡や香坂山遺跡では剥片石器の大半がこの八風山型ガラス質安山岩で製作されていて、御代田町の遺跡にもかなり搬入されているようである。その点東部町の真行寺遺跡群などでは黒曜石が圧倒的で、その他にはチャートや千枚岩質粘板岩が目立っていて、ガラス質安山岩はそれほど多く含まれていない。

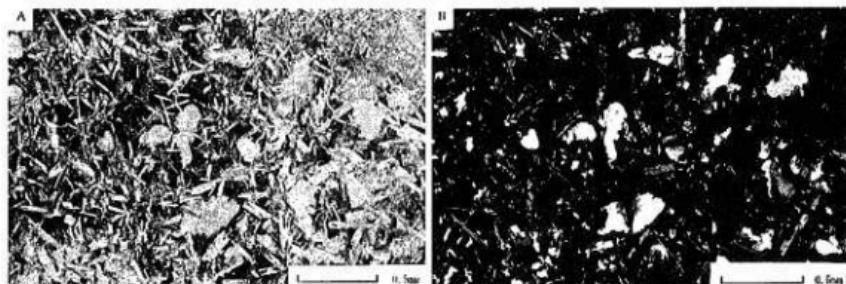
まだ詳細に検討したわけではないが、佐久地方にはかなり見られるこの八風山のガラス質安山岩は東部町をはじめとする上小地方では少ないようである。今後更地市屋代遺跡群など善光寺平の成果が明らかになれば、この石材の千曲川流域における分布も明確になるかと期待される。

3 もう一つのガラス質安山岩 —「ツメ石型」ガラス質安山岩—

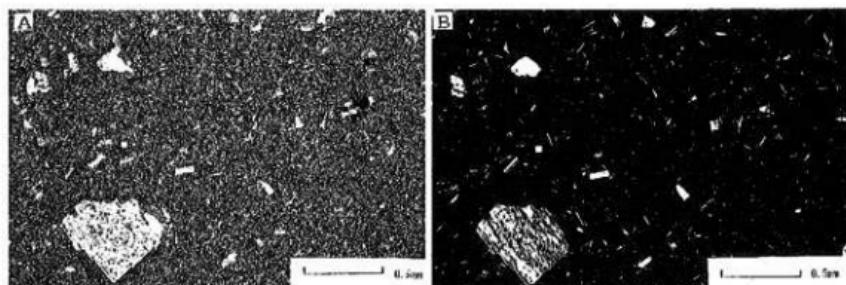
東部町の遺跡から出土した黒色緻密ガラス質安山岩はほぼ八風山のガラス質安山岩に同定してよいと思っていたところ、御代田町教育委員会の堀隆氏より飯山市付近にもガラス質安山岩が採集できることを教えていただき、また新潟県の関川流域で採取されるツメ石と称される石を実見する機会があった。



第4図 八風山型ガラス安山岩 A開放ニコル、B直交ニコル 斑晶鉱物は輝石および斜長石 (山岸氏撮影)



第5図 物見岩玄武岩 A開放ニコル、B直交ニコル 石基の微細な長柱状鉱物は斜長石。斑晶状鉱物は交代された方解石 (山岸氏撮影)



第6図 ツメ石型ガラス質安山岩 A開放ニコル、B直交ニコル 斑晶鉱物は斜長石 (山岸氏撮影)

山岸氏も1985年頃行われた新潟県の志久見川固体研究に参加したことがあり（志久見川固体研究グループ1991）、このときツメ石の標本を見ておられ、八風山のガラス質安山岩とよく似ていることに気がついた。それで山岸氏は新潟県の現地で地質研究をされている渡辺秀男氏にお願いして、ツメ石標本を数個送って頂いた。

送って頂いた原石は川原の石のため円錐形で、風化の仕方も八風山のものとは一見異なるようであったが、

これを削って剥片にしてみると、黒色緻密でガラス質であり、割れ面は貝殻状断口を呈し、わずかに斑晶も散見され、非常によく似ている。

また渡辺氏の紹介された文献の中村由克（1986）によると信濃町や飯山市にはこの「ツメ石」で造られた石器が多く含まれているとのことである（註1）。さらに長野県埋蔵文化財センター調査の日向林遺跡や東森遺跡の代表的な石器を実見させていただいたところたしかにこうした緻密な安山岩が存在していた（註2）。

八風山型ガラス質安山岩とツメ石型ガラス質安山岩の特徴は内眼では両岩石とも新鮮面ではいくぶん光沢があり、まばらに小さな白い斑晶とわずかな黒い斑晶がみとめられ、両型の区別はつきがないものもある。

顕微鏡による岩石薄片の観察ではまだ両者とも2~3枚程度とわずかではあるが、これもあり区別がつかない。白色鉱物は斜長石で、大部分は1mm以下であるが1mmをこえるものも含まれている。斑晶有色鉱物は量は少ないが、普通輝石と紫蘇輝石で、いずれも1mm以下である。

両岩石の石基の多くは細長い斜長石の間をガラスがうずめ、粗面岩に似た構造を示し、直交ニコルでは全体がほとんど暗くなってしまう。しかし、細長い斜長石の目立たない、もやもやした石基もあるが、直交ニコルでは暗くなり、ほとんどガラスからできている(第4・6図)。

4 まとめにかえて

この石材は從来無斑晶質安山岩とも呼ばれてきたが、この無斑晶安山岩の名称は島津光夫・立石雅昭(1993)がこのように命名しているためと思われる。荒川勝利氏に現地を案内していただき、実際の「ツメ石」を採取すると、斑晶が見られないものから斑晶が散見されるものまで様々なものが存在している。中村由克(1986)はこれをガラス質安山岩とし、筆者もここでは後者の呼称が適切と考え新潟県側起源のものをツメ石型ガラス質安山岩、佐久地域のものを八風山型ガラス質安山岩と呼ぶこととする。

ただ興味深いのは八風山のガラス質安山岩は物見岩や荒船山の溶岩とは隣接していて一連の荒船火山岩類と一緒にされることもあるにも関わらずかなりの差がある。しかし八風山のガラス質安山岩は意外にかなり離れた新潟県関川流域や志久見川流域の「ツメ石」と極似しているのである(註3)。こうした問題はひとりこのガラス質安山岩の問題にとどまるものではないが、火山岩は決して隣接しているから似ている訳ではない。地質学的にはともかく我々は八風山のガラス質安山岩を物見岩の玄武岩や荒船山の安山岩といっしょにすべきではない。むしろツメ石などと肉眼や顕微鏡観察の上では極めて似ていることに注意すべき点であると思う。

さらに詳細な肉眼や顕微鏡による構造の観察や含有微量元素の差によって両者を区別できないか検討していくたいと思っている(註4)。

本稿で取り上げたガラス質安山岩の鑑定はか地質学について山岸猪久馬氏にご教示、ご指導を、また渡辺秀男氏にはツメ石の標本及び文献を送付頂き、荒川勝利氏には志久見川(志久見橋付近)や信濃川にてツメ石の採集やツメ石を含む泥流層の案内をして頂いた。

さらに堤 隆、広瀬昭弘、大竹憲昭、谷 和隆、白田武正、須藤隆司の諸氏に遺物の観察や石材鑑定の上でご協力頂いた。以上の方に衷心より謝意を表する。

(註1) 堤 隆、広瀬昭弘氏のご教示。

(註2) 大竹憲昭、谷 和隆氏のご厚意による。

(註3) 荒船山の安山岩は石基はガラス質ではあるが、斑晶が発達し破断面は貝殻状断口を呈する訳ではないので区別は容易である。しかし、西脇の兜岩山のガラス質安山岩は八風山型やツメ石型ガラス質安山岩に極似している。よって、東部町などの東信地方の遺跡出土のガラス質安山岩の全てが八風山のものかどうかは厳密にはまだわからない。

(註4) 山本・高松論文(1997)にも飯山市内のガラス質安山岩が比較資料として紹介されていて、EPMAを用いた微量元素の分析では八風山型とツメ石型ガラス質安山岩は区別できるようである。

引用参考文献

小坂共栄・鷹野智由・北爪 敏1993「新第三系北部フオッサマグナ地域とその周辺(6)内山地域『日本の地質4 中部地方1』」共立出版

近藤尚義ほか1992『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—佐久市内 その1』長野県埋蔵文化財センター

志久見川団体研究グループ1991「新潟—長野県境地域の魚沼層群の層序と火山活動」『地球科学』45-5

島津光夫・立石雅昭1993『地域地質研究報告5万分の1苗場山地域の地質』

中村由克1986「野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器・石材」『信濃』38-4

山本 薫・柴田 敏・高松武次郎1997「ガラス質黑色安山岩製石器の石材产地推定方法に関する研究—蛍光X線分析法とブレバラート法による石材产地推定結果の比較と評価—」『縄文時代』8

山本 薫・高松武次郎1997「縄文時代前・中期の浅間山麓坂野西遺跡群における石器石材の入手について」『川原田遺跡縄文編』御代田町教育委員会



柄原岩陰遺跡出土の 石核から

藤森英二

1はじめに

これまで本誌面をお借りして、柄原岩陰遺跡出土の石器について、若干の考察を含めながらこれを紹介してきた（藤森1996・1997）。今回は主に石核の在り方を中心に紹介し、これらのことから類推される石器製作や黒曜石の入手の方法について考えてみたい。ただしこれまで同様、今後の混亂を避けるため、具体的な点数などは一部を除き提示していないが、このあたりは御理解をいただきたい。

2 柄原岩陰遺跡における剥片石器の変化

柄原岩陰遺跡西南部Ⅰ～IV区（注1）の遺物包含層は560cmにも及び、この中の剥片石器の様相の変化については前回までの報告でも触れてきたが、ここで少し詳しく述べておきたい。尚これまでと同様に分析は黒曜石を中心とするが、黒曜石以外の石材は全体としても1割強程度である。

さてこの箇所より出土した黒曜石の石器類を上から20cm毎の人工層位で区切っていくと、大きく3つの段階に分かれる。先ず0～180cm未満では、各層位で0～10点程度と出土量が少ない。これを仮に上部とする。次に-180cm～420cm未満では、-220～240cm未満をピーコトし、各層位ごとに最大500点に及ぶ量の出土がある。これをここでは中部と仮称する。さらに-420cm以下であるが-480～500cm未満の約250点をピーコトに各層位で出土が認められる。これを下部と呼ぶこととする。なお中部が下部と接する-340cm～420cm未満は出土量が落ち込み、あたかも向者を隔てているようであるが、後に述べる石器の組成などから、現段階では一

420cm未満までを中部とした（図2）。

以上出土量の違いから3つの段階を設定したが、出土のほとんどない上部については今回検討外として、中部と下部との違いをいくつか列挙しておきたい。まず数量的には、中部と下部の該当層位の厚みを差し引いても、圧倒的に中部の方が上であるが、製品については相対量でも絶対量でも下部が上回っている。また製品の中でも、過去に述べたように拇指状搔器とした小型のスクレイバーは下部に集中して見られる。さらに前回指摘した小型で板状の原石や両側打抜による剥片も下部に片寄る。そして今回取り上げる石核であるが、これも中部と下部ではっきりと違いが出ており、下部では全体でもわずか10点以下に留まり、逆に上部では20cmの各層位ごとに2～15点程の出土が確認されている。尚これらの違いは単に總体の差ということではなく、20cmの人工層位でも、中部と下部のそれぞれで同じ様な傾向を示しており、中部石器群と下部石器群の違いと認識して良いと判断している。但し小型板状のものを除けば、原石がほとんど確認できない点は共通するものであった。尚黒曜石以外の石材は下部よりも中部・上部に割合が片寄っている。

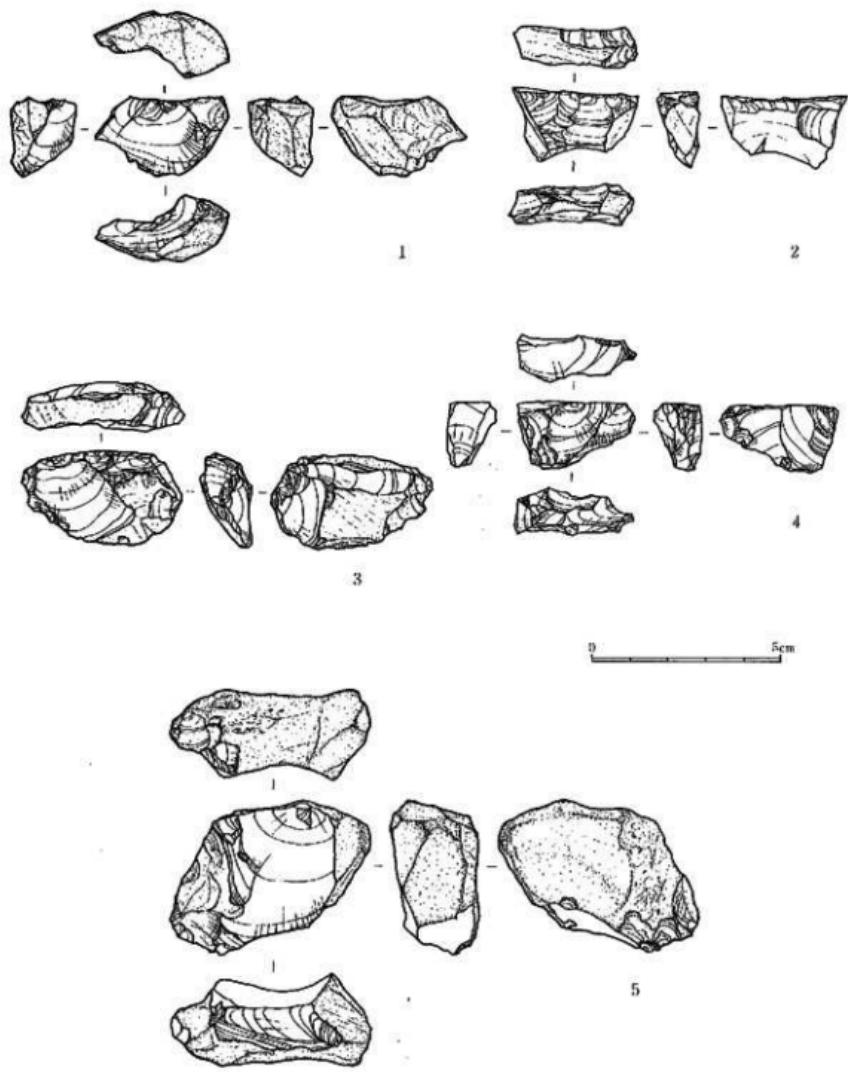
3 石核の紹介

さてこれまでの報告においては、主に下部の石器を取り上げ、その素材に注目し分類を試みたわけであるが、石器や素材剥片のものではなかったはずの原石、あるいは剥片を打ち欠いた残り津である石核がほとんど存在しないことについても触れた。ところが今述べたように、中部ではこのうち石核が現れるわけである。まずはこの一部を以下に紹介したい。

第1図1は自然面が多く残っており、平坦な自然面を打面にしての剥離の痕がある。一回の剥離痕しか確認できない。また自然面から推察して本資料からはそういう大きな原石は想像しがたい。2も自然面を残した例である。上面にある剥離は打面調整を意識したものかどうか分からぬが、いずれにしろ自然面からの剥離も認められる。これも予想される原石はそう大きなものとは思えない。3も自然面を多く残し、やはり多方向からの剥離が行われている。1、2同様もとの原石はそう大きくはないだろう。4は自然面を残さず、多

第1表 掘出石器一覧表

図版番号	グリッド	レベル	重量(g)	特徴
1	III-1	-224～229	9	自然面からの一回の剥離
2	III	-260～270	6.3	自然面からが中心の多方向からの剥離
3	I	-240	13.4	自然面からが中心の多方向からの剥離
4	III-2	-300～310	6.1	剥離面を打面にした多方向からの剥離
5	I 押-1	-185	50.5	柄原岩陰遺跡では最大の石核



第Ⅰ図 桥原岩陰遺跡出土の石核 (2/3)

方向からの剥離が認められるものである。平坦な剥離面が打面ともなったようである。5のような大型のものは、柄原岩陰遺跡では特異な存在と言え、208以上の石核はこの資料を含め2点のみである。剥離の回数は少ない。

総じて、打面が自然面のものや剥離面のもの、そして打業の方向も回数も様々な資料があるが、このように打面が一定せず、多方向からの剥離を行う方法が彼らの流儀だったのかもしれない。また予想される原石も小型と思われるものが多く目に付く。5のような大きさの資料は、むしろ異質である。また下部のものについては今回図示していないが、重量は第1図1~4と同等かそれ以下のものが多く、剥片剥離の方法もこれらに似るものであった。

4 遺物からみた 黒曜石入手と 使用の変化

では、以上のことから一体何が見えてくるだろうか。現時点で考えられる柄原岩陰遺跡での黒曜石入手と使用の概念を、黒曜石の持ち込みの状態と石器製作の手順を念頭に置きながら図に示してみた(第2図)。

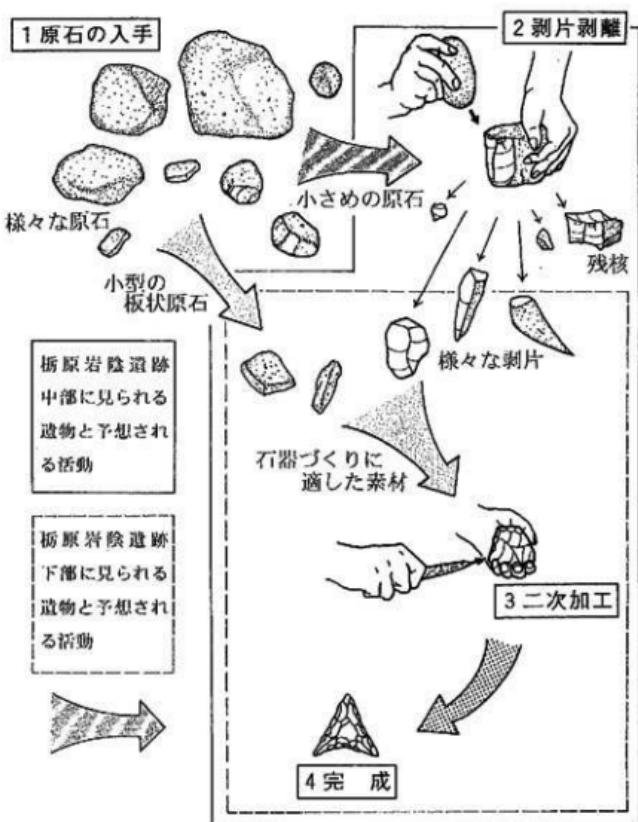
まず石器製作の手順を大きく4つの行程、1原石の入手、2剥片剥離、3二次加工、4完成と分けると、下部、中部ともいざこかの黒曜石原産地でこれを入手していたことは確かであろうが、そこから柄原岩陰遺跡に搬入する間には両者で異差が現れている。

下部では様々な剥片や小型板状原石からなる石器の素材と、そして完成品が見られるところから、3の二次加工は当地で行っていたが小型板状ではない通常の原石は、どこか他の

場所で2の剥片剥離をしていたと考えられる。つまり素材を持ち込んでいるのである。

これに対し下部では残核が確認できることから、2の剥片剥離の行程もここで行っていた可能性が高いと考えられる。また先にも述べたように実際の原石も小型のものが多いと想されるが、現在でも黒曜石原産地付近では20~30gを越える原石の採取もそう難しいことではないのだから、彼らにとっては小さい原石の方が都合が良かったとも思える。但し石器の全体量に対する石核の数や、剥離の大ささと実際の製品や素材剥片の大きさなどを考えあわせると、より大型の原石などは別の場所で2の剥片剥離を行っていた可能性もある。また小型板状の原石の持ち込みは減っている。

このようなことから、比較的小型の原石の持ち込みと、これに加えての剥片素材の持ち込みが考えられる。



第2図 柄原岩陰遺跡における黒曜石運用の概念図

ところで黒曜石原産地ではない柄原岩陰遺跡のような場所への石材の持ち込みには、原石を持ち込む場合、製品の一歩手前である剥片などの素材を持ち込む場合、そして製品を持ち込む場合の大きく分けて3通りが考えられるが、ここではそれぞれにどんな利点と不利な点を見出せるかを整理して、柄原岩陰遺跡の場合と比べてみたい。

まず原石ごと持ち込む場合は、消費する際の状況に応じた石器製作が出来ることになる。つまり環境に対して最も柔軟である。しかし剥片剥離作業で生じる小破片や失敗した場合の石材、残り津である石核、あるいは割ってみた結果原石そのものが、石器製作に適さない場合など、結果としては無駄な分量も持ち込むことであり、運搬に際しては、当然無駄な重量を背負うことになる。

次に素材を持ち込む場合。これは原石を持ち込むよりも遙かに無駄が少ない。つまり素材になったものであれば、石器製作に適したものを選択し、当然石核なども持ち込まずに済むのである。そして、状況に合わせた石器製作もある程度は可能であろう。運搬に際しても、重量をかなり軽減出来たはずだ。

最後に仕上げた製品を持ち込む場合である。無駄を出さないという点や運搬時の軽量化からは、最もすぐれた戦略となろうが、この場合は、実際に使う地点での石器の種類やその割合をあらかじめ計算しなければならず、さらに別の手段による石器石材の入手が無い限り、その場その場に対応した石の使用がしづらく柔軟性に欠けたものとなってしまうだろう。

これに即して考えれば、素材が持ち込まれている下部では、ある程度の柔軟性を保てる範囲内で、極力無駄を少なく重量を減らそうとした様子がうかがえる。中部では原石が見られることから、やや柔軟性を重視したとも思えるが、あまり大型の原石が見られないのは、やはり重量の軽減を考えたことだったのかも知れない。もっとも両者を通じて、製品の持ち込みがなかったとは言い切れず、実際にそのような場合もあり得ただろうが、基本的には小型板状の原石を含む石器の素材、中部の時期においてはそれに加え小型の原石そのものを所有し、それを必用に応じた道具に加工していた姿が思い浮かぶのである。

5 佐久地域における石材入手法の変化

以上柄原岩陰遺跡に住んだ人々が、どのような形態の黒曜石を入手し運用していたかについての予測は立てられたが、では彼らはその黒曜石を自ら採取していたのだろうか、それともどこかで誰かと交換していたのだろうか。

このような問題について、堤隆氏は自ら調査された

御代田町塙野西遺跡群の調査の中で、同遺跡群を中心とした黒曜石の利用頻度などから縄文時代の石材入手の変化について述べられている。これによると前期初頭では各地で在地系の石材を多用していることから「多地域の集団とのコミュニケーション」の存在は認めつつも、黒曜石をめぐる集団間の交換システムはより積極的には機能しておらず、20~30km圏内で石材獲得活動が日常の生活行動スケジュールに組み込まれる「埋め込み戦略」を想定し、やがて黒曜石の利用率が高まりを見せる前期中葉になって「交換による黒曜石供給が一定程度なされた」とした。またその後各地で黒曜石原石の貯蔵例が現れることなどから「前期中葉より黒曜石の交換システムが積極的に機能しはじめ、中期に至っては、交換をめぐる連鎖のなかから内分配システムが出現した」という仮説を提示された(堤1994)。さらに私見を付け加えておくと、やはり塙野西遺跡群の川原田遺跡の例では、中期においても遠距離に残された石核の大きさや剥片剥離の過程は柄原岩陰遺跡の例よく似たものであるが、一方で実際に北相木村の中でも、中期の集落が既っていると思われる幾つかの地点からは、20~30mを越すようなより大型の原石が幾つも採取されている。このように少なくとも中期ごろには、大型の原石が、単なるその土地での消費という以外の役目を持って存在していたことは確かかと思えるのである。

さて、柄原岩陰遺跡の下部については草創期末、中部については早期中葉という時期を想定出来るが(註3)、仮に積極的な交換システムが前期中葉まででは存在せず、この時期も「埋め込み戦略」で考えてみると、石器石材のほとんどを黒曜石としている当遺跡では、縄文時代草創期末から早期中葉かけて前期初頭よりもやや広範囲(柄原岩陰遺跡から黒曜石原産地である和田岬までは直線距離で約40km)での移動生活が予想できる。そう考えると、無駄な重量を出来るだけ省こうとする傾向が強いことに余計な説明を加える必要も要らないというものであるが、どうであろうか。特に下部、すなわち草創期末ではほぼ素材のみを持ち込んでいたことや、黒曜石以外の石材利用が極度に少ないことなどから、この傾向が強いように思われる(註4)。

いずれにしろ、一口に「縄文時代」と言えども、黒曜石の入手や流通に関して、決して一様なスタイルではなく、時期あるいは地域ごとの違いも大きかったことが予想される。但し柄原岩陰遺跡の中で上部、中部、下部と異なる様相が見て取れる背景には、黒曜石の搬入や使用の違いのみではなく、岩陰の使われ方の変化も考慮すべきであり、これには柄原岩陰遺跡の様々な遺構・遺物を考えあわせていく必用がある。

そして、地域の歴史を理解するヒントが数多く散りばめられているであろう、佐久の地に残された遺跡にも、どんどんと貢献していくいかなければならないと考えている。

謝辞

今回も掲載に際しお手数をお掛けし、御代田町各遺跡出土の資料を実見させていただいた堀隆氏に深く感謝致します。

註

- 註1 この地点に資料を限定している理由や第1表の出土グリッドの位置については、藤森の報告を参照していただきたい（藤森 1996）。
- 註2 結果的に過去に想定された区分とよく似たものとなったが（西沢・佐々木 1982）、これらとの整合性や名称の統一を今後行っていくべきであろう。
- 註3 下部に伴う土器は多柵文系土器群（中でも表裏柵文土器）が多く、中部には押型文土器系土器群が多く伴うことが指摘されている（西沢 1982・宮下 1985）。
- 註4 桜原岩陰遺跡下部と同時期と思われる本曾郡上松町お宮の森遺跡でも、やや異なる視点からではあるが、やはり集団の広域移動と黒曜石獲得の埋め込み戦略が想定されている。

引用・参考文献

- 堤 隆 1994「縄文前期初頭の石器について」『下條堂—縄文前期初頭の集落遺跡調査』御代田町教育委員会
1994「前期初頭と前期中葉の石器について」『塙田遺跡』御代田町教育委員会
西沢寿晃 1982「柄原岩陰遺跡」『長野県史考古資料編(1) 東信地区』
西沢寿晃・佐々木明 1984「柄原岩陰遺跡の調査研究経過」『柄原岩陰遺跡発掘調査報告書—昭和58年度—』北相木村教育委員会
藤森英二 1996「柄原岩陰遺跡出土の拇指状搔器について」『佐久考古通信』No.68
1997「柄原岩陰遺跡の黒曜石製石器の素材について」『佐久考古通信』No.70
宮下健司 1985「長野県柄原岩陰遺跡」『探訪縄文の遺跡 東日本編』
上松町教育委員会 1995「お宮の森裏遺跡」

Sā minasan, saikou no
KOKYOUSEKI dayo.
Korekara wa "KOUKAN" no
jidai dayo.

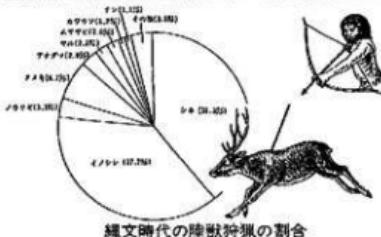


動物考古学と縄文文化 — 西本豊弘先生講演会 —

去る2月21日（土）佐久考古学会主催の考古学講演会「動物考古学と縄文文化」が小諸市民会館で開催された。講師は日本の動物考古学の第一人者である国立歴史民俗博物館助教授の西本豊弘先生である。

先生からは、近年の青森県三内丸山遺跡や滋賀県栗津貝塚などの検討例から、縄文時代の狩猟や植物採集の実態について詳しくお話をいただくことができた。また縄文時代に、ウリやヒョウタンなどの栽培農耕（ホーティカルチャー）が行われていたことは確実らしい。アブの飼育の可能性も考えられるという。

近年の目覚ましい動物考古学の成果からは、從来の縄文社会のイメージを大きく変更せざるを得なくなっていることが、先生のご講演から感じられた。終了後は、先生を問んでつたや旅館で懇親会がもたらされた。





カーチャの旅

1 カーチャ日本へ

新潟空港はみぞれ混じりの荒れ模様の天気だった。それでもウラジオストック発エアロフロートSU807便は30分遅れただけで滑走路に滑り込んだ。98年2月8日、カーチャとの3年ぶりの再会である。

1993年夏、私はロシア沿海州ウスチノフカ遺跡にいた。うっとうとしたタイガが続き太古の面影をとどめるこの場所で、ロシア科学アカデミー極東支部と東北福祉大学が共同で進める発掘調査に参加するためだ。

私はその発掘に来ていた母娘二人と知り合った。母はボーキー・オリガ、娘はカーチャという。オリガはウラジオストックにあるロシア科学アカデミーの図書館司書、娘のカーチャは10歳の小学生だった。我々がうちとけるのはそういう時間は必要でなかった。その後も私は2度ほどウスチノフカの発掘に参加し、二人との親交も少しだけ深まった。カーチャはクリスマスカードなども欠かさずくれた。私は、知り合った最初の頃から、二人を日本に招待したいと漠然と思っていた。

今回、長野オリンピックの開催という機会を利用し、オリガとカーチャを日本に招待することができた。Dreams come trueである。二人は7日間私のマンションにホームステイすることになった。問題は言葉だが、幸いカーチャはかなり英語ができるので（英検2級くらい？）、意志の疎通はさほど問題なくできた。

ただ、ロシア人を個人招待するというのは、社会主義国時代の惡き名残り（亡命の阻止など）があって、これが少しやっかいである。私たち日本人が気軽にビザをとって海外に旅行するのとは違う。

招待者はまず外務省に招待状を送り、それが本人に届いた時点で本人が現地の日本領事館に渡航を申請、さらにこちらが身元引受人となって多数の書類を外務省に出さなければならぬ。それが審査にかかりようやく本人にビザが交付されるというしくみである。今回の招待状の提出は、招聘に詳しい東北福祉大学の樋原洋さんが代行してくださった。そして私は外務省への18枚の書類（行動予定表、身元引受証、本人との交

際を示す証拠書類・滞在費概要など）を3日かかってようやく仕上げた。しかもビザ発給までギリギリだったので、新幹線で直接駅が開の外務省窓口までもっていくハメになってしまった。それでもビザが交付されたのは、入国の二日前だった。……やれやれ。

2 東京ディズニーランド、ブリクラ

二人の旅は次のような日程で進んだ。

- 1日目 前橋市へ、早田さん宅泊
- 2日目 群馬サファリパーク
- 3日目 東京ディズニーランド
- 4日目 東京タワー・浅草・原宿
- 5日目 松本城、中沢道彦さん案内
- 6日目 オリンピック観戦：アイスホッケー、ロシア vs カザフ

7日目 群馬自然史博物館、宮尾彰さん案内。宮尾家泊

- 8日目 ポーリング・スケート

- 9日目 オリンピック観戦：ロシア vs チェコ

10日～15日目 仙台

というスケジュールであった。私は仙台の東北福祉大学の皆さんに二人を預ける10日まで面倒をみることになっていた。

東京ディズニーランドはけっこう喜んでくれた。ジェットコースターのビッグサンダーマウンテンがお気に入りのようだった。私の知らぬ間にカーチャは身長178cmとなり、プロンドで15歳にしてはかなり大人びていた。ディズニーランドでは「あっ、フランス人のモデルさんだ」といわれ、3～4組の子ギャルに取り巻かれ写真をとった。私はニヤニヤして、肯定も否定もしなかった。事実カーチャはウラジオのモデルクラブでモデルのアルバイトをしているということだった。

ブリクラもはしゃいで踊った。当然、ロシアにはないものだが、少女の心を等しくシゲキするのだろう。

大竹さんの案内で長野県埋文センターを見学し、大がかりな日本の埋文の状況をちょっと覗いてもらうこともできた。





3 異文化コミュニケーションのギャップ

アイスホッケー観戦が終った夜9時すぎ、アクアウイングの空にはぼっかりと満月がでていた。「いい月だね」と私はカーチャにいうと「どこかいい月なの、満月は不吉で、不健康のサインじゃない。わかってるのツツミ」カーチャが食ってかかってきた。確かにその日は13日で、おまけに金曜日だった。私はそれは単に文化の違いだといったのだが、15歳の子ギャルに通じるわけない。機嫌も悪かったんだろう。1週間も一緒にいるとだんだんお互いの違ふところが出てくる。そんな調子のすれ違いはいくどかあった。時々はワガママでもた。私もムカツくことがあったが、年頃のお嬢さんじやしようがないか、とあきらめた。考えてみれば小学生のころはハサミ・ハサミとなつていた娘が中学生の春期になるとまるでイヤなものでも見るよう父兄をさけたが、そんなところかもしれない。

異文化的摩擦が生じないかと特に気になっていたのは食事である。私もロシアでよくてたソバのミルク煮がどうしても食べられず、やせる思いだった経験がある。だが、これについてはまったく心配無用だった。

普光寺通りのかつをぶし店の前を通りかかるといい匂いがするといってオリガが立ち止まり、おもむろに削り節のパックを手に取ると200円で買い、醤油もつけないでスナックのようにつまんで通りで食べ始めたのだった。森のふあみりいさんでソバを出してもらったときも私がひとつかみ削り節をソバに乗せてやるとなんともいえない嬉しそうな表情になった。私は数年前桜井君の結婚式でいただいたまま眠っていたハナマルキカツオパックを早速二人にプレゼントした。長野権堂であるわれたミソ・スープも「オーチン・フクースノ（とってもおいしい）」といって食べていた。

小出原市の教育委員会の原訪問順さんが東京日本橋でごちそうしてくれた寿司もうまそうに食べていた。小山岳夫さんの家族との中秋でも、二人ともけっこう箸をうまく使った。カーチャがとくに好きなのはアイスクリームとボテトチップスだ。ボテトチップスはベ

ロット一箱食べてしまうのだった。

私は彼女のことを親しみを込めてこう呼ぶことにした。「くいしんぼう」日本語のあだ名なのでたぶんわからないと思っていたら、だれかが英語で説明してしまって、すぐばれてしまった。

また、私の自宅ではオリガがボルシチを作ってくれた。しばしロシアの風情にひたった時である。

二人の旅の世話は、私ひとりではどうにもならなかつたのだが、まわりの皆さんのが心温まる配慮をてくれた。ウスチノフカ発掘に参加した中沢道彦さんは、ロシア語の勉強をかね松本城を案内してくれたり、スケートにつきあってくれた。梶原先生や東北福祉大学のみなさんも親切に二人の相手を案内してくださった。

森のふあみりいさんで泊まったときは、ちょうど同年代の舞ちゃんが話し相手になってくれ。カーチャもしばしオジさんから解放されほっとしたらしい。夜は野辺山のスナックにカラオケに。カーチャの好きな「22歳の別れ」を私がうたってあげた。翌日私は勤務だったのでカーチャとオリガには野辺山から小海線で岩村田まで帰つて来てもらった。ロシア人親子の二人だけ短い列車の旅も無事すぎた。

私の高校時代の恩師で英語教師でもある宮尾先生の小説のお宅にも二人は一晩泊めていただいた。息子さんの彰さんは、早稲田の露文を出てロシア語が堪能で、私と一緒にウスチノフカ発掘にも行った仲間である。宮尾家では炬燵でオデンなどでもてなしていただき、カーチャはファンタ、オリガはワイン、宮尾先生や私はウオトカで煙を染めながら、彰さんの歌うステンカラージンに聞き入つて夜は更けた。

さて今回、私は個人的な不幸の真っ只中にあって、二人を案内することになった。むしろ、アリケートな年頃にとまどい、時に二人の笑顔で救われ、二人の相手をひたすらすることによって、その事を一時的に忘れることができ、心が癒された。そしてこの旅が、混沌の異国で暮らす私の友人たちにとって、何より忘れられない旅となってくれたことを願うのである。



1947年ウクライナの発掘キャンプ

土偶のつぶやき



会員の身近なたより

井出正義

97年には小油町志がなんとか終わり、南佐久郡志の考古編もうすぐ刊行となりそうです。南佐久郡志の旧石器の部分では、東北大学の名譽教授の芹沢長介先生も原稿を寄せてくださっていて、本になるのが楽しみなこの頃です。

佐藤純一郎

望月町誌近世編をなんとか書き上げました。また、浅科村の大平遺跡で平安時代の住居3軒を発掘しました。ここは粘土質でかなり発掘が大変でした。

青森孝雄

佐久考古学会の遺跡発表会などは、佐久地方の遺跡を勉強できるよい機会です。また、いま日本各地で恐竜の化石や足跡が出て、驚きです。ずいぶん昔から日本列島も陸地だったんだなあ、と感心しています。

由井 明

この頃は川上村内の10か所ほどの遺跡を、孫の車に乗せてもらって巡回し、壊されていないかどうか注意しています。

幕れには遺跡発表会にも参加させてもらいました。

♪ 編集後記 ♪

オリンピックで一時期うかれていたとはいうものの、世の中善い状況である。本人の気持ちとは裏腹に、世間一般からは“趣味的な仕事”としか思われていない埋蔵文化財行政にも当然風当たりは強くなってきた。

考古学ジャーナル3月号からは「激動の埋蔵文化財行政」というシリーズが始まり、「これまでのような埋蔵文化行政の繁栄は望めない」とさえ書かれている。

土日もなく現場へ、残業につぐ残業・開発業者との対決など表面上の悲劇をマゾヒスティックなプライドとして保つ反面、本質的な議論を怠ってきたツケが、今我々に回ってきたのだろう。

(つづみ)

林 幸彦

97年の発掘では佐久市駒込の山深い場所から平安の住居3軒がみつかり、うち一軒の住居は大きな石を取り込んで作られており、何でわざわざと不思議でした。

富沢一明

97年は佐久市小田井のオークサ・パワーセンター開店に伴って、中世の集落の発掘をしました。また、ストレス性胃潰瘍で、1か月入院となりました。

原田政信

軽井沢町追分郷土館に入り、3年目になりました。97年は茂沢と油井の近世の建築物も調査しました。また、軽井沢の西部小学校で火おこしの体験学習講座を小学生相手にやりました。今後も、こうした体験学習の機会を増やしてゆきたいと考えています。

星野保彦

97年は小諸で二つの発掘がありました。五領B演説というところを掘りましたが、ここは文字通り古墳時代初頭の集落でした。6軒の住居が出て、遺物も豊富でした。また、与良では城跡も掘りました。

由井茂也

先日、私の祖父が書いた古い手紙がみつかり、また私の祖父が写し取った古文書もでてきました。その中には、江戸幕府のあまりの專制政治のために佐久郡の村人が逃げ出すという記述があり興味深く感じました。

この頃、岡本勇さんが亡くなったということですが、岡本さんは芹沢先生や私といっしょに吹雪の矢出川遺跡で細石器をみつけた一人です。かつて芹沢さんは岡本さんのことを麗志だといっていました。なにか岡本さんが死ぬ時は赤い布にくるまれて死にたいといっていたそうですが、麗志の岡本さんらしい言葉だなと思いました。ご冥福をお祈りします。

佐久考古通信 No.72

発行所 佐久考古学会

〒384-01 長野県佐久市桜井879
曰田武正方
郵便番号 (新)00570-9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者 井出正義

編集者 堀隆

印刷所 はおづき書籍印刷



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡(1) 世界遺産 ポルブドゥール仏教遺跡 一インドネシア・ジャワ島	1
98・99年度 新旧役員あいさつ	2
佐久地域の繩文時代中期文化研究に向けて ~八ヶ岳を越えて~	藤森英二 4
25年ぶりに見た神子柴の右器 伊那谷の青い空	唐沢様孝 7
信州謡歌 伸子柴遺跡の石器にふれて	安藤正後 8

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 1



インドネシアの首都ジョグジャカルタの北西42km、はるかに続く水田地帯に小山のようにそびえるのが、世界遺産ポルブドゥール仏教遺跡である。

ポルブドゥールは、日本では奈良・平安時代にあたる8世紀後半から9世紀前半のシャイレンドラ王朝の時代に建立された遺跡である。しかし火山噴火による土砂はその姿を地上から消し去った。ふたたびその姿を見たのはイギリス人総督スタンフォードで、往時から千年の時を経た1814年のことである。

ポルブドゥールの正方形の基壇は一辺124mあり、



ポルブドゥール遺跡正面

200万個ともいわれる安山岩のレンガが積み上げられ高さ42mのモニュメントとなっている。その構造は10層からなり、下層から「欲望の界」「有形の界」「無形の界」の3つの世界から構成される。「欲望の界」には愛憎や罪と罰など煩悩に惑わされる現実の生活がレリーフとなっている。「有形の界」には釈迦の生涯を描いた1300点もの美しいレリーフがある。屋上の「無形の界」はいわば悟りの世界で、釣鐘型の卒塔婆が72あり、その中に鎮座するブッダを覗くことができる。

19世紀以降、ポルブドゥールの発掘調査は徐々に進み、またユネスコの援助によって復元整備もなされ世界遺産となった。しかし1985年、ポルブドゥールで爆破事件が発生した。決定的な破壊状況ではなかったが、そうしたテロ行為の与えた影響は深刻である。これはイスラム教徒の犯行とされ、多数の宗教が共存するインドネシアの複雑な状況の一端をのぞかせた。

今年になっての民主化運動はスハルト政権を失脚に追い込んだものの、インドネシアの政情はきわめて不安定であり、日本からも渡航不可能な状況にある。その巨大なモニュメントは、ふたたびこの国に平安が訪れるることを祈るかのようにたたずんでいる。



釈迦の生涯を描いた「有形の界」の美しいレリーフ



会長就任のごあいさつ

藤沢平治

井出正義会長よりバトンを渡される事になり、いさか戸惑っております。30年の歴史と、その間多くの方がたゆまぬ研究と実績を残されてきた学会に、もともと勉強不足の上に、この29年間運動クラブの顧問に追われ、門外漢の私が、このような形で入ること自体礼を欠くことと考えます。佐久の地に来て35年、会員の皆様の心温まるご温情に、少しでもおかえしできる事があればと思うばかりです。

登呂遺跡の発掘が、戦後の新たな歴史の見方の始まりといわれ、考古学の果たす役割が広く認識されてきたと思います。しかし、一方経済・開発優先の立場からは、発掘調査への批判的な動きもまた強くなっています。市町村誌が発刊され、努力されておられることに敬意を表しますが、このような時期であるからこそ、調査・保護保存だけでなく、長年の調査・研究の上に、その必要性を広く理解して頂くための活用を更に考えなければと思います。

由井茂也氏・井出正義氏をはじめ会員各位のご指導を頂き、この任を果たしたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。

新事務局長として

林 幸彦

1970年設立された「佐久考古学会」は、2年後の2000年に設立30周年を迎えます。この年に佐久市倶田遺跡を本学会が発掘調査し、1981年には郷土遺跡出土品展を開催しています。以来、本学会の諸先輩・仲間たちは、個々の研究テーマの追求、会員相互の連絡、歴史や自然を守る活動を佐久地域に根ざして強めてきました。柏原遺跡・井上遺跡・後家山古墳等佐久考古学会や会員が関わらなければ人知れず消滅してしまった遺跡は枚挙にいとまがありません。

佐久の山河を背景に、7市町村を巻き込む「中部横断自動車道」の工事が始まります。山を削り山畠を埋め立てる開発、それに伴う遺跡調査の大規模化・経費の増大は、開発側をして文化庁・マスコミから遺跡の錢喰い虫・調査の切り捨て・遺物の切り捨てを言わしめている状況です。不況の打開策で大型公共事業が予算化されました。世をあげて効率を至上とするリストラが叫ばれている中、錢喰い虫の「発掘調査」が集中砲火を浴びせられることは目に見えています。が、自治体の文化財保護部局は、手枷足枷の状況下にあり、遺跡保護の面でも本学会の存在する今日的意義には重いものがあります。

6年間の長さにわたり白田事務局長たいへんご苦労様でした。その後の大任で責任を感じます。会員のみなさまのご指導をよろしくお願ひいたします。



事務局長退任のあいさつ

白田武正

1992年度から事務局長を仰せつかり、3期6年間にわたり会務を遂行してきましたが、この間、事務局幹事の皆さんにはもとより、多くの会員の皆さんから学会活動にご支援とご協力をいただきましたこと厚くお礼申し上げます。

さて、私事ではありますが、この度理賛文化財関係の仕事を離れ、12年ぶりに学校現場へ復帰しました。新しい任地は、千曲川源流の郷で知られる川上村の秋山にある第二小学校です。川上村には元会長の由井茂也さんをはじめ由井明さんなど大先輩がおられ、大変心強く思っています。また、幾度となく訪れた大深山遺跡があったり、学生時代には、宿州貯金の横尾遺跡で発掘調査に参加する機会などもあって、思い出多い地でもあります。

このように何かと縁深い川上村で、次代を担う子どもたちの教育に専念することになりましたが、考古学については立場を変えて勉強を深めていきたいと思っています。また、学会活動についても、今まで以上に地域に密着して参加協力していくつもりですので、今後とも一層のご指導をお願い申し上げ、事務局長退任の挨拶に代えさせていただきます。

これからの佐久考古学会

—会長退任にあたって—

井出正義

戦後、日本史の記述が、「大むかしの生活」として、石器・土器を用いた縄文時代の竪穴式の生活からはじめられ、それがさらに、岩宿・矢出川の旧石器時代にさかのぼることが明らかとなり、考古学が日本歴史の基本に位置づけられ、その理解と学習が必須のものとなつた。

当時の教師も社会人も、同好の友を求めて、考古学的な観察・採集の活動をはじめたが、そこには限界があり、基本的な考古学の知識と発掘調査の技術を身につけた指導者が必要であった。県教育委員会は東京大学考古学教室等に現職教員を、内地留学生として派遣し、在地指導者の育成に努めた。長野県考古学会の第1回総会は昭和37年に富士見町井戸尻遺跡で開かれた。39年には県考古学会佐久部会ができ、45年に「佐久考古学会」の組織が完成した。

こうした地域の熱心な考古学研究者にとって、大学の考古学教育を受けてきた若い藤沢平治の佐久定着は、大きな期待をもって迎えられた。藤沢の野沢南・北高校に於ける考古学クラブの活動は、黒岩忠男の野沢中学校考古学クラブの活動と相まって、佐久に多くの優

秀な考古学徒を育成する起爆力となった。若い彼等は大学に学んだ後、農業構造改革事業、関越自動車関連事業等に伴う発掘調査、矢出川遺跡の国指定等にその力を存分に發揮し、また県考古学会の事務局担当の任務もありっぱりに完遂した。この有力集団の結束によって、藤沢会長のもと、これからの佐久考古学会の活動に大きな期待がもたれるのである。

佐久考古学会発足当時と現在では社会状況も、会員の構成も大きく変わっている。中堅・若手の会員は考古学の専門教育を受けた各自治体に所属する専門職員で、研修の機会にも恵まれている。調査研究の成果は、報告書や学会誌・専門書に発表すれば足りる。このような現状に於いて佐久考古学会が、一つの軸線に立たされているとも考えられる。

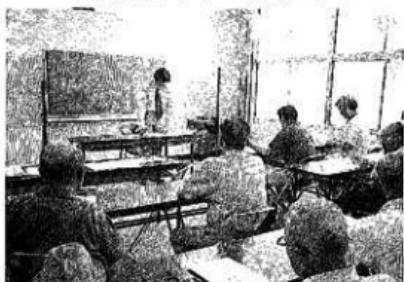
佐久考古通信、遺跡発掘調査報告会、県内遺跡調査の見学会、考古学的調査技術等の講習会・講演会等、地域住民との接点となるような機会を一層有効に充実・発展させる運営努力ができたらと思われる。

2年間の無力を深くおわびし、みなさまのあたたかいご協力に厚く御礼申し上げます。

佐久考古学会総会報告

平成10年6月20日、岩村田の浅間会館にて佐久考古学会総会が開催された。議事は羽田伸博氏が議長となり、スムーズに進んだ。なお、今回の役員改選は井出正義会長、白田事務局長とともに、辞意を表明され、会の役員体制が大きく入れ替わることになった。

新会長には藤沢平治氏、新事務局長には林幸彦氏が満場一致で選出された。80歳という高齢で会長職をお引き受けいただき、円満な会の運営を推進された井出前会長、職務柄多忙にも関わらず、会務を切り盛りされた白田前事務局長、本当にお疲れ様でした。



1998・99年度 佐久考古学会 役員

顧問	山井茂也
会長	藤沢平治
事務局長	林幸彦
地区委員	原田政信(怪井沢・御代田・小諸) 倉見渡(北御牧・浅科・立科・望月) 木内捷(佐久市) 羽田伸博(佐久市)
会計監査	佐々木廣雄(白田・佐久町・千人穂・小海) 藤森英二(南相木・北相木・南牧・川上) 由井明 井上行雄
事務局幹事	上原学(小山店夫) 三石宗・森泉かよ子 桜井秀雄(佐々木宗昭) 白田武正(花岡弘) 小林眞寿(堀隆) 高沢・明(福島邦男)

電話番号

〒384-0156 佐久市桜井632-10

林 幸彦 方

☎0267-63-1963

佐久地域の縄文時代中期 文化研究に向けて

～八ヶ岳を越えて～



藤森英三

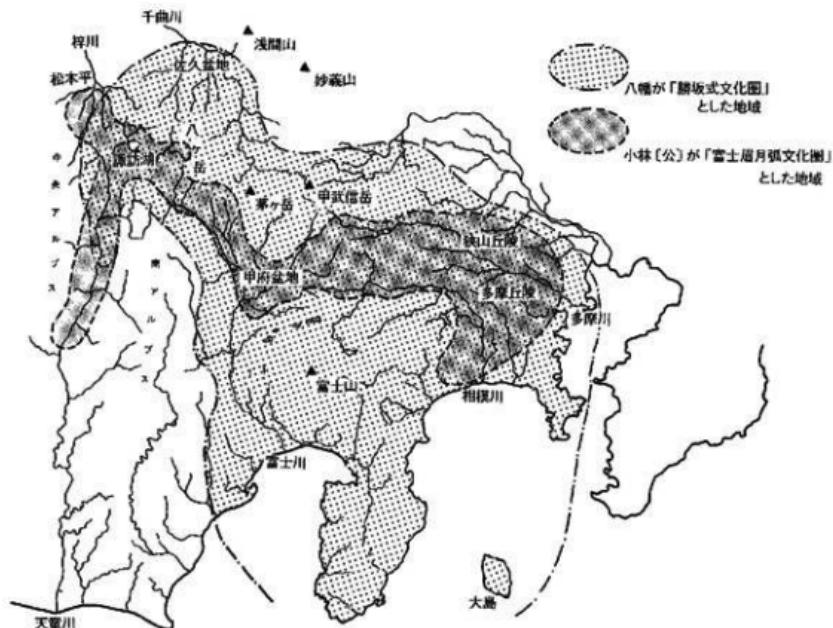
1 八ヶ岳の向こう側

書き出しから個人的なことで恐縮するだいだが、諏訪市に母の実家がある関係もあってか、私自身この地方の遺跡によく触れてきた。学生時代は少し足を延ばし、松木平などでも遺跡を掘り資料を見て歩いた。特に縄文時代中期に属するどろどろとした不思議な土器、細からいくらでも出てきそうな打製石斧や豊富な黒曜石の数々。加えて諸所「縄文農耕論」などが、それを見おろす壮大な八ヶ岳の峯々と相まって、何か強烈に魅せられるものがあった。いや実際、佐久に移り

住んでからも、この気持ちが強かった。西にそびえる八ヶ岳の向こう側に憧れていたのだ。

縄文時代中期における、長野県を含む広範囲での遺跡数の増加、あるいは出土するの土器の力強さは今更言ふまでもなく、これに興味を引かれるというの方が多いのが納得して下さるだろう。この縄文時代中期の地域性を指す言葉の一つに「井戸尻文化」というものがある。戸沢充則氏は縄文時代を構成する多様な地域文化の一つとして、単なる同七土器型式の分布域ではなく、總体的な文化圏としてこれを掲げた。現在は他の研究者でもこれを利用する場合がある。第1図と第1表を見ていただきたい。これは各研究者の概念や言葉を並べたものである。無論採用された年代にも幅があり、それぞれの立場や歴史観に違いはあるが、大方の地理的範囲は一致しているようにも思われる。

では佐久地域はどうであろうか。実はこの中で明確に佐久の地域を含めているのは、実際に現地を歩き『南佐久郡の考古学的調査』『北佐久郡の考古学的調査』を書かれ、さらに後に述べる川上村大深山遺跡を調査した八幡一郎氏のみのようである。実は私自身「中部高地における縄文時代中期の時期区分」(『信濃』49-4・1997)という論文の中で「資料の蓄積が相対的に少な



第1図 地理的概念図

い佐久地方」と書いて佐久を省いてしまっている。実はこのような話を調査出身の後輩としているが、やはり彼らも佐久についてあまり目が向いていないようであった。もっともこのような概念や地理的な縦引き自体にも問題が多く、そうむきになる必要もないのかも知れないが、佐久に来て2年もたつと、八ヶ岳を挟んで調査地方に隣接し、埼玉・群馬そして山梨各県に接する当地方がなぜ?という気持ちにもなってくる。ではなぜ、先の論文をまとめる時点で、私は佐久を省いてしまったのか。自分の無能をさらす覚悟で、私見を多くに含んだ研究史から考えてみた。

2 高まる気運 ~1960年代前半まで

先の論文の時も、自分の中には八ヶ岳西南麓が特別の地域という先入観があったのだが、そもそもこの縄文時代中期の特異性を意識した先駆けになるのが、調査地方での調査から生まれた、鳥居龍藏氏による「山岳狩猟民の文化」といえよう。これが1924年である。その後も調査地方では、後に「尖石の鬼」とまで言われた宮坂英氏の茅野市尖石遺跡の発掘が1930年には始まっており、続く1940~50年代にはやはり宮坂氏を中心とした弓削尾根遺跡の発掘が行われ、集落研究に一石を投じている。やがて「井戸尻文化」の語源ともなった富士見町井戸尻遺跡群が藤森栄一の農耕論とともに姿を現した。これらは今日的には必ずしも大規模な発掘とは言えないものもあるが、それぞれが中期の代表的な集落址となり、その上に重要な見解が提出さ

れ、縄文時代研究史では今尚大きな位置を占めている。このようにこの地域には、1960年代前半には中期文化解明への機運が高まっていたようである。

しかしそれは何も調査だけではなく、各地にあった。佐久でいえば八幡氏の功績は大きいと言える。氏は1920年代から佐久の各地で調査をされ、1928年に『南佐久郡の考古学的調査』さらに1934年には『北佐久郡の考古学的調査』を世に出している。この両著からは今日でも得るところが多い、名著である。そしてこの間に調査された小諸市寺ノ浦遺跡、御代田町宮平遺跡などの成果から、既に佐久北部から上小地区での歴史住居の繁栄が説かれていた。さらに1950年代には、川上村大深山遺跡を調査している。先頃刊行された『南佐久郡誌』では資料の再評価もされているが、加えて地域住民とともに歩んだ調査に対し、今一度その学史的価値を評価すべきであろう。いずれにしろ八幡氏が1964年に「勝坂式文化圏」という概念を生み出している背景にはこのような佐久での調査があったのである。そして現岡谷市出身であり、先の『調査史』の調査にも参加した上で、縄文時代中期の佐久を調査地方などと同一文化圏に含めた氏の論には説得力もあるといふものである。八幡氏には、八ヶ岳などたいした障害にならなかつたようだ。

3 「縄文王国」の出現 ~1960年代後半から

続く1960年代後半からは大規模な調査が中・南信で相次ぐ。伊那、諏訪、松本平各地域で高速道路の建設

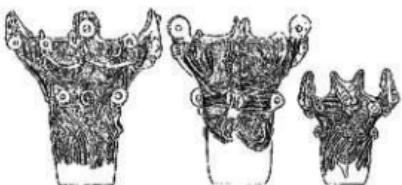
第1表 各研究者の空間的把握

提唱者	鳥居龍藏	八幡一郎	藤森栄一	戸沢光則	小林公明
名称	山岳狩猟民の文化	勝坂式文化圏	(井戸尻文化)	井戸尻文化	富士眉月弧文化圏
空間的範囲	山岳地帯。中でも下伊那・上伊那・松本地方、諏訪から山梨・多摩川上流地方は「同一の色彩がある様に思われる」としている。	第2回参照 但ここに示した範囲も仮説とされている。	八ヶ岳山麓・茅ヶ岳山麓・天竜川段丘・梓川扇状地・伊豆・相模・山梨・西関東の湖沼樹木林帯	中部高地から関東地方西部としているが、より細かな地域性の検討の必要性を述べている。	図2参照
中心的地域	諏訪・八ヶ岳周辺・伊那谷及び松本平	有孔鉗付土器の多寡が指標になるのではないかとした。	特に言及していない。	八ヶ岳西南麓を「象徴的」な地域としている。	八ヶ岳南麓

や大規模な圃場整備によって、数多くの中期集落が姿を見せ、その繁栄ぶりを見せつけた。諫訪市荒神山遺跡、伊那市月見松遺跡等々、枚挙に暇がない。このような大規模開発が先行していた地域が、佐久の資料を相対的に少なくしたのは事実であろうし、農耕論といったセンセーショナルな問題をはらみつつも、数々の優品の出土を見ながら続いた縄文時代中期の研究は、「井戸尻編年」を契機として開東編年を脱却し、地域ごとの土器編年確立が花盛りであった当時、出土量の多い地域に目が向いたのは当然であったのかも知れない。言ってみれば1960年代にはすまいつつあった縄文時代中期文化への関心は、そのまま高度成長期の中、南信地区での開発行為による発掘とも重なり、研究の歴史は共有しながらも、佐久地域（あるいは東信地方）よりも中・南信地方に比重が片寄っていたのだろう。八ヶ岳は高くそびえていたようだ。加えて80~90年代にかけても、茅野市棚畠遺跡、塩尻市粗原遺跡など大規模発掘は続き、多くの資料をもたらしている。縄文時代の地盤文化の一つとして「井戸尻文化」を掲げた戸沢氏は、後に「縄文正岡」という言葉まであてている。私自身、先に上げた論文で、当初は対象に考えていた大深山遺跡をも佐久地域一括で省いてしまったのは、本だ八ヶ岳を東に越えないという流れの中にあったとも言えよう。先の言葉を借りれば、「王国」に対する「属国」といったような、私は佐久に対してそんな程度の認識しか持たなかつたのである。しかしこの時に、後に述べる川原田遺跡の資料などを目にしていたのだから、怠慢といった方があたっているかも知れない。

4 八ヶ岳を越えて ~特に1990年代から

もちろん現在では、佐久でも他の地域に勝るとも劣らない規模での発掘調査や、その後の綿密な研究も決して少なくない事を知った。もちろん以前から発掘調査は多くなされているが、特に90年代に入り多くの報



第2図 「焼町土器」(川原田遺跡出土)

告書が刊行されている。やはり圃場整備や、交通網の発達による開発が大きく関わっていたのである。ちらもまさに枚挙に暇がないくらいである。そして各市町村などでも、市誌や町誌が相次いで刊行されている。このように資料の不足もとうに過去の話である今日、これらを如何なる文化の遺産と見るか、じっくり検討できる時期に来ている。いや既にそのような研究も多く発表されているのだが、少なくとも私自身はようやくその見方に到達できたようだ。

もちろん右へ習えて八ヶ岳西南麓（あるいはその他の地域）と同じものを導き出そうというのではない。現に佐久地域を中心で独自に展開する土器（型式）も見出されつつある。特に御代田町川原田遺跡の中期中葉の住居址からは、佐久の中期文化を象徴するような土器がまとめて出土しているが、佐久地域を分布域の中心にもつこの土器は「焼町式土器」として報告もされている（第2図）。その名称はともかくとしても、この土器を中心にして、佐久地域の中期の土器を見直すマーベンも起き、これは中期前葉にも後葉にも及んでいる。先日刊行された『御代田町誌』ではこの状況が総括されており、特に土器を時間的な前後関係の物差しとしてのみではなく、各地域での違いを把握し、地域ごとの文化交流の指標にするような研究は、幾つかの土器型式分布図の接点とも言える佐久地域の特徴とも言えるかも知れない。もちろんこれまで



写真1 八ヶ岳は時に厳しく時に険しく、私の前にそびえる

何度も指摘されてきた中期末からの敷石住居の濃厚な分布は言うまでもないし、南佐久では「石棒文化の中心地」と『南佐久郡誌』でも述べられているほど石棒の発見が多いようであり、今後注目すべき地域性であるかも知れない。また個人的には、八ヶ岳や和田崎近辺の黒曜石が、群馬県側に流れる地としての佐久の立地も大いに気に掛かるところである。無論これらの地域性も、よりマクロにあるいはよりミクロに見ていく必用はあるだろうが。

今、4つの車輪を付けた鉄の塊で、私は八ヶ岳をいつでも越えられるようになったが、ようやく本当の意味で八ヶ岳を東に越えて、佐久の地に来たような気がする。佐久地域を南北に貫く高速道路の建設が始まろうとしている、現在においてようやくである。



5月9日㈯の朝9時40分、私の車へ林茂樹先生に向乘していただき、駒ヶ根市のご自宅を出発いたしました。行先は、伊那市上伊那郷上館です。

林先生と、佐久考古学会の堤隆さん・角張淳一さん・須藤隆司さんが、神子柴遺跡の石器を実見しながら討論することとなり、私が林先生の迷路などをさせていただきました。

当日は五月晴れで、久しぶりに青空を見ることができました。林先生に道案内をしていただき、県道18号、伊那生田坂田線を伊那市に向かって、車を走らせました。

途中林先生は、「この道の左側は弥生時代の遺跡ですね、右側は绳文時代の遺跡なんだよ。」などと話をしていただけ、その度に私は、車を道路の脇に停車して林先生のお話を聞き入っていました。ゆっくり、ゆっくり、そんなことを繰り返しながらの伊那路でした。おそらく、この辺りはまだ若かりし日の林先生が、その情熱をかけて調査された遺跡だらうことは、容易に想像がつきました。

とある坂道を少し下ったところで林先生は、「見えた、神子柴遺跡が見えた。ちょうど、あの木の垂れ下

主な参考文献

- 鳥居龍藏 1924『源氏史』第一卷
八幡一郎 1928『南佐久郡の考古学的調査』
八幡一郎 1934『北佐久郡の考古学的調査』
八幡一郎 1964『勝坂式文化圏の中心』『信濃』16-5
藤森栄一編 1965『井戸尻』
茅野市教育委員会 1986『茅野市史』上巻 原始・古代
戸沢光則 1990『縄文時代史研究序説』・名著出版
富士見町教育委員会 1991『富士見町誌』上巻
南佐久郡誌編纂委員会 1998『南佐久郡誌』考古編
御代田町誌編纂委員会 1998『御代田町誌』歴史編上

がっている枝の下、あそこが神子柴だよ。』と私に教えていただきました。その時の林先生の目は、もっと遠いところを見ている気がいたしました。そして神子柴遺跡の上空が、まぶしいくらいに青かったのを、今でもはっきり覚えています。私の車は、やがて天竜川を渡り、10時35分に上伊那郷土館に着きました。ただ、私が覚えていた建物は、現在は図書館となっていて、郷土館はその奥に替わっていました。

車

郷土館にはお3人の他にも、上伊那考古学会の湯沢先生・小平先生も待っていていただけ、すでに神子柴遺跡出土余点、47点は、金庫から1階の会議室に運ばれていました。普段は、上伊那郷土館では神子柴遺跡の石器は、8点しか展示されていません。会議室に一步踏み入れた私は、並べられた石器のその迫力に、体の震えを感じました。

午前中は、林先生に神子柴遺跡の概要などをご説明していただきたり、個々の石器の実見がおこなわれ、その中で、角張さんが下呂石製で、長さ25.5cmの尖頭器を実見された時に、「これはもう狂気だ！」と発言されていたのがひどく印象に残りました。

ほどなく昼食になり、林先生に案内していただき、近くの食堂で伊那谷名物のローメンを食べました。その不思議な味について、郷土館まで歩きながら語りました。

昼食後、活発な討論となり、幾多の問題点も取り上げられたのですが、すでに16時となり再び石器を金庫にしまい、郷土館を後にすることになりました。その時の討論の内容は、あえて記述いたしませんが、必ず神子柴遺跡の報告書作成に生かされることを期待したいと思います。25年ぶりに見た神子柴はほんとうに感動的でした。

信州讃歌

—神子柴遺跡の石器にふれて— 安藤正俊

持つべきものは竹馬の友。久しぶりに体一杯に感じた信州の風は、本当に爽やかでした。

他府県で考古学を学ぶ者にとって、信州はあこがれの地であり、私たちにはまさに『深かなる信濃』で、高校生になるのを待って、また、府沢のご両親の実家が信州ということもあり、森森栄先生の著書を片手に、夏休みを利用して2度違い先史時代に思いを飛ばしながら、『信濃考古学散歩』を実行しました。

伊那谷の段丘は、道に迷いながら歩きました。

東坊湖東岸の段丘を歩いた日は、一番暑い一日でした。当時は、まだそこから、源坊湖底骨壙遺跡を見ることが出来ました。

猪ヶ峰、池のクルミでバスを降り、全山ニッコウキスゲの黄色に染まった中を、強清水・車山山頂・物見岩・八島・雪不足・鷲が峰と下ばかり見て一歩き、ようやくたどり着いた奥霧の小屋。そこで、唐沢と夜遅くに見上げた空は、満天の星でした。

天候が悪く、夏でも寒いと感じた野辺山・信濃川上。野辺山で泊まった民宿のお女将さんに、愛知県豊田市から来たことを告げると、「遠いところから来たね~。」と言われたのですが、そのお女将さんも、「私も、愛知県母母(ころも)町だよ。」と教えていただき驚きました。(母母町とは、豊田市の旧名です。) その野辺山駅は、今と違ってローカルな木造でした。信濃川上・馬場平遺跡では、農家の主さんに農作物のバイトに説いていただけたり、などなど。

そんな、『信濃考古学散歩』の中でも、私たちの心を



占領していたものは他でもない、神子柴遺跡の尖頭器群でした。

昭和49年8月11日、私たちは、上伊那郷土館を訪れました。ガラス越しではありませんが、初めて目の当たりにした神子柴遺跡の尖頭器群。特に、考古学的意味を離れた、その美術的な美しさ・造形美に強く心を引かれました。

私たちの住む、愛知県豊田市には名古屋大学によって発掘された、酒谷(しゃらのみ)ジュリンナという遺跡があります。その遺跡は、神子柴遺跡より少し時代は下るもの、同じ神子柴文化の遺跡です。豊田市内で育った私たちは、それが、信州と自分たちとを結ぶ、赤い糸のように思われました。そして、平成10年7月4日、再び上伊那郷土館で、今度は林先生のお陰で、手に触れて実見できる光榮に恵まれました。

唐沢と共に1点1点、石器の入っているガラスケースを開けていました。その時、私の手が小刻みに震えていたのを感じました。そして、ついに日本で3番目に古い、国の重要文化財に触れることができたのです。なんという感激。25年前の感動が、よみがえってきました。いや、それ以上の。

読入会開催記念

佐藤 幸信 〒384-2102 浅科村塩名田492-1

☎ 0267-58-3413

♪ 編集後記 ♪

ロシア経済が混乱を極めている。ある知人のロシア考古学者が「もうこれで6ヶ月間給料をもらっていない」といったのが印象的だった。輝かしいロシア科学院アカデミー所属の国家公務員なのにである。

「とくかく食うための仕事につくのが先決だ」と考古学をやめ実利的な職に転職する研究者も多いという。福祉や年金など社会保障制度の切り捨て、皮肉な事に今やロシアは世界最大の資本主義国になった。不況とはいえ、まだぬるま湯につかっている日本人にも同様な火の粉が降りかかるはじめている。

(つづみ)

佐久考古通信 No.73

発行所 佐久考古学会

〒385 0056 長野県佐久市桜井632-10
林 幸彦 方
郵便振替 (新)00570-9-2842
☎ 0267 (63) 1963



発行者 唐沢 平治

編集者 堀 一隆

印刷所 ほおずき書籍舗

佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 2 国史跡 中城城跡 —沖縄県—	1
上直路遺跡の屋内墓	2 小山 喬夫
信濃國碓氷崎出土の刀剣について	6 上屋 雄男・土屋 長久
坂上遺跡出土縄文中期中葉の土器	9 藤森 英二

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 2

国史跡



中城城は、沖縄市南の中城村に位置し、300以上はあるとされる沖縄のグスクの中でもっともよく保存されているもののひとつである。海に臨む丘陵の崖を天然の要害とし、標高150mほどの場所に、白い石灰岩の城壁をみせながらそびえている。

中城城は、15世紀前半までに波佐丸によって築かれたといわれ、琉球石灰岩を切石として石積みした六連郭の曲輪群によって成り立っている。1853年、ペリー提督一行は琉球の地に調査で立ち入りった際、その城壁構築技術の素晴らしいさを大きく称えたという。



中城城は、沖縄日本復帰の日に（1972年5月15日）国史跡に指定された。そしてその美しさゆえに、今度は世界文化遺産の候補としてあげられている。

中城城から海を隔ててみえる与勝半島には同じ国史跡の勝連城がある。また、喜納基地をはさんだ反対側の読谷村には鹿喜味城がある。

守礼門をくぐり、その奥にひかえる旧国宝首里城は、沖縄戦で焼失したが、現在は1712年の建物をモデルに正殿などの復元が莊蔵になされ、那覇観光のメッカとなっている。琉球王國文化の華がここにはある。



中城城跡



中城城跡

上直路遺跡の屋内墓

小山岳夫

1 屋内墓がみつかった

昭和62年、佐久市岩村田北佐久農業高校近くで発掘調査が行われました。上直路（かみすぐじ）遺跡という珍しい名前の弥生時代後期の遺跡です。この発掘調査では一辺10mの大きな弥生時代後期の竪穴住居跡がみつかりました。10mと言えば当時としては最大クラスの大きな住居です。発掘を進めていくとおびただしい数の土器が續々と出土しました。そして、驚いたことに住居東壁の中央からは当時の貴重品、銅鏡（どうくろ：銅製の腕輪「ブレスレット」）を装着した人骨が発見されたのです。

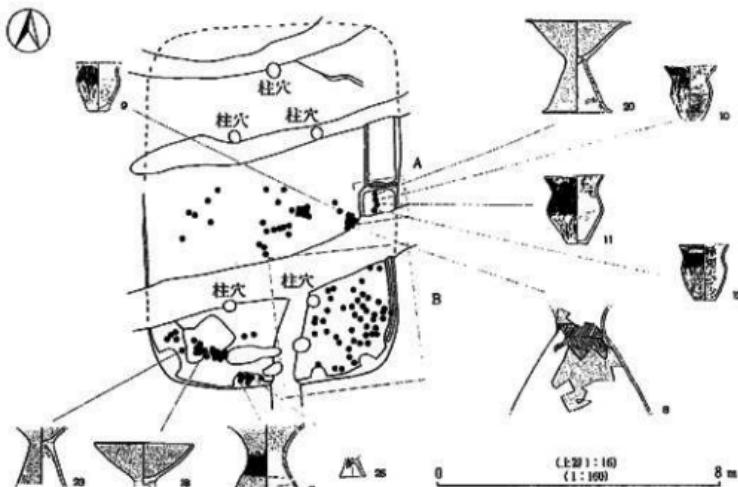
昭和62年当時、千曲川流域における銅鏡の発見例は少なく、しかも屋内墓といふ珍しさも手伝って、この発見は偶然国内の関心を集めることになりました。それから約10年の歳月を経て、佐久市教育委員会の努力が実り、発掘調査報告書が刊行されました。今日はそれを参考にして、上直路遺跡屋内墓のつくられた意味を考え、また、当時の埋葬状況の再現を試みてみたいと思います。

なお、今回、写真の掲載について佐久市教育委員会からご協力をいただきました。また、イラストは茨城県に住む漫画家さかいひろこさんに描いていただきました。

2 弥生時代後期ってどんな時代

弥生時代後期、千曲川流域では写真のような赤く彩られた箱清水式土器が使われました。この土器がつくられた時代、私は、紀元前後から紀元250年位にあたると考えます。調度『三国志』に登場する様の女王卑弥呼が活躍した時代と多くダブります。卑弥呼が実在したか否かはともかく、当時の日本は小国統合が続き、次第に初期国家誕生に向かって歩き始めていたことは、考古学的な成果からみても明らかです。

同じ頃の千曲川流域は赤い箱清水式土器が飯山から善光寺平・上小・佐久までくまなくが発見されることから、文化面で強く結びついたまとまりがあったことはまちがいありません。これが当時分立していた小国家のひとつであったとも考えられるのです。



第1図 屋内墓がみつかった上直路遺跡の住居跡（黒点は土器、南に密集している）

紀元2～3世紀、信州千曲川流域には、信州独自の土器文化がはぐくまれていたのです。

その担い手は、縄文時代からずっと長野県に住み続けてきた人とともに、弥生時代に入ってから長野県に移住した渡来系弥生人も多くいたと私は考えます。

その理由は、現在発見される弥生人骨は渡来系の形質を有していることが多いこと、東日本その他地域では滅多に出土しない九州系や朝鮮系の青銅器・鉄器の珍品が、長野県では飛び抜けて多く出土することなどです。今日はそのことについて細かく説明している余裕はありませんので、詳しいことは（小山岳夫 1998 「巨大化する弥生集落」『専修考古学』7号）をお読みください。

3 千曲川流域の一般墓・木棺墓と丸い墓の発達

現在、皆さんがよく知っている木の棺は弥生時代から製作がはじまりました。したがって、稻作・金属器と同様朝鮮半島や中国人陸からもたらされた可能性の高い棺ということができます。縄文時代には木棺墓はありませんでした。考古学では木の棺のとを木棺墓（もつかんぼ）と呼びます。

長野県は東日本においていち早く木棺墓を採用した地域でもあります。古くは紀元前200年頃から木棺墓がつくられました。紀元前50年頃になると長野市塙崎の松筋（まつぶせ）でたくさんの木棺墓がつくられました。この木棺墓に葬られた人々の人骨を京都大学の茂原信生先生が鑑定したところ、渡来系弥生人の形質を有すると言うこと、紀元前の昔から長野県には、渡来系の人々が移住し、葬式には木棺を用いる風習が始ま

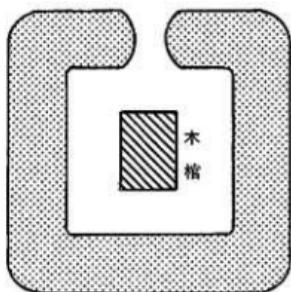
っていたのです。以後、木棺は長野県の弥生葬制に定着し、埋葬主体の基本となつて弥生時代のおわりまでずっと継続して用いられました。

また、弥生時代には様々な墓が造られ、盛り土をもつ墓も同様にたくさんつくられたことはご存知の通りですが、後期になると全国的に溝で四角く仕切った盛り土のある墓＝方形周溝墓（=第2図 以後「四角い墓」と言います）が発達します。丸い墓の埋葬主体はもちろん木棺墓です。

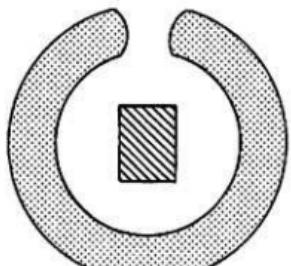
丸い墓の最古例は中部・東部瀬戸内の吉備・播磨（岡山・兵庫県）、中期後半には日本海側の山間部の但馬や近畿の瀬戸内東縁地域、更には東海地方にも作られるようになります。そして、後期中頃紀元2世紀赤い土



写真1 住居跡南東部 特に土器が集中する
(1998 佐久市埋蔵文化財年報より)



第2図 四角い墓



第3図 丸い墓



第4図 上直路での埋葬風景の復元（さかいひろこ画）

器の全盛期になると千曲川流域でも丸い墓の登場ということになるわけです。

このように墓内を中心とする地域に多い丸い墓がなぜ、遠く離れた長野県に主体的に採用されたのか。それは日本海側の墓内北部・但馬地域などとの人の移住を介した直接・間接的な繋がりがあったからだと私は理解しています。

4 上直路に屋内墓がつくられた理由

このように丸い墓が主流の千曲川流域にあって、佐久市上直路遺跡から発見された屋内墓（第1図）は、極めて特異な墓ということができます。どうしてこういった墓が作られたのかその事情を考えてみることにします。

この墓が造られたのは先に述べたように紀元180年から200年くらいの間。卑弥呼登場など時代は、小国家分立から次第に統合が進み、千曲川流域でも稻清水式土器文化が最盛期に達し、真っ赤に彩られた土器文化が花開いた時期がありました。

以下に発掘調査報告書でのデータを参考にしながら、

屋内の埋葬の情景を、イラストを駆使して想像復元してみます。

－ある日の夕暮れ時－

上直路ムラで一番大きな家の人が亡くなりました。訃報を聞きつけたムラ人は続々とその家に集まってきた。皆、沈痛な面立ちです。がっくりとうなだれている人もいます。遺体はイラストのように住居東端の中央に木棺を組み葬られました。家の中に葬るのは異例のことです。遺体は右手に10本、左手に5本の銅製のブレスレットを付けたまま棺に納められました。このブレスレットかなり小さく大人の腕には付けたり外したりが難しい大きさです。恐らく、この方は子供の頃からずっとこのブレスレットを身に付けていたのでしょうか。鑑定ではこのブレスレット朝鮮製のこと、当時は珍れもなく貴重品・宝物で、誰でも身につけることはできなかったはずです。こういった貴重品を子供の頃から付けられる人物、それはやはり、子供の頃から選ばれた人物、すなわち司祭者として選ばれた人物であったのでしょう。そして、卑弥呼に象徴される

ようにこの時代の司祭者は女性、この遺体も恐らく女性だったと考えられます。

棺の脇には写真のように小さなカネ3つ、高杯1つの合計4つの土器、また、遺体の頭側には大小取り混ぜたくさん上の土器が並べられていました。恐らくこの中にはたくさんの食料、穀物や肉、ダンゴ、酒、水などが入れられ、お供え物としてそなえられていたのでしょうか。現在の「灰寄せ」のように直会（なおらい）があって、参列者が儀式の際に食したこととも考えられます。

通常この時代、丸い墓に葬られる人は首長的な人物で、丸い墓にはたくさんの土器が備えられていました。丸い墓と同様、上直路の遺体にもたくさんの土器が備えられています。すなわち、この司祭者の地位がいかに高く、また、この葬式がいかに盛大なものであったかがたくさんの土器の供され方からうかがえます。ムラ人にとって司祭者の死が如何に悼まれていたかもわかります。

棺の前では司祭者の地位を継承する立場にある赤い土器と同じ色の衣装をまとった女性が、一心不乱に祈禱をあげています。棺の近くでは靈魂を弔うための篝火が焚かれています。神秘的な炎に照らされて淡々と儀式は進められています。この儀式が終了すると彼女は、正式に司祭者の地位を継承することができるのです。

一晩時間後

葬送の儀式が終りました。木の棺に蓋がされました。先代の司祭者とお別れです。篝火が木棺にかけられました。木棺が燃えています。住居の中は煙に包まれ、屋根にも火が燃え移りました。新しい司祭者とムラ人たちは退出して、家が焼け落ちるのを見守りました。白く立ち上がる煙は、先代の司祭者の魂をのせて、星空をめざして高く舞い上がっていきました。

遺体が焼かれたことは、遺骨が火を受けてヒビが入っていることからも明らかです。この司祭者の魂に振りかかる邪気を追い払うためでしょうか。それとも煙にのせて魂を昇天させるためでしょうか。

いずれにしても司祭者の死が突然的であった可能性は高いと思います。あるいは悪い流行病に倒れたのかもしれません。それが、こういった家に葬り、火をかけるという例外的な行為につながったのではないでしょうか。屋内に葬ると言うことはかなり、特殊な事情があったからに違いありません。これを読まれた皆さんも当時に思いを馳せ、司祭者が亡くなってしまった事情を想像してみてください。私の想像よりも皆さんの想像の方が正しいかも知れません。



写真2 棺の脇あるいは上に供えられた土器
(1998 佐久市埋蔵文化財年報より)



写真3 銅鈸・人骨の出土状況
(1998 佐久市埋蔵文化財年報より)

5 おわりに

今回は、漫画家さかいひろこさんの協力を得て、佐久市上直路演跡屋内墓の葬式の情景をビジュアルに想像復元することができました。当然のことながら、豊穴住居跡と土器、人骨、銅鈸以外は全くの想像です。人骨の性別についても状況証拠からの推定で、正式な鑑定結果を踏まえたものではありません。(昭和60年当時の鑑定では胸等断片的な人骨だけでは、性別不明であった。しかし、最近は科学分析によって性別判定可能であるとも聞く。早期の分析が期待される。)

今回は考古学によってわかる歴史、想像できることのおもしろさ、すばらしさを一般へ伝えるため、無理を覺悟でこの拙文を書きました。私たち考古学者がどんなに佐久の弥生社会が発達していたか、どんなにすばらしい文化的な内容を持っていたかについて声を張り上げても、お堅い報告書や論文では、一般に真意は伝わりません。今後、さらに研究を深めて、もっとわかりやすく、もっと正確に弥生時代の社会・文化の再現を試みたいと考えています。それがこれからの私のライフワークであります。

(1999. 1. 12)
(住所 389-0206 御代田町大字御代田4108-1880)

信濃国碓氷峠出土の 刀剣について

土屋延男
土屋長久

1

本刀剣資料は、土屋延男が某古美術店より、偶然みつけ、購入し、関連資料を得るために、現在、軽井沢町歴史民俗資料館に寄託し、公開展示中である。

平成8年より、多方面にわたる調査し、上信国境である、松井田町西町村及碓氷山系、倉淵村下仁田町等文獻調査をした。

今後の研究のため、今回報告し、諸兄、諸先生方の御参考に付し、今後の研究資料としたい。

刀剣は、第1図、第2図のとおりで、研究のため磨工されているのが観察される。

刀剣は2点あり、ひとつは(第2図上)、現長67.2cm。刃身2.3~2.5cm。棟厚、0.7cmを計る直刃であるが、両端共折損剝離があつて、判然としていない。

いまひとつ(第2図下)は、現長53.3cm。刃身2.7~2.0cm。棟厚0.8cmで両端はあまりはつきりしていない。葉は直状で、その尾端は丸味に仕上げ、目釘が1本残っている。中央部に新しい研磨跡があり、かなり明確に、鉄質及原料が把握され良質である。(第3図)

前者の刀剣は折損が観察されるものの、身長53cm前後と推定される。

両者共、所謂佐久平後期古墳出土品とはフクラ切先に状況が異なる。著者の紹介(第1図)では发掘と明記され、伴出物はないが、年代が古く扱われると推定さ



第1図 信濃国碓氷峠古墳出土の刀剣

れる。

昭和8年の文献として、きわめて細詳の記載及記述で、刀剣品の高度の研究者の報告と解される。そして部分的ではあるが、研済により、古來の日本刀の研究である。

後年、石井昌國氏の日本刀の起源として、唐手刀を注目している。これと、椎頭太刀、牛頭太刀、圓頭太刀、環刀狗頭、方頭太刀、が登場てくる。

刀剣の遺品の写真には、軽井沢町長倉の遠藤丘氏をわざわざした。

さて、大日本刀剣研究会本部が調査し、本阿彌光美氏が、その著書『鑑定秘訣刀剣と日本魂』の15~16



第2図 信濃国碓氷峠出土の刀剣



第3図 刀剣の研磨

真に実測図と他の考古資料と共に述べている。(註1)

そして、刀剣については、直刀と「碓氷鉢の古墳」より、発掘2本研之直刀にて棟にも焼有肌筋目心平造也」と述べている。

釘2本がみられ、良い刀とみられ、古墳時代に編年される。

そして、このことは入山鉢頂上の祭祀遺物(註2)が5世紀であるので、いずれにしても7~8世紀に扱われ、ことによるともっと年代が上るかも知れない。

現在、碓氷山系、制石山(しゃくし)から須恵器片が出土していて、7~8世紀に比定されている。

古墳出土の刀剣の研磨は、積石塚古墳出土品を國學院大學人間学部雄氏が試みている。

2

さて、本件について気づくことは、群馬県松井田町側、明治17年に明治天皇北陸御巡幸のため、明治11年に群馬県の「巡幸道」が改修及新設され、諸工事が行われている。この工事中の出土と考えられるもの定かではない。群馬県の古墳文獻にはみられない。(註3)

このことについて、群馬県立公文書館へ照会し、同館の外山和夫氏は、次のように述べている。

伴復 お便り拝見しました。本当に久し振りですね。沼津の黒曜石調査も都丸十九一先生の講演の作も、そういうふうなことがあったなあと、大変懐かしい想いです。随分以前のことになりましたね。

さて、お申出の趣旨は、例の古墳時代の刀剣は、巡幸に先立つ道路工事の際に、長野側にあった古墳についての手掛かりが群馬県行政文書の中にあるのではないか、あるいは、群馬側で見付かった古墳の可能性があるのではないかと言うことかなと思ひます。

本館には、明治11年天皇北陸等巡幸に直接関わる文書は、別紙コピーに見られるところ6件10点があります。これらは、ご来館くだされば閲覧が可能です。そ

の他に、例えば、道路改修とか、間接的に関わるものがあるかと思ひ、一応目録に目を通していましたが、あまり期待は持てないようです。いずれにしても、明治11年まで遡る古い行政文書は、数が多くはありませんので、探すのもそんなに大変ではないと思ひます。該当する件について、私の方で探しても良いのですが、それでは、群馬にくる楽しみがなくなるようでしたら、探さずに楽しみを取っておくことにしましょう。

ところで、古代の信州と上州を結ぶ主要なルートについては、官道以前にも時期による変遷があるのではないかと感じております。上州側では、鶴川沿いには、4世紀末から5世紀初めに遡る古い古墳がありますが、碓氷川沿いでは、5世紀半ば以降に、高崎市八幡古墳群の中の幾つかが築かれたようで、多くは横穴式石室を持つ古墳のように思ひ、全体に新しい傾向があると思ひます。

しかし、官道あるいはプレ官道として6~7世紀頃からの道を考えるのであれば、山東山道としては、入山鉢道が最も有力かなと、素人考えですが考えております。

刎石山の須恵器については、群馬県が出した歴史的調査報告書『東山道』でも触れられていますが、どの時期のものが、どのくらい、どのような状態で見つかっているのでしょうか。私は未だ見てないので何とも言えません。須恵器というだけでは、古東山道の時期とも、東山道の時期ともいえないと思うのですが。

また、高速道路建設工事で見付かった松井田原遺跡が、坂本の駅であったとしても、この場所が、入山鉢ルート説と、旧碓氷鉢ルート説の合流点近くであることを考えると、決め手にはなりにくくように思いますかいかがでしょうか。

それでは、とりあえずお知らせまで。なお、館の利用案内を同封いたします。連絡をお待ちしております。

草々

1996年6月27日

群馬県立公文書館
外山和夫

土屋長久 様

とあり、さらに外山和夫氏は2倍として

前略 今年の梅雨はどうも空梅雨のようですね。また、昨年のような猛暑になるのでしょうか。県北部のダムは雪解け水で満水状態のようですが、県西部から、秩父・武藏・相模方面の水不足はかなり深刻な事態になりそうです。

さて、過日お尋ねのあった件ですが、その後、明治

第1表 皇室・来賓関係

行 幸

○ 明1946/1	明11 諸侯幸一件書類	第五種 天授御筆、奉 印押捺名
○ 明1946/1	#11 御幸幸一件書類	第五種
○ 明1946/1	#11 御幸幸一件書類	第五種
○ 明1947	#11 御幸幸「上美濃」	
○ 明1948	#11 御幸幸内(御幸御用第)	御幸行 御用紙
○ 明1949/1	#11 賀賀御達仕事御用第、御 先帝官印合書	御幸行 御用紙
○ 明1949/1	#11 賀賀御達仕事御用第、御 先帝官印合書	御幸行 御用紙
○ 明1950	#11 御幸幸内(御幸)	御幸行 御用紙
○ 明1951/1	#11 諸侯書類	御幸行 御用紙
○ 明1951/1	#11 諸侯書類	御幸行 御用紙

行 幸

明2274	#26 総納品書類(天皇行幸)	御幸行 御用紙
明 924	#34 御幸幸書類	
明2368/1	#34 御幸幸書類二箇スル書類	
明2368/1	#34 御幸幸書類二箇スル書類	
明2368/1	#34 御幸幸書類二箇スル書類	

11年の北陸等巡幸に関する文書6件10冊のすべてに一応目を通して見ました。その結果、道路の修繕や付け替え等の營繕に関する文書は、含まれていないことが分かりました。

また、同年までの他の文書の目録にも接しましたが、該当するような項目は見当たりません。ということは、群馬県に残された行政文書からは、例の古墳時代の刀剣について、調べる手掛かりがない事を意味します。

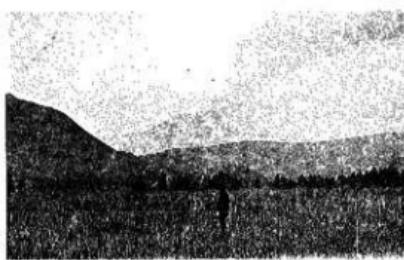
この時期までの、行政文書が幾らも残っていない中で、この遺幸の書類が、6件10点も残っていることは、いかに大変なことであったかの現れでもあると感じております。実際、あの時代に、7~800人もが、毎日のように異動するわけですから、本当に大変だったことが手に取るようになります。

お陰で、通行の邪魔になる孫庭の撤去を求められて、異議を申し立てた者がでて、その処理にごたごたりしたり、近衛騎兵の馬が病気になり、全休までに半年以上かかったり、巡幸が長野県に入った後の集中豪雨で順路の沢山の橋が流されたりなど、目的の古墳とは関係のないことで、いろいろな興味深い事実を知ることもできました。

草々

外山和夫

1996年7月4日



第4図 明治時代中期の経井沢高原(現旧ゴルフ場より浅間山を望む)

そして、群馬県史目録として第1表があげられる。○印が該当する近代文書である。

調査におもむく前に、外山氏に大変御手数をわざらわし、公文書が調査された。

一応不詳であるが、碓氷山系というと、かなり史実が明確であろうというのが、本刀剣の性格であり、碓氷山山系の古墳出土品であり、7~8世紀となろうが、併出した、土師器、須恵器が判明せず、未解決の問題となつた。信州側、御幸幸疏工事でも不詳である。

今後の踏査と今一度群馬県立文書の精査となろう。

3

さて、この様な状況からして、信州経井沢地盤は、信濃考古学雑誌からすると、古墳の佐久平での東坂は、御代田町鬼王の企塚となっている。桂井沢は、浅間浮石流A~Cが頭著となつていて地表では、古墳の確認は、全く把握できないのが現状である。

5世紀代、一方では入山跡で、サマを祭祀し、碓氷峠の麓からの刀剣で、すべて古墳出土からとも扱われがたいが、填塞となると坂本の君に比定される。この地方、嵐山牧(官牧)の牧長にも比定され、さらには、古東山道及東山道の研究にひとつつの問題をなげかけたと扱われる。

諸先生の今後の御検討を願うものである。以上、信濃国碓氷峠出土の古墳刀剣について述べた。

註1: 本阿彌光美『鑑定秘訣刀剣と日本魂天』大日本刀剣研究会本部、昭和8年12月、東京。

註2: 大場磐雄『古東山道の考古学的考察』『國學院大學院紀要』第一輯、昭和45年5月。

註3: 尾崎喜左雄『古墳のはなし』他

永峰光・『古墳概観』『信濃考古雑誌』昭和33年。

(土屋延男 御代田町人字御代田3871)

(上屋長久 経井沢町大字長倉2948-5)

坂上遺跡出土 縄文中期中葉の土器

藤森英二

1はじめに

平成10年7月に北柏木村教育委員会が発掘調査を行った坂上遺跡は、北柏木村内では初めての、開発に先立つ行政調査となった。この坂上遺跡は小海線小海駅から千曲川の支流相木川を遡ること東に10km、標高約1,000mの河岸段丘（右岸）に位置する（第1図）。既に八幡一郎の『南佐久郡の考古學的調査』でも紹介されており、地形等からも村内有数の遺跡と思われていた。今回村の医師住宅建設の話を持ち上がり事前の発掘調査となってしまったわけだが、調査面積は約80m²ほどの小規模な発掘であった。それでも今まで手つかずであった遺跡に調査のメスが入ったことの意義は大きく、これまで確認出来なかった時期も含め縄文時代各期の土器が整理箱50個を満たすほど出土した。ここではこの一部を紹介し、出土量が最も多いと思われる縄文時代中期中葉土器の一例について若干の私見を加えてみたい。但し現在遺物の洗浄が一部残っており、土器が表面ではなく写真で掲載してあること、さらに今後の整理作業を通じ見解に相違が発生する可能性はご了承願いたい。

2坂上遺跡の縄文土器

全体を通して、今回の調査では遺構の検出が少なく（住居址についてはついに確認できなかった）、当然遺構出土の遺物は極少数である。従って、ここに紹介するものも含めて大部分が遺物包含層出土のものであり、出土状態からは各遺物の前後関係や共伴関係などはつかめない結果となってしまった。これは現場での問題意識の無さでもあり、大いに反省するところではある。

検出された縄文土器の時間幅は広く、ややアバウトな区分でいえば早期貝殻糸文系土器からはじめり、前期前半の胎土に大量の横推を含んだ羽状縄文系土器、前期後半の諸織工土器と続き、量的にはこれらより多くの所謂中期初頭の土器が確認された。続く中期中葉の土器が最も多く出土したが、後述するように中葉でもその前半に集中する。また中期後葉の土器は少ない。遂に後期の土器はやや多く見つかり、特に入れ子状の

單独埋甕として取り上げた土器（写真1・2）は大きな成果となり、村博物館で行った発掘後の企画展示でも盛況を博した。

このように量の多少はともかく、一遺跡内のわずかな調査区からこれだけ時間幅のある土器が出土したことは驚きであった。全ての時期についてここで多くを述べるのは避けるが、佐久でも焼町類型の土器を中心に盛り上がる縄文時代中期中葉の土器についてやや詳しく見ていただきたい。

3佐久地域縄文中期土器研究と坂上遺跡の土器

佐久地域の縄文中期土器の研究は、御代田町川原田遺跡等の成果を受け、寺沢、山口両氏がその報告書において詳しい分析を行っている（寺沢1997、山口1997）。さらに「御代田町誌」ではその状況が総括され（水沢1998）、これらの中から焼町類型（あるいは焼町式）を中心に、その系統論などが示されるようになった。それによれば東北信地域に多いとされる中期初頭の深澤タイプ（五領ヶ台・梨久保式後半と並行）や東信に多く確認される中期中葉始めの斜行沈線文土器（後沖式）の要素を継承しながら焼町類型が成立したとされる。

今回の調査では、この斜行沈線文土器がやまとまって出土した。写真3はそのうち比較的の接合がすすんでいる個体資料で、残念ながら器形全体を推測するには足らないが、斜行沈線文土器の特徴をよく示している。

一方で、やはりこの斜行沈線文土器から焼町土器の古段階に並行するとと思われる、角押文の施された土器片も多くみられた。破片資料が多く、現段階ではあまり精密な論議を行えないが、この中で特徴的な一群を取り上げておきたい。



第1図 坂上遺跡位置図 (1:50,000)



写真1 入れ子状半独埋器出土状況

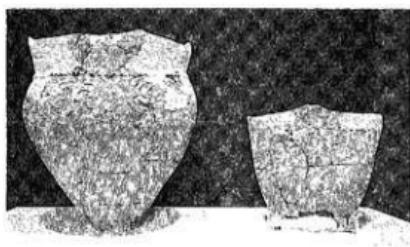


写真2 写真右が内側、左が外側の土器

写真3 斜行弦縞文土器

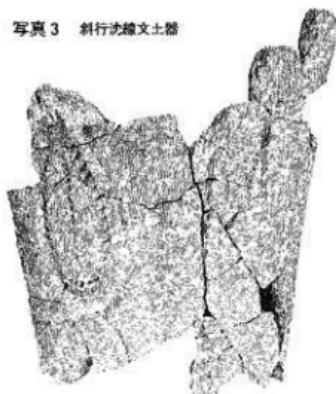


写真4 繩文地文の局部



写真6 垂下する押角文、半隆起縞文、そして純文

写真7 構成の良く似た土器片（出土地不明）

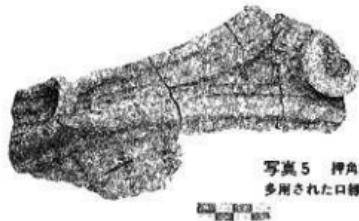


写真5 押角文の多用された口縁

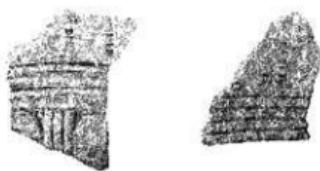
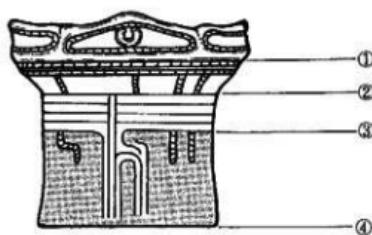


写真8 写真4・5と同一個体と思われる



第2図 坂上遺跡出土土器概念図



写真9 写真6の口縁部か？



坂上遺跡の土器（1：3）

写真4の土器は底部がやや外側に開き、その上部では半隆帯文が横方向に4本平行に並り、さらにこれが90度下向きに曲がり、途中クランク状になりながら底部付近まで垂下している。また中程まではやはり垂下する角押文が施され、横方向の平行半隆帯文以下には繩文が施されている。この資料に接合するより上部の資料は現在確認できていないが、実は写真5がこれと同一個体ではないかと考えている。波状の口縁が隆帯で区画され、この中にも隆帯と押角文によって装飾されている。さらにこれより下には、地文が無く横方向と垂下する角押文が見られる部位が続いている。この写真4と5は現在接合こそしていないものの、包含層中からかたまつた状態で出土し、色調・胎土・厚み、両者に施される角押文などからも同一個体と考えるに足るものがある。そしてこの口縁を含む写真5の資料が、写真4の横方向平行半隆帯文の直上（あるいはさら何本かの半隆帯文をはさむ）に統じて推定したい。これを裏付けるように、今回の発掘で写真6の資料が検出されている。写真4・5とは別個体であるが、地文の無い部位に垂下する角押文があり、その下に4本の横方向平行半隆帯文、さらに繩文施文部にこれが垂下するという構成をとるものである。そしてこのような構成になると思われる土器はこれまでにも村内から採集されている。残念ながら出土跡は不明であるが、写真7がそうである。尚やはり横方向平行半隆帯文の下に繩文と押角文が見られる写真8は写真4・5と同一個体の破片資料であり、写真9は写真6の口縁部かも知れず、横円区画も見られる。

ここではあえて文様審という言葉は用いないが（これは前後する土器との関係をつかみながら考察すべきと考える）、これらから類推すると、①隆帯で区画され角押文で装飾される口縁部、②地文がなく横方向と垂下する角押文が施される部位、③4~5本程度の横方向平行半隆帯文、④繩文地文で③から延びる半隆帯文と角押文がクランク状に垂下する肩部という構成の土器が浮かび上がる（第2回）。①~②の構成は猪沢式に見られるものであり、全体の印象としても胴部にまで達する角押文や、特に写真4・5について言えば所謂バケツ形の器形が予想できることなどから、猪沢式期の土器かと思われる。しかし地文に繩文が存在する点は一般にこれ以前に多い特徴とされ、五領ヶ台（梨久保）期から猪沢期への変遷を述べた三上氏の論文では猪沢段階で繩文が施される土器をわずかに4点あげているのみである（三上1987）。また東北信地方の深沢タイプも繩文が多用されるが、次の斜行沈線文土器にはやはり繩文の使用は見られないようである。もしここで行った復元が正しいものとするならば、角押文やバケツ形の器形（あるいは口縁の横円区画も含めて良い

かも知れないが）という猪沢式の要素と、五領ヶ台式や深沢タイプの中頃初頭に見られる繩文施文（さらに同部に見られるクランク状の垂下文もこのころに多いようであるが）が共に存在する一群が浮かび上がる。これが時期を示すものか、あるいは何らかの地域性を示唆するもののかは今後の課題と言えようが、付近の土器の系統的関係を調べた上で改めて考えてみたい。ところで、やはり中葉始めとされる阿玉台式の古手（1a若しくは1b式）の土器が見られる一方で、それ以後の焼町類型と思われる土器は現在1点の破片が確認されているのみであり、これと同時期とされる藤内から井戸式の土器もあまり見られない（平成11年2月現在）。これらのことから、中期に関しては所謂初頭後半から中葉始めという、これ以降に隆盛を迎える「井戸式文化」を生み出す胎動期の土器が多いと言うことが出来るようである。

4 地方公務員のつぶやき

さて、考古学的な成果とは別に、今回の発掘調査は先に記したように、村では初めての行政によるものとなった。小規模な調査にもかかわらず、予想以上に村内での反響があり見学者もあった。また村の文化祭と併せて行った博物館での企画展示には、3日間で延べ210名（内9割近くが村民）の来館者がおり、そこでも日々驚きや賛美の声が上がっていた。210名なんて少ないと思われるかも知れないが、人口一千人ちょっとの村で考えればそれなりに・・・と一人思うのは甘えだらうか。ちなみに報告書は平成11年度に刊行予定である。

最後ではあるがこの文章を書く際に御教示を下さった三上徹也氏、そして豊い中發掘に参加してくれた小口英一郎、高野勝規、中島透、中谷尚秀、三浦千鶴子、三木陽平の各氏に、あらためてお礼を申し上げたい。

参考文献

- 八幡一郎 1963『南佐久郡の考古學的調査』
- 三上徹也 1987『梨久保式土器再考』『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 寺内隆大 1997『川原田遺跡繩文時代中期中葉の土器群について』『川原田遺跡・繩文編』御代田町教育委員会
- 山口逸弘 1997『川原田遺跡「新巻類型」と「焼町類型」』『川原田遺跡・繩文編』御代田町教育委員会
- 水沢教子 1998『第五節 繩文文化の爛熟－中期』『御代田町誌 歴史編上』

唐沢B遺跡の発掘調査報告書刊行!!

故岸嶋稔先生によって発掘調査がなされ、優美な大形石斧11本などが出土した、真田町の唐沢B遺跡の発掘調査報告書が、岸嶋先生の追悼の意味もあわせ、昨年11月およそ30年ぶりに刊行となりました。

国重文の神子柴遺跡と並んで、日本を代表する草創期の石器群である唐沢Bは、石器研究者ならずとも手元に置きたい本です。

出版は、千曲川水系古代文化研究所の自費出版となりましたので、みなさまのご購入による資金援助をお願いいたします。

大井今朝太さんのご逝去を悼む

前佐久考古学会会員で、佐久市根々井の大井今朝太さんが98年12月87歳でご逝去されました。

大井さんは、長年佐久考古学会の学会活動に参加されたばかりでなく、自らスコップをにぎって周防堀や舞台場遺跡、矢出川遺跡群総合調査など佐久地域の重要な発掘調査に従事されました。発掘機材は、いつも大井さんの細かな気配りによって、整備が行き届いていたことが忘れられません。

会員一同謹んでお悔やみを申し上げます。



中ッ原を発掘する
大井さん



● 申し込み ハガキかEメールで堤まで 価格3,000円
〒385-0022 佐久市岩村田568-4, 202号 堤 隆
Eメール: tsutsumi@avis.ne.jp

八ヶ岳旧石器研究グループ 岩宿文化研究奨励賞を受賞!!

98年10月、我が佐久考古学会員も数名が参加をする八ヶ岳旧石器研究グループが、日本初の旧石器遺跡である岩宿遺跡の存在する群馬県笠懸町主催の第三回岩宿文化研究奨励賞を受賞しました。

野辺山の中ッ原5B遺跡や同1G遺跡の発掘調査、報告書や旧石器資料集などの出版、縄石刀文化シンポジウムの開催などのいくつかの研究活動が評価されての受賞です。

受賞を記念して、グループの研究活動や、八ヶ岳の自然、旧石器遺跡などを紹介するホームページが開設されました。ぜひ、アクセスしてみて下さい。

ホームページ アドレス

<http://www.avis.ne.jp/~tsutsumi/>

問い合わせ窓口

土屋 延男 〒389-0206 御代出町児玉3871 ☎ 0267-32-4603

♪ 編集後記 ♪

暮れから正月にかけて沖縄の測査にいってきた。私はどちらかというと南方系モンゴロイドの顔なので、沖縄出身でしょう?とよく聞かれた(沖縄のみなさん深謝)。沖縄は正月だというのに気温20度、車の中ではクーラーをつけた。

沖縄では、まだ見つかっていない最古の土器(草創期)と旧石器の発見を狙ってカヤウチバンタ遺跡の調査がなされた。残念ながらその期待は今夏の二次調査まで持ち越されたが、沖縄のみなさんの考古学への情熱に触れ、泡盛を飲み、島歌を聞き、夜遅くまで語り明かした。頬にあたる潮風が心地よかった。(つつみ)

佐久考古通信 No.74

発行所 佐久考古学会

〒385-0056 長野県佐久市桜井632-10
林 幸彦 方
郵便振替 00570 9 2842
☎ 0267 (63) 1963

発行者 堀澤 平治

編集者 堀 隆

印刷所 ほおづき書籍舗



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 3 世界遺産 兵馬俑	—中国・西安—	1
羅縫研究の新展開		桐原 勉
天狗岩洞穴の発掘調査 —弥生時代の洞穴利用—		天狗岩洞穴発掘調査団
焼町土器、国重要文化財へ//		5
		8



春先の風がまだ冷たい1974年3月、西安の一農夫楊志發(写真)が井戸掘りをしていた際、偶然に多数の陶器の兵士や馬車を掘り出した。世界遺産の兵馬俑はいとも簡単に発見された。このニュースはまたたく間に世界を駆け抜け、その夏には中国の考古学者チームによって今世紀で最も壮大な発掘が開始された。

兵馬俑は、秦始皇帝陵の東1.5kmの位置にあって、その陵墓を守るように配された陶俑の軍隊である。品の字形に3ヵ所配置された俑坑は、1~3号坑と呼ばれ、その中の俑は7000を超すともいわれている。

3つの坑のうち最大の1号坑は長さ260m、幅62mの長方形を呈し、その中に歩兵や馬、馬に引かれた武人が乗る戰車などの部隊が、隊列を組んで配されている。秦の時代より2200年の眠りから目覚めた永遠の兵士は、どれひとつとして同じ形のものはないといわれ、甲冑をつけるもの、つけないもの、武器をもつものなど様々で、圧倒する迫力である。

今日も発掘調査は継続されており、年間200万人の観光客は体育館状のドームの中で、世界遺産の発掘の様子をつぶさに見学ができるよう工夫されている。



兵馬俑1号坑 武人



兵馬俑発見者 楊志發さん

薙鎌研究の新展開

桐原 健

1

薙鎌と呼ばれている鉄製品がある。実態は時代により異っていて、古代の場合、「皇太神宮儀式帳」によると宮地鎮めに用いる器材の中に「奈岐鎌1柄」、「止由氣太神宮儀式帳」では山口祭の用物中や正殿心柱を造る際の祭、宮地鎮め用など6つの場面に「奈岐鎌1柄」が見え、「儀式解」は「奈岐鎌は薙鎌なり。今の世、奈岐鎌と奈多と同物なれど、昔は全く同じきにあらじ」と解説している。そこで延長5(927)年撰進の「延喜式・伊勢太神宮」の宮地鎮祭の条に当つてみると用具中に「彭鎌」の名があつて、一条家本には「ナイカマ」の読みが振つてある。「天智紀」6年11月条に出てくる「彭」に「ナタ」読みが付いてることと、「大鎌」が「彭」本來の意であることを合せて大きい刃をもち長い柄が付く山仕事用の「刈り払い鎌」だろうという見当がつく、つまりは実用の鎌なのだ。

「刈り払い鎌」の現物は松本平の吉田川西・下神戸・南栗・三の宮遺跡、善光寺平では屋代遺跡群から沢山に出土しており、殊にも三の宮の鎌は刃渡り23cmで長い柄が付いている。時期はいずれも平安時代である。

2

中世の薙鎌は信濃の諏訪神社関係史料の中だけに見えていて、諏訪円忠か延文元(1356)年に著わした『諏訪大明神聖詞』の御射山御持条には「薙鎌衆魔退伏の利剣なり」とあって、刃を刈り払う実用的な大鎌ではなく、衆魔を打ち碎く概念的・宗教的な武器となつておらず、同じ南北朝時代に成立した『神道集・諏訪縁起事』によると甲賀三郎は鬼王を擊退する武器として維繩王より投鎌3口を受け取っている。投鎌は「今の世に御柱(柱)に投鎌を打つことはこの謂なり」とあって、『大明神聖詞』同様に宗教的な武器で、南北朝時代には諏訪神社の祭祀具になっている。

延文元年より1世纪下った寛正5(1464)年の『守矢満史書留』には内鎌を上社御宝殿に打ちつけたとの記事があり、更に1世纪以上の時間をおいた寛正6

(1578)年の『上諏訪造宮帳』には大宮一の御柱に係つて「薙鎌之代500文、竹宣大夫渡し、前宮一と三の御柱のところに内鎌300文、原の山作渡し」と記されている。これは次の天正12年に予約されている御柱木に打ち込む薙鎌のことと『神道集』に見られた投鎌につながる。

天正18(1590)年には諏訪新六郎が3点の鎌状鉄製品を先端に打ちこんだ柱を上社に奉納している。鉄製品は鎌形だが刃は無く、嘴と円孔、背の部分に羽根状の刻み目を付けている。素子(コミ)は刃側ではなく背側に曲げられている。実用の鎌でない全くの祭祀具で、この場合は供奉具の1品になっている。

近世になって、安永・寛政・文化・文政・天保・嘉永・安政の紀年録ある薙鎌が寅申の前年に北安藤郡小谷村の中土や戸土の諏訪社神木に打ち込まれている。諏訪新六郎の薙鎌自体、涼初形態から相当に発展してしまったものだが、それと比べて以後269年の間に嘴は更に長くなり、背中の刻み目は四角に切り込まれ、全体に胴長の姿態になってしまっている。しかし、姿を変えない小型品もかなりある。

松本市浅間の御射神社秋宮には享保19(1734)年中寅の櫓札や鶴馬と共に木鉢に打ちつけられた2点の薙鎌が伝えられてきている。1点は長さ10cmの小型品で、口の表現はあるが円孔はなし。背から腹にかけて等間隔に5条の筋が刻まれている。もう1点には口と円孔があり、背には羽根状の刻み目がある。丈は前の倍以上の21.3cmと大きい。木鉢の形からみると小型品の方が先行する。近世という封鎖社会の中にあって、かかる性格の物品は意外と形態変化せず古色を保ち続けるものというのが実見しての感慨だった。

3

明治5年壬申の歳より平成10年寅歳までの127年間に諏訪神社と神社が飾る世界は大きく流れ動いた。それは薙鎌の上にも反映してくる。

現在の諏訪神社薙鎌には五通りの扱いがある。一つは上社における宝物として、二つめは御柱曳きの祭列中における供奉具の1品で、薙鎌のコミは竿頭に押されている。三つめとして、上社の御柱祭では御船が曳かれるが、船の幣輪には薙鎌2丁が打ち込まれている。御柱曳きの前年神事として、四は見立てられた御柱木に打ち込む。これを「おね鎌を打つ」といっている。五として、北安藤郡小谷村の諏訪社に薙鎌を奉持した神使が派遣される。

小谷の資料でみると、明治11、18、41年のあと大正時代のものはなく、昭和に入つては18年以降のものが描かれている。これを見ると近世が終るまで守られていました薙鎌規制が解除されたもののように、形態は大きく

変貌してしまっている。長さが増したばかりでなく巾広になった。今まで変化の見られなかった頭部は大きく円くなり、嘴は矧く長く、円孔も大きく、頭から背にかけては据状に刻まれて逆毛を立てた鳥そのものとなっている。

この他にペリカン形・人魂形など誇張は極まってしまった。コミの向きも腹側に変って啄木のように樹幹にコミと嘴が打たれるようになっている。この変化は小谷の薙縫だけに見られるものではなく、御柱や船の幣束に打たれるものも、竿頭に挿されるものも皆同じ。打ち込まれる向きも腹側になっている。

4

昭和37年に藤森栄一は考古学的手法で薙縫撮年を行っている。⁽⁵⁾ 説方新六郎の薙縫以前に原初形態として出土した薙縫を置いているが、当時のこととして使用できたものは福井県御射山の発掘資料だけだった。旧御射山は鎌倉幕府の庭園を受けていた諏訪信仰施設で出土している大量のカワラケや宋銭から時期は13世紀後半以降に抑えられている。薙縫は長さ15cm程度の小形品で、腹側に刃は無く、コミは背側を向いているが嘴や背中の刻み目は微かである。

その後、昭和41年には北佐久郡立科町の兩境峠に築かれていた中与惣塚より古銭・薙縫・御正体が採集さ

⁽⁷⁾ れた。土器の出土がなく、その上、跡にかかる造構なので時間巾が生ずるが、古銭の大分を北宋銭が占めているので中世後半から近世初頭までとする。薙縫は9点あって、小型品は長さが15から10cmで頭部は未発達、目の表現もない。背の羽根状刻みの数も少ない。ただし、既に内側に刃はなく、コミは背側を向いている。中型品は15から20cmで嘴と眼がはっきりしている。

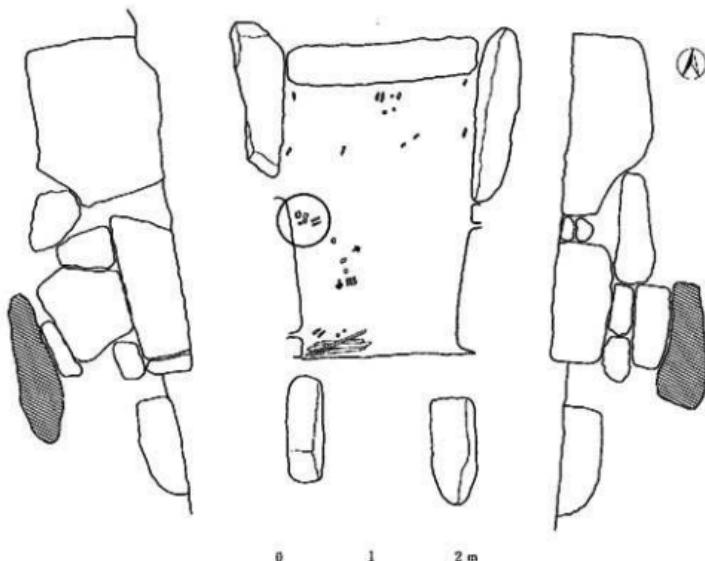
平成に入っては上信国境の菅平・四阿山山頂で薙縫13点が小柳義男により採集されている。伴出している珠洲焼きの壺、山茶碗、中世陶器により上限は13世紀から15・16世紀と巾広い。薙縫は小型品が多く、背に刻み目のあるもの10、嘴のあるもの5、円孔あるもの6点で、雨境時代のそれと同じ傾向を示す。

このように古代と中世以降とでは薙縫の実態は全く異なる。祭祀具である薙縫は出現当初より目・口・背中の刻み目が施されてある種の動物を表現している。

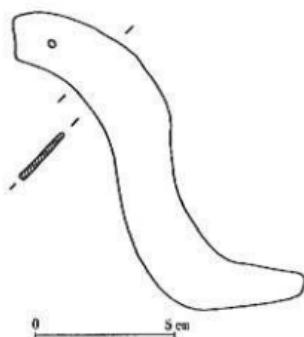
竿頭に挿されるか樹幹に打ちつけられるかはさておき、何物かに付随することで意味をもっている。

5

藤森撮年は新資料による裏付けもあって、肯定され薙縫研究は完結したかと思われてきたが平成7年の夏、南佐久郡白田町田口下町の五塚（ごあん）古墳より報



第1図 五塚古墳石室（○が薙縫出上位置）



第2図 五庵古墳出土薙鎌状鉄製品（1：2）

告者がいう薙鎌1点が出土したことで新展開をきたした。報告書にもとづく概要是以下の通りである。

墳丘は失われているが露出している石室の高さから墳高2mほどの円墳。玄室は箱形で床のレベルは奥部のそれより30cm深く塊石が敷かれている。玄室長2.75、奥壁巾は2mで1枚の鏡石で占められている。鏡石もそなうが側石や天井石にも溶結凝灰岩の大石が用いられている。壁高は西壁1.4、東壁1.2mを計る。後道は中1.1、現在長1.5mで長さは更に1mが加わるという。主軸はほぼ南北に向いている（第1図）。

出土遺物は武器と葬身具で、直刀は4口、1口には無窓小形な鐔が接着している。刀装具と思われる鉄環2、銅環1があり、鉄環の1つには側縁にU字形の銀象嵌が施されている。鉄環は破片を入れて14点。うち平根環が2点ある。尖根環の多くは長頭鍔笠被片切刃。葬身具は切子玉・管玉・丸玉各1と金環6点。この他に薙鎌状鉄製品1点、景徳元宝・水楽通宝各1点。

遺物の出土状態だが、古鏡2点が玄室内埋土の最上層で発見された他は玄室内敷石の直上より検出されている。玄室中央ではなく、西壁下より60cm以内にあつた。玄室南辺には直刀4口が東西方向に重ねられてあり、傍らに金環2、鉄環2点が存在。玄室南辺より1.3m離れた西壁下には鉄環2、象嵌のある鉄環1、薙鎌状鉄製品1があり（第3図）、東に離れて金環・鉄環が散乱。奥壁中央辺には鉄環・金環・玉類がかたまって大別3グループに括められる。

金環の数から追葬は行われたと思われるが古墳の使用期間はそう長いものではない。石室の形状と副葬品の内容とから7世紀代から8世紀初頭にかけての終末期古墳と判断した。

薙鎌状鉄製品はS字状に緩く彎曲していて動物に例



第3図 五庵古墳薙鎌状鉄製品出土状態
(臼田町教育委員会提供)

えるならば柄端そっくりである。長さは15、巾2.5cm。厚みには薄い厚いがあって3mmから1.5mmと計ることによって違いがある。刀は内側にも外側にもついていない。径2mmの眼が付けられている。先端は欠けていて、存したであろう口の表現はわからない。尾部はコム状をなすように自然にすばまつて終わっている。背部、体部に筋状の刻み目などはされていない（第2図）。

6

古墳報告者は鉄製品を中世以降薙鎌の祖型として扱っているが、既に薙鎌の考究には一応の結論がついているので認するには抵抗がある。もちろん、既知の資料など古代を考える上で九牛の一毛にも及ばず、新資料には虚心に対応しなければならないが、まずは今までの研究成果に照らしてみる必要はある。改めて五庵古墳出土の薙鎌状鉄製品の特徴を列挙すると、鉄製品であること、実用的な鐵器ではない。日の表現からある種の動物を模している。この3特徴を具えている遺物を古代の祭祀遺物中に探し得たが例品なし。古墳出土の鏡形鉄製品中にもなし。木製祭具中には鳥形や蛇形があるが結びつかない。ましてや終末期古墳の副葬品中に例品なし。結局は報告者の言の通り挙がってくるものは500年も後の諏訪神社に係る薙鎌だけで、この間を埋めるものは一つもない。

堂々めぐりになってしまふが、これは認を拒む理由には古墳出土の遺物を伝承という局地に鎮まる神社の中世祭祀具と繋ぐことにもありそうである。考究の矮小化をきたすという懸念の故だろうが、これに対しては諏訪神社には係らない原初形態の薙鎌出土遺跡の集成や民俗学の援用を受けることで解決の鍵が見出せるかもしれない。前者については中与惣塚や四阿山頂の例、それから『遊行上人縁起』に他阿真教が普光寺に詣でている場面がある。仁王門の内、五重塔の手前に2本

の柱が立っていて、それには10本以上の縄が打ち込まれている。後者については柳田国男の「矢立の木」^[30]が挙げられる。丸山正俊は薙縫状鉄製品はこれだけで完結していく柄などは付かないと考えている。尾部を握ってアーメランや手裏剣のように投げるのがまずは思いつく使用法で、このことから峰や山の大木の枝に投げ上げて、掛った場合に吉とする掛けの信仰が連想される。鉤や縄は現実なのである。

筆者はこの度、五庵古墳出土の該品を実見できる機会を得た。中世薙縫につながる遺物との印象を受けたがそこまで、それ以上の言及は成し得ず、ここに問題点の幾つかを挙げて大方の教示を願う次第。でき得れば薙縫には再度挑戦してみたい。

註

- 長野県埋文センター『中央道長野線埋文調査報告書3・5・6・7・9』同『上信越道埋文調査報告書42』1989・90・99。
- 長野県立歴史館『諏訪信仰の祭りと文化』1998。
- 福田泰策『内縫の示す姿の國境』信濃14-10.1962。
青木 治『長野県小谷四ヶ庄地方の諏訪神社及びその伝承と薙縫』信濃33-1.1981。
- 長野県教育委員会『諏訪信仰習俗』1972。

- 宮坂光昭「薙縫信仰」「諏訪市史上卷」所収、1995。
- 藤森栄一「薙縫考」信濃14-11.1962。
- 金井典夫「長野県霧ヶ峯旧御射山祭祀遺跡調査概報」考古学雑誌46.1.1960。
- 桐原 健「長野県北佐久郡立科町雨境神社祭祀遺跡群の踏査」信濃19-6.1967。
- 小柳義男「四阿山の山岳信仰」長野県立歴史館研究紀要5. 1999。
- 丸山正俊「五庵古墳出土の薙縫」「寺神古墳群」所収、1996。同「薙縫信仰・鉄錐」「南佐久郡誌考古編」所収、1998。
- 白田町教育委員会「寺神古墳群」1996。
島田恵子「南佐久郡の終末期占領の構造」「南佐久郡誌考古編」所収、1998。
- 国立歴民博共同研究『古代の祭祀と信仰付締・祭祀関係遺物出土土地地名表』1985。
- 真教の遊行は1289から1304年。
- 柳田国男「矢立杉の話」黒潮2.1.1917. 同「矢立の木」旅と伝説3.1.1930. 同「御頭の木」郷土1-3.1931。
桐原 健「薙縫私考」信濃29-1.1977。
- 島田恵子・丸山正俊両氏より多くの教示をいただいた。深謝する。

天狗岩洞穴の発掘調査 — 拝生時代の洞穴利用 —

天狗岩洞穴発掘調査団

天狗岩洞穴は、相木川右岸にある。ここは小海と北相木の町村境にあたる場所で、小海町大字小海字塩の平519番地にあたる。

この洞穴は、相木川の侵食により発達した洞部をもち、相原岩陰の利用などを考えると、洞穴利用の好条件下にある。しかし実際には、遺構・遺物の存在が未

確認で、周知の遺跡としての登録をうけていなかった。このため、遺跡としての確認の意味とその時代・利用形態などの把握も含め、平成7(1995)年9月2日から6日まで調査団が試掘調査を実施した。遺跡は3つの洞穴に分かれるが、そのうちの第1洞穴の雨だれライン付近にトレーンチを入れ、分層調査を行った。



第1図 天狗穴洞穴と調査メンバー



第2図 天狗穴洞穴の位置 (1 : 50000)

調査の結果、灰釉陶器を含む平安時代の文化層と弥生時代後期とみられる文化層を確認した。このうち弥生時代では灰層に伴う多量の獸骨のほか、骨製品・石器・土器などを検出した。

おそらくこの洞穴は弥生時代のハンティングキャンプなどとして利用され、動物などの解体がおこなわれた可能性がある。その証拠として狩猟用の黒曜石の石鎌が出土したほか、動物骨には解体痕（カット・マーク）がしばしばみられた。

動物骨の同定作業については、現在進めているところであるが、種としてはニホンジカ・イノシシ・オオカミ・カエルなどらしい骨がある。骨製品については、海洋性のイモガイの玉、骨鎌、切断された鹿角の先端部などがあった。

石器では、黒曜石の石鎌、安山岩のヘラ状の石器、研磨痕をもつ礫などがみられた。

今回の調査は、弥生の包含層の下を巨大な岩がふさぎ、縄文時代の文化層まで掘り進めなかつたが、おそらく下位には良好な縄文の包含層が眠っているものと考えられる。

現在正式報告を準備中である。

（調査団 中沢道彦・堤 隆）



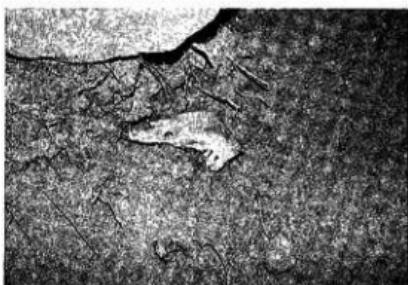
第5図 トレンチ調査状況



第6図 トレンチ完掘状況



第3図 洞穴奥から前庭部を見る

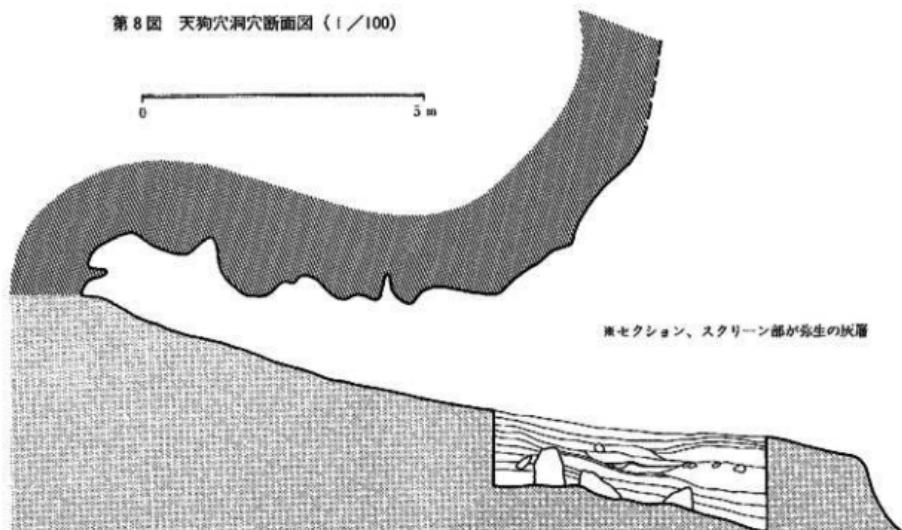


第7図 獣骨出土状態

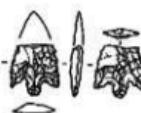
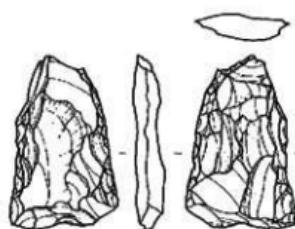


第4図 トレンチ内の獸骨の出土

第8図 天狗穴洞穴断面図 (1/100)

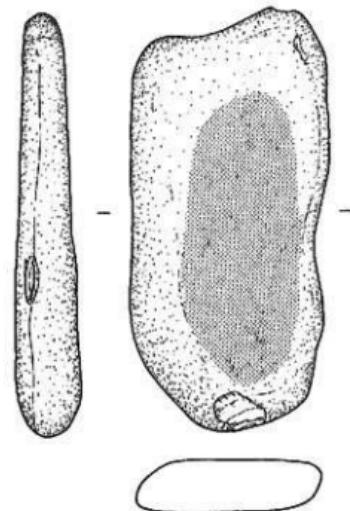


2 安山岩 ヘラ状石器



1 黒曜石 有茎石器

第9図 天狗穴洞穴出土石器 (2/3)



第10図 出土した骨骸と切断痕のある鹿角

3 痕痕のある理

燒町土器、国重要文化財へ！

御代田町川原田遺跡の縄文中期聚落（4500年前）から出土した焼町土器を含む出土品146点について、「長野県川原田遺跡出土品一括」として国重要文化財（有形文化財・考古資料）に指定するよう、国文化財保護審議会が4月16日文部大臣に答申した。考古資料としては東信初の重文指定となる。

焼町土器（写真）は、ドーナツ状の把手など躍動感あふれる文様で装飾され、浅間山麓の中期縄文文化を代表する土器である。指定は土器31点、土偶・耳飾・土製円盤など土製品39点、石鏃・石匙など石器79点である。指定をステップに4年後に縄文ミュージアムが御代田町にオープンする予定である。



ご結婚おめでとうございます

藤森英二さん、辻本絵美子さんが3月8日ご結婚されました。どうぞお幸せに！

♪ 編集後記 ♪

春の日本考古学協会が群馬大学であった。相変わらず本売り場は身動きとれないほどの人だかりだ。

しかし本店の本棚からは報告書があふれ出し、行き場を失ったまま山積みの現状である。職場もしかり。地震で報告書が本棚から落ち、骨折するという笑えない現実も聞いた。どの家族も本の洪水には閉口だ。

アメリカでは、CD-ROM一枚のみで、印刷物が付属しない報告書が出された。情報の質や量を落とさず、スリム化をはかるとなると、今後そのように方向転換せざるを得ないのだろうか？？？でもCDじゃ、実際見なくなってしまう気もするが……（つつみ）

佐久考古通信 No.75

発行所 佐久考古学会

〒385-0056 長野県佐久市桜井632-10
林 幸彦 方
郵便振替 00570-9-2842
☎0267(63)1963



発行者 藤沢 平治

編集者 堀 隆

印刷所 ほおづき書籍舎

佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡5 酒呑ジュリンナ遺跡	—愛知県豊田市幸海町一	唐沢 繕孝・安藤正俊	1
〔発掘された日本列島'99〕見学会		佐々木宗昭	2
中国紀行		島田恵子	3
1999年度 佐久考古学総会報告		林 幸彦	5
2つの阿玉台式土器	—板上遺跡の整理作業から—	藤森英二	6
矢出川遺跡の細石刃石器群と黒曜石石原産地		由井 昭・堤 隆	8
土鍋のつぶやき	—会員の身近なたより—		12
長野県弥生土器集成図録のお薦め			12

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 4

しゃらのみ

酒呑ジュリンナ遺跡

—愛知県豊田市—

唐沢 繕孝・安藤正俊

1

遺跡は、豊田市街地の東方約8kmにあります。豊田市のほぼ中央を流れる矢作(やはぎ)川の支流・巴川に注ぐ、小溪流白山川が形成した谷に面した、標高約120mの段丘上南緩斜面に、立地しています。

遺跡に立って、対岸の山並みを見ると、尾根の起伏が比較的おだやかで、この尾根と尾根に近い斜面は中世以前には、巴川沿いの交通路として使われていて、近世には谷底の道が岡崎市方面から足跡を経て信州へ向かう主要街道であったので、重要な尾根道に沿う遺跡とみることができます(豊田市教育委員会1978・1985・1996)。

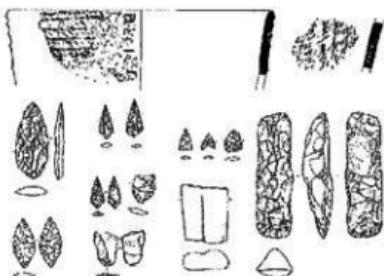


写真1 酒呑ジュリンナ遺跡

報告書によれば、発見は昭和34年6月頃、当時の地名・愛知県東加茂郡松平町大字酒呑字ジュリンナ20番地にある、小林雜貨商店の宅地整地作業中に石器が出土したことによります。

昭和41年3月と昭和43年3月に、名古屋大学考古学研究室によって、ジュリンナ10番地の1他が発掘調査されました。出土したその主要な石器組成は、石礫・有茎尖頭器・木葉形尖頭器・先刃搔器・不定形側刃搔器・打製石斧・砾石・石鐵形石製品・彫器?・握持状石器・礫器などがこれに加わって、隆起線文土器・爪形文土器・無文土器です。また、神子架型の局部磨製石斧が表面採集されています(第1図)。

昭和41年の第1次調査により、木葉形尖頭器・神子架型石斧などの神子架型石器群と、上器をともなう有茎尖頭器・石鐵群などに大別して、両者が編年的前後関係にあるだろうとされたのですが、昭和43年の第2次調査により、ほぼ一時期の同一文化の組成をなすものと確認してよいであろうとされました(愛知県東加茂郡松平町1967・1970)。



第1図 酒呑ジュリンナ遺跡の出土遺物

神子柴系文化遺跡の編年については、数多くの編年案が提出されていますが、ここでは、佐久考古学会とも関係の深かった、故森嶋鶴氏が1970年に提出されました。森嶋編年により酒呑ジュリンナ遺跡の編年的位置付けを見てみたいと思います。

森嶋氏は、神子柴系文化を6つの時期に区分され、その中で、酒呑ジュリンナ遺跡を一番新しいVI期に位置付けられました。I期は、大形の神子柴型尖頭器と神子柴型石斧が存在する長野県・神子柴遺跡に代表される段階、II期は尖頭器がやや小形化する長野県・唐沢B遺跡の段階、III期は神子柴型石斧の小形化にみる青森県・長者久保遺跡の段階、IV期は神子柴型石斧・尖頭器に茎尖頭器と隆起線文土器を伴う新潟県・田沢遺跡などの段階、V期は神子柴型石斧・尖頭器に石錐と矢柄研磨器・隆起線文土器を伴う新潟県・小瀬ヶ沢洞窟などの段階、VI期は神子柴型石斧・尖頭器に爪形文土器などを伴う山形県・日向洞窟、そして、愛知県の酒呑ジュリンナ遺跡です（森嶋1970）。

森嶋氏は、その論文の中で、I期からVI期までの変容により、「石器の極小化」を指摘されています（森嶋1970）。96年に私たちは、地元の豊田市郷土資料館で、名古屋大学考古学研究室所蔵の、酒呑ジュリンナ遺跡出土の石器類を、ガラスケース越しに見ることができました。98年には、駒ヶ根市の林茂樹先生のご配慮で、上伊那郷土館で神子柴遺跡の石器を手にとって実見することができました。VI期の酒呑ジュリンナ遺跡の石器は、I期の神子柴遺跡の石器に比べて、何もかもが小形でした。森嶋氏は、「形態の変化は機能の変化に対応するものである（森嶋1968）」とされています。では、神子柴系文化遺跡の各段階による石器の極小化に

「発掘された日本列島'99」見学会

9月5日㈰、佐久考古学会見学会が催された。当日は快晴、ゆく夏を惜しむかのような汗ばむ暑い1日であった。メンバーは井出正義前会長を筆頭に、藤沢会長・林事務局長のほか、井上行雄・由井明・島田恵子会員など10数名の佐久考古学会員と、これに発掘現場の協力者の有志も加わり、にぎやかに佐久を出発した。

長野道を順調に進んだ一行の車は、99考古速報展の会場となる長野市立博物館に12時到着した。参加者は国内で最も話題を呼んだ出土品の数々に、昼食時の空腹も忘れ、1時間半見入った。中でも話題の富本鏡やコバルトブルーの美しいプレスレットは人気の高いお宝であった。

名残り惜しさの中見学会終えると、ドライブインおぎのやで、やや遅い昼食の釜飯をとり、各自大本喰へ。

は、どのようなことが考えられるのでしょうか。

98年5月9日、上伊那郷土館で林先生は、「神子柴遺跡の石器には、ナウマンゾウの脂肪酸が付着しているかもしれない。実見には手袋を着用して下さい。」とご説明いただきました。私も神子柴遺跡を残した人たちが、ナウマンゾウを狩猟対象獸としていた可能性は極めて高いと思います。

また、林先生は98年7月4日、上伊那郷土館での「シンボジウム神子柴石器群をめぐる諸問題」の席で唐沢に、「神子柴型石斧は、動物を解体するための解体具だと考えている。」と教えていただきました。

狩猟対象獸が、ナウマンゾウだからこそ、神子柴遺跡の尖頭器・石斧などの石器は大形でなければならなかつたのでしょう。ではなぜ、極小化していくのでしょうか。

シンボジウム2日目の5日の夜、林先生はお札の電話をした唐沢に、「マタギの祖こそ、神子柴遺跡である。」と教えていただきました。

現在においても、マタギは東北地方に存在しており、彼らの狩猟対象獸は熊です。つまり、神子柴系文化遺跡の各段階による石器の極小化には、ナウマンゾウ絶滅のため、大形獸から熊などの中形獸への狩猟対象獸の変化によると考えられると思われます。

参考文献

愛知県東加茂郡松平町 1967 『酒呑ジュリンナ遺跡 調査報告書』

愛知県東加茂郡松平町 1970 『酒呑ジュリンナ遺跡 第2次調査報告書』
(紙幅の関係で他の文献は省略)

大本喰の中は、外の暑さとは対照的でひんやりと心地よかったです。

大本喰見学会後は帰路につき、5時に佐久駒場公園で無事解散。中身の濃い見学会となった。

(見学会幹事 佐々木宗昭)





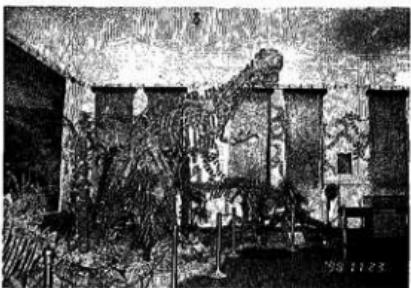
1

日本大学通信教育部創設50周年の研修旅行で、懐れの中国へ旅する機会に恵まれた。大学の医学部同窓会よりベテランの医師を派遣して下さり、50代～60代までの年齢層にとっては心強い旅となった。

中国は海を隔てただけの隣国であることを、成田から2時間半のフライトで実感させられた。時差わずか1時間である。日程は、上海～成都～重慶～長江三峡下り～武漢～上海の9日間の計画だった。

上海で一泊し、翌朝西南航空の直行便で四川省の成都に向かった。中国的都市はどこでも建設ラッシュで活気に満ちあふれている。小さな町の小路や人の出入りの多い場所は屋台などのにわか商店があふれていた。農村と都市の経済の格差は大きいようである。

成都では、詩人杜甫がかつて庵び住まいをした杜甫草堂と三国志の英雄諸葛亮孔明を祀る武侯祠を見学し、翌日は高速道路をバスで重慶へ向かう。日本のようにきれいに整備された高速道ではなく、砂利や石がその



重慶博物館 出土した恐竜を復原

まま放置されたガタガタ流であった。重慶の人口は310万の地方都市で、坂が多く霧の町であるという。「重慶博物館」は、四川漢代の芸術品が並んでいた。とくに陶器が多く本場の青磁に見られ、岡縁を求めるように通訳の鍾明徳青年にお願いしている内に時間を費やしてしまい、次の恐竜館での説明を聞きのがしてしまった。初めてみる恐竜の卵に口を奪われる。

2

4日目は、5時30分にモーニングコール、6時朝食、ホテルを発つのは7時であった。いよいよ三峡下りの豪華船6階建ての「長江王子」に乗船する。午前中はベットに横になりながら部屋の窓から変化する沿岸の景色を眺めて過ごす。長江はチベット高原に源流をたどる6,300kmの中国最大の大河である。

午後、「鬼の都」豊都を見学のため一時下船する。日本では閻魔様の十王像として親しまれ、人間の生前の罪の重さを審判する地獄にいる大王たちである。近所のお寺にある小さな像を見慣れているせいか、中国特有の等身大以上の大きな像には驚かされる。

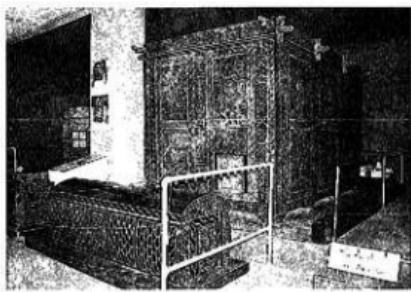
夜は船長主催のディナーで紹興酒をつい飲み過ぎてお腹をこわす。ドクターから薬をいただき不名誉な患者第1号となる。夕食後は中国の民族舞踏・ゲーム・ディスコなどを見て楽しみ、船内の画家の作品を買いたい求める。値段は交渉次第なので同行者の主婦の方にまかせて、黙って聞いていると6,000円が半値になる。彼女は交渉が実にうまく以後全てお頼いする。1万円の米肉を2個買うからと2,500円まで下げさせた。見事な腕前である。甘うまの値段でつい買ってしまう私を見かねてのことであったが、慣れるに従って私も値下げ上手になっていた。

3

5日の午前は、三峡入りの断崖に建つ三国志の舞台で有名な白帝城を見学する。800段の石段を登って頂上から望む長江は1本の筋のようだった。城内には、病



長江の支流小三峡の農村風景（沙を馬に運ばせている）



曾侯乙墓の棺



北京の旅行社に勤める宋莉さんと



乙墓から出土した楽器を復原 それらを使って演奏



上海豫園

床にある劉備玄徳が赤坂から呼びよせた、諸葛亮孔明に息子を託すシーンがやはり等身大の像で再現されていた。

午後は、小舟に乗りかえて長江支流の小三峡下りを楽しむ。入口の龍門口から、龍門峡・巴縣峡・滴翠峡まで50kmあり、岸で洗濯をする女性、山半が絶壁で遊ぶ少女や、馬で紗利を運んでいるなどのかな景致をながめながら上る。長江の水は茶色で濁っているが、小三峡の澄んだ水にホッとする。舟から下りて散策コースをまわり、再び舟に戻って同じ景色を楽しみながら下る。

長江クルーズもいよいよ最後の日となった。西陵峡を通過すると、世界最大級の三峡ダム建設現場に入る。ダムの目的は経済効果はもちろんあるが、第一に洪水対策にあるという。夏の洪水でこの旅行も危ぶまれたが、復旧は意外と早く11月21日からの旅行は実現されたのであった。ダムに対する日本からの援助がもう少し多くあれば助かるとはガイドさんの弁であった。

途中、炭鉱があり労働者の住宅という高層マンションが建ち並んでいた。さすが社会主義の国であるという感じを感じはじめて味わった。沙市で下船したのは夕方近かった。小雨が降っていたがしばらくして止んだ。荊州故城を見に行ったが暗くてほとんど見えなかった。余計な照明は使わないので街は暗い。ここでも社会主義國の一

面を痛感する。バスで今夜の宿泊地武漢へと向かう。

4

7日目は、バスで武漢市内を観光する。中国有数の重工業都市で街は活気があった。先ず、湖北省博物館へ行く。曾侯乙墓の出土品が展示されていた。1978年発掘調査され、保存状態がよかつたので青銅器・兵器・樂器・漆器・金玉器・竹簡など1万5,000点が出土した。埋葬年代と被葬者は、今から2,400年前の戦国時代早期、曾の國の侯爵乙という名の王であることが青銅器の銘文・竹簡に書かれていた6,696文字によって明らかになっている。

青銅器の尊盤は（酒器）透かし彫りの装飾が精緻で美しい。尊盤に限らず全ての青銅器の技術はさすが中國であるとの思いが強く伝わってくる。また、棺や樂器に施された漆をはじめ多数の漆器類は復原されて、当時の華やかさを物語っている。樂器は、鐘・磬・琴・笙など8種125点が出土し、音楽史研究の上で貴重な資料提供となっている。これらの樂器は全て復原され、演奏を披露してくれた。古の調べに心がなごみ去りがたい思いだった。

次の目的地は、江南三大名樓の一つである黄鹤楼を

見学。中国独特の棟の建築に魅せられる。午後は、清の1644-1661に建てられたという禅宗の塔元禅寺を見る。阿弥陀・觀音・勢至の三尊と五百羅漢を安置するが三尊の像は日本とは全くちがう雰囲気であった。

16時の飛行機で上海に向かう。空港で長江王子の船内で友達になった中国婦女旅行者の宋莉さんに再会する。北京へ帰るという。いつか北京へ旅行する折にお会いすることを約束し、一緒に写真を写して別れる。

5

上海に着くと飛行場からサーカス劇場へ直行する。サーカスといつても曲芸や魔術などで、人間の限界とおもわれる曲芸に息を呑む。夕食は9時になる。中国旅行ではホテルの食事は朝だけで、夜もレストランでとるので時間のロスが多く、9時か10時にホテルにもどり、お風呂に入り荷物の整理をして、日誌を書くと寝るのは深夜になる。かなりの強行軍であった。

中国最後の日は終日上海市内観光で、黄浦公園、豫園、魯迅公園、上海の食品市場を散策する。人口1,345万の中国最大の経済都市は、今なお高層ビルの建築ラッシュでその発展ぶりはめざましく、東京を追い越す

(追いぬいた)勢いの町を目のあたりにして、私たち日本人は少なからずショックを受けた。アヘン戦争後、100年余の間植民地化された名残の建物は観光の名所になっているほどクラシックで重々しく、新しい建物の都市にマッチしていた。

夕食は、旬の上海ガニでさよならディナーとなり、私たちのテーブルは一番盛り上がり、明るい雰囲気であった。教育実習で一緒だった彼女を除いては、どなたも先輩ばかりで共に学んだ学友は一人もいないが、専攻科目は集中講義を受け、他は試験とレポートで単位を獲得した仲間達なので、昔からの知り合いのように親しくなり楽しい有意義な旅であった。

中国へ旅行して感じたことは、日本の文化は中国の真似ではなく、庭園、寺、塔、工芸、美術の分野は、より繊細で技術的に日本独特の文化を生みだしていることが分かった。そして日本人のルーツは中国にあるということを強く感じた。見かけたほとんどの人が、誰かに似ているのである。となりのおばさんであります。お兄さんであります。私のそっくりさんもいるかもしれないと思った。

今度は北京から黄河流域を歩いてみたい。

1999年度 佐久考古学会総会報告

佐久考古学会の1999年度総会が7月31日在佐久市浅間会館にて開催されました。18名の会員が出席され、議長に羽毛田卓也会員を選出し、総会が進められました。以下の議事が承認されました。

第1号議案

1998年度佐久考古学会活動報告

1 会議

- 98年6月2日(土)岩村田浅間会館で総会開催
- 98年7月11日(土)中込洞庭春で事務局引継会
- 99年7月10日(日)浅間会館で役員会・事務局会議・会計監査

2 例会

- 99年7月4日(土)遺跡見学会
佐久市跡部町田遺跡、辻の前遺跡

3 通信の発行

- 『佐久考古通信』73・74・75号の発行

4 保護活動

- 長野県考古学会が県教育委員会から受託した「埋蔵文化財バトロール事業」への協力。

第2号議案

1999年度佐久考古学会活動計画

1 総会

99年7月31日(土)

佐久市岩村田 浅間会館

2 例会

①遺跡発表会(総会と同日)

绳文中期北相木村坂上遺跡の調査

清水田遺跡II、円正の坊遺跡III、上直路遺跡II

②見学会 発掘された日本列島99特別展の見学

99年9月5日(土)長野市立博物館

担当 佐々木・三石・桜井会員

③発掘遺跡の見学会 佐久市深瀬遺跡群

99年11月中旬~下旬予定

担当 佐々木・三石・桜井会員

④遺跡報告会および忘年会

99年12月4日(土)

担当 森泉、小林会員

3 講演会

2000年2月 講師は未定

担当 小山、白田、花岡会員

4 会議

役員会・事務局会議 隨時

5 保存運動

遺跡保護保存アピール、埋蔵文化財バトロール

6 通信の発行

『佐久考古通信』76・77・78号の発行

2つの阿玉台式土器

—坂上遺跡の整理作業から—

藤森英二

1 整理作業

北相木村の坂上遺跡（第1図）では数多くの縄文土器が出土し、その一部を『佐久考古通信』No.74（以下前報告）でも紹介したが、その後整理作業を続ける中で、当地方の地域性を考えるようになった。

南佐久は、西に八ヶ岳をはさみ源流地と接し、東はすぐに関東、そして南は山梨県と縄文遺跡の濃厚な地域に囲まれている。さらには千曲川を遡るルートで北佐久、あるいは北信地方からの流れもあるはずである。このような地であるのだから、様々な地域の土器が見られるのではないか？あるいはそれらの影響を受けた土器が存在するのではないか？所謂「異系統土器群の共存」や「異系統文様の共存」である。実際整理作業を続けると、特に縄文中期の資料にその傾向が認められ、前報告ではその例となるかも知れない資料を紹介したが、ここではこれらとは「異系統」の土器の例として阿玉台式土器を取り上げてみた。しかし、阿玉台式とはいっても、その中の状況も一筋縄ではいかないということを併せて紹介したい。尚、坂上遺跡調査の概要については前報告を参照していただくことで、ここでは省略させていただく（報告書は来年3月刊行予定）。

2 坂上遺跡の阿玉台式土器

阿玉台式土器は、関東地方東部が分布の中心とされる土器であるが、長野県内でも、この土器が見つかる自体は珍しいことではないようだ。御代出町川原田遺跡の報告書では、この系統の土器の変遷さえ述べられている。北相木村内でもこれまでに発見例があり、復原された標本が博物館に展示してある。

昨年の坂上遺跡の発掘調査で検出された資料に阿玉台式土器があることは既に前報告でも触れたが、ここではその例1点と、もう1点特徴的な資料をあげておきたい。なお後者については後に述べるように阿玉台式と呼ぶにはやや躊躇するものがある。各位のご意見をお聞かせ願いたい。

第2図・1は包含層出土であるが、比較的大型の破片

資料で口径約29cmになると思われる。裏面は黄褐色で横方向の調整が認められるが、成形時の浅い凹凸を残す。表は一部黄褐色ではほとんどが黒褐色。やはり上に横方向の調整と成形時の凹凸を有する。焼きはよく、胎土には1~2mmの頗かな黒雲母を多く含む。この黒雲母の小ささがやや気になるが、口縁の形態や一列の角押文などからいって、阿玉台1b式としてよいであろう。搬入品と呼んでもよいかも知れない。この様な土器は他にも數個体の破片が確認されている。

一方の第2図・2は、やはり包含層出土であり、シリエットとしては第2図・1によく似ている。色は全体的にやや赤みを帯びた黄褐色。黒雲母は極少量である。裏面にはやはり横方向の調整や成形時の浅い凹凸があるが、器厚は厚い。そして、本来角押文が施される筈のところに、沈線による文様がある。しかも、どうやら失敗した沈線をきれいに消さずに上からさらに施文しているようだ。やはり口縁の形態から時期的には第2図・1と同時期と思いたいが、全体としてこれらのよう構造が感じられるのである。

3 何が土器に違いを生んだのか

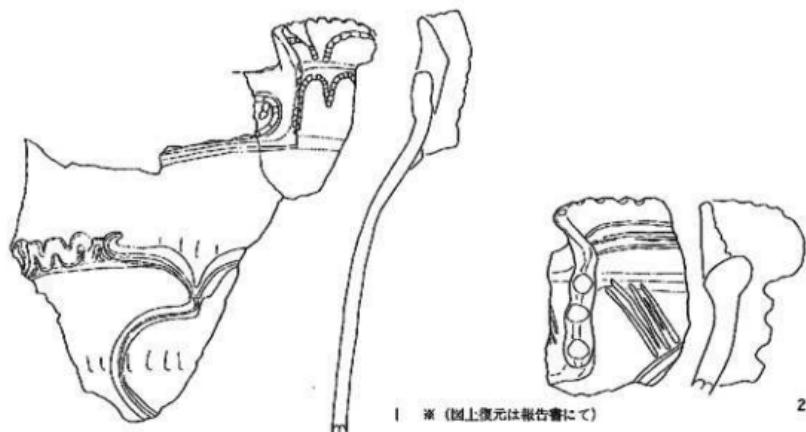
さて、考古学は分類が得意というか好きである。今もそれぞれ上記の土器に何らかの呼び名を与えるはあるいは概念的に整理しやすいかもしれない。しかしここではあえてそれは行わず、上記の2つの土器の違いに隠されているかもしれない事柄を、想像を含めて書き留めてみたい。

関東地方東部の土器が北相木村で見つかるということには、色々な解釈があろうかと思う。関東でつくられた土器が運ばれて来た。やって来た人が当地で土器を作った。あるいは北相木の人々が関東の土器を真似た。などなど。

第2図・1の土器が搬入品であるのではないかと書いたが、もしそうなら、やはりはるばる関東から運ば



第1図 坂上遺跡位置図 (1:50,000)



第2図 坂上遺跡の阿玉台式土器(1:3)

れた土器であろうか。運搬はさぞ大変だったろう。あるいは関東から来た人が当地で造った土器なのかも知れない。今一度、本場の阿玉台式を見てから述べるつもりであるが、もしそうなら「縫入り」などのドラマが隠されているのだろうか?これに対し第2図・2のような土器はどちらの人間がまねをしてつくった、いわば「えせ阿玉台土器」ではいか。同じような口縁を形成し、成形時の凹凸を残すという共通の技法が見えるものの、胎土がまるで違うし、特徴である角押文の施文さえ行わず、これを洗練で代用するなどは、模倣によるものではないのか。もっとも一方でこの時期には、他系統の土器で角押文を多用するものが多い(実際坂上遺跡から出土が多く、在地の系統の技法として良いように思われる)ことなどを考慮すれば、手抜きとも考えられようか。いずれにしろ問題はそう簡単ではなくそうだ。あるいはこのような考えは全く次元の違う話なのだろうか?ともかくも、こんな想像が出来るのも考古学的魅力であり、また難しいところだと

思う。

今後これらの土器について胎土分析等が行えれば、いくらかは本当に近づけるかも知れないが、今回紹介した資料はとともに包含層出土で、共伴土器とは言えないため、さらなる事例を探す必要もある。いずれにしろ、様々な地域の土器(あるいは文化)が流入する地域として、もう一度南佐久に目を向けてみたい(第3回)。

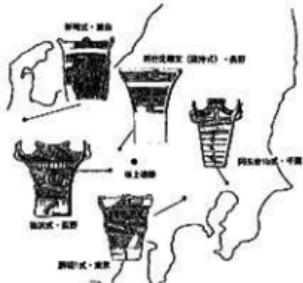
4 土器を洗う人

胎土分析。なんと魅力的な言葉だろう。すでに考古学は自然科学の力無くして詰れない。しかしながら、誰かが土器を洗い、注記し、実測をしている。誰であろう自分もその一人。しかしこの作業、一点一点確実に資料に目を通してのもの事実である。そして、同じ資料でも、自分のアンテナが増えさらにその感度が増せば、きっとより多くの、そして正確な情報が引き出せるだろう。やがては想像の話に科学的裏付けが出来るかも知れない。そう信じて、今日も本を片手に、バケツとブラシで土器を洗う地方公務員でした。

尚今回、東京都東村山市教育委員会の小川直裕氏に御教授を頂きました。末筆ながらお礼を申し上げます。

主な参考文献

- 山口逸弘 1994 「群馬・房谷戸遺跡」『季刊考古学』第48号 特集 桶文社会と土器
- 寺内隆夫 1997 「川原田遺跡縄文時代中期中葉の土器群について」『川原田遺跡・縄文編』御代田町教育委員会



第3図 ほぼ同時期の土器の分布



1はじめに

1953年、山井茂也・芹沢長介先生によって日本で初めて細石刃文化が確認された矢出川遺跡（矢出川第I遺跡）では、出土する細石刀のはほとんどが黒曜石で作られている。

野辺山高原の矢出川遺跡からは、八ヶ岳の黒曜石原産地（麦草峠・冷山・双子池）がもっとも近く直線距離にして20km、やや離れて和田岬や霧ヶ峰周辺の黒曜石原産地までは35kmである。

矢出川遺跡では、当然こうした近隣の原産地の黒曜石が用いられていることは想像に難くない。しかし、科学的な原産地同定によって、矢出川遺跡の細石刃の黒曜石原産地推定が試みられたことはこれまでなかった。

本来矢出川の細石刃は、どの産地の黒曜石を用いて作られているのだろうか。この問題を解決するための端緒として、山井と堀はそれぞれが矢出川遺跡で採集した石器の一部について、原産地同定を実施することにした。分析は、石器原産地同定のエキスパートである京都大学原子炉実験所の藤井哲男先生にお願いし、非破壊法である蛍光X線分析によって、産地同定をおこなっていた。分析結果とデータについては「野辺山出土IH石器の石材产地分析」に掲載されている（藤井1995）。これまで分析資料の実測図等の提示や、産地同定結果の検討などがなされていなかったため、この紙上において報告をおこなうこととする。

2 同定産地

分析試料は23点で、矢出川遺跡での由井一昭の採集石器20点と、堀の採集石器3点である。器種内訳は、細石刃石核20点、細石刃石核原形1点、細石刃石核再生剥片2点である。分析試料のうち22点の黒曜石石器は無作為に抽出した。一方残る1点（5）は肉眼的に下呂石と推定される石材を意図的に分析試料とした。

まず同定された産地を以下に示す。

① 双子池

八ヶ岳の双子池原産地の黒曜石と同定された資料は6点ある。細石刃石核5点（1・2・12・17・19）、細石刃石核原形1点（16）である。

双子池の黒曜石は、隣接する麦草峠の黒曜石と比較すると構造的気泡を含むより良質であり、細かな細石刃剝離には向いているのかもしれない。藤井先生によればその元素成分構成も麦草峠とはわざわざにずれるとの事である。

② 霧ヶ峰

霧ヶ峰原産地の黒曜石と同定された資料は、細石刃石核5点である（3・6・20・18・8）。

③ 和田岬

和田岬原産地の黒曜石と同定された資料は細石刃石核1点（14）と細石刃石核打面再生剥片1点（23）である。

④ 神津島

太平洋上、伊豆七島の神津島産の黒曜石と同定される資料が確認された。器種は細石刃石核5点（13・22・10・7・9）である。

⑤ N K 原産地

N K 原産地とは、同じ野辺山の中ッ原第1遺跡G地点において、黒曜石製石器の成分分析の結果から導き出された一群を構成する黒曜石産地である（藤井1994）。しかしその場所は現在未発見で、どこに存在しているのかがわからない。ただ、中ッ原遺跡群においてきわめて大量に利用されている状況を勘案すれば、野辺山からそう遠くない場所に入知れず存在する産地である可能性がある。

N K 原産地の黒曜石と同定された資料は、細石刃石核3点（15・11・21）と細石刃石核作業面再生剥片1点（4）である。

⑥ 下呂石

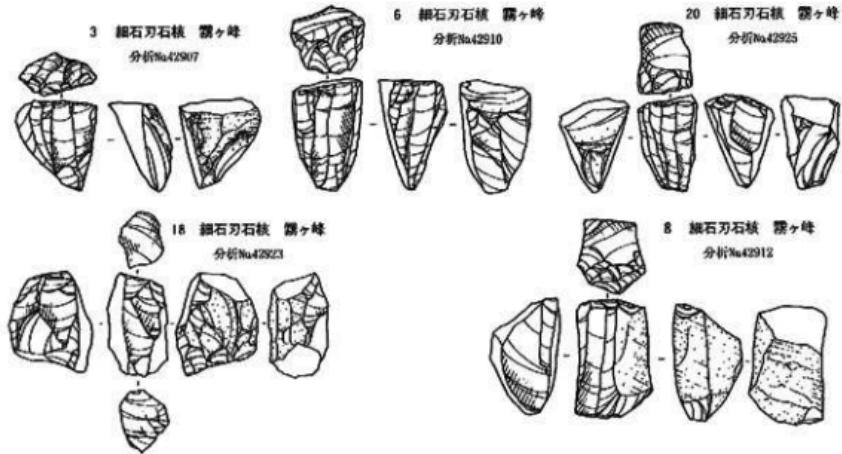
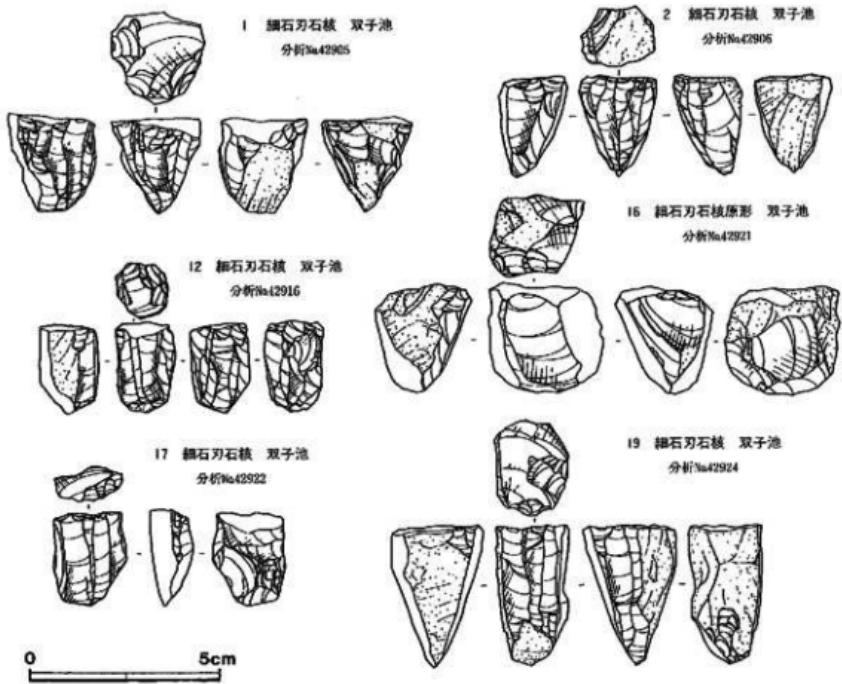
黒曜石以外では、肉眼での予想どおり、細石刃石核1点（5）が、およそ100km離れた岐阜県湯ヶ峰などで産出する下呂石を用いているという同定結果がだされた。

3 矢出川細石刃石器群の黒曜石利用

今回分析した試料23点の石材産地は、黒曜石では、双子池6点、霧ヶ峰5点、和田岬2点、神津島5点、N K 4点となり、下呂石1点も含まれていた。双子池・霧ヶ峰・和田岬の黒曜石が用いられている点に関しては不思議はないが、神津島産の黒曜石が5点含まれていることに関しては驚きを禁じえない。

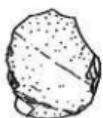
矢出川・神津島間の直線距離でおよそ200km、氷河期の海面低下が最大で140mあったにせよ本土と神津島とは陸続きにはならない。海路および陸路の長い道のりをへて、どのような背景をもって矢出川の地に神津島産の黒曜石がもたらされたのであろうか。その謎の解明にはいましばらく時間がかかる。

さて、矢山川遺跡の細石刃石核は、かつて半円鎧形

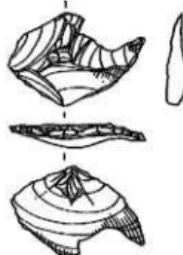
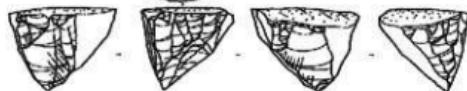


第1図 矢出川遺跡の产地同定資料 (2/3)

23 鋸石刃石核打面再生削片 和田岬



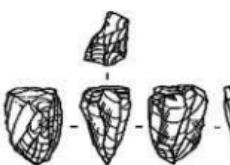
14 鋸石刃石核 和田岬
分析No42918



13 鋸石刃石核 神津島
分析No42917



分析No42928



22 鋸石刃石核 神津島
分析No42927

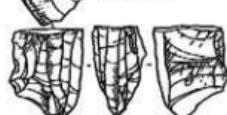
10 鋸石刃石核 神津島
分析No42914



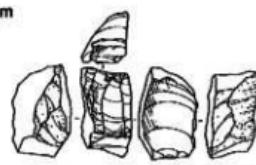
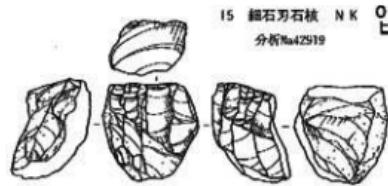
7 鋸石刃石核 神津島
分析No42911



9 鋸石刃石核 神津島
分析No42913



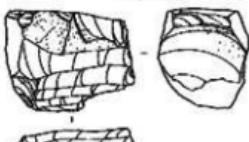
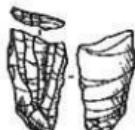
15 鋸石刃石核 N K 0
分析No42919



21 鋸石刃石核 N K
分析No42926



5 鋸石刃石核 下呂
分析No42909

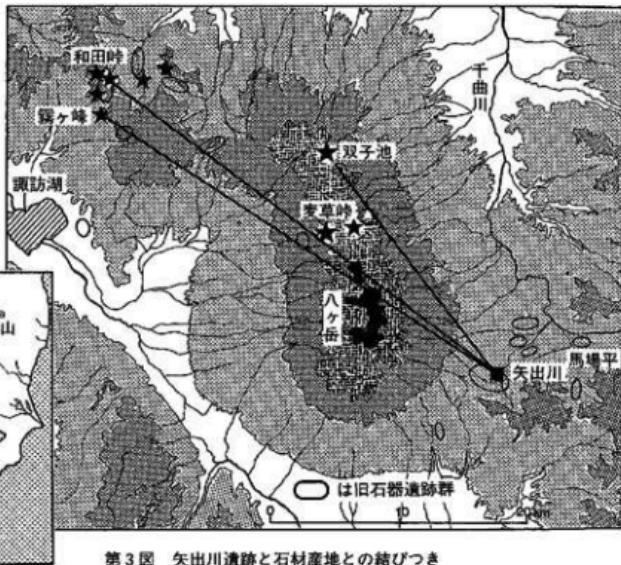


4 鋸石刃石核作業面再生削片 N K
分析No42908

第2図 矢出川遺跡の産地同定資料 (2/3)

第1表 矢出川遺跡の
石器と石材産地

遺跡	石器発見地	精査済石器	精査未済石器
双子池	5	1	
櫛ヶ峰	5		
板崎地	1		1
神津島	5		
NK	2		1
下呂	1		
計	26	1	2



第3図 矢出川遺跡と石材産地との結びつき

と呼ばれ、やがて棱柱形（安藤1979）という形態呼称もなされ、楔形細石刃石核と対比されてきた。また、白流型などの楔形細石刃石核に対して、矢出川型あるいは野岳・休場型（鈴木1971）などと呼ばれることがある。そうした意味において、ここで分析した黒曜石の細石刃石核類22点は、棱柱形あるいは矢出川型といった形態的特徴をよく示している。

では、細石刃の残核形態や細石刃剥離の技術的特徴において原産地間の微妙な差はないのだろうか。今回双子池・櫛ヶ峰・和田岬・NK産の細石刃石核の多くはいずれも原石面を残し、中には3面に原石面が残る資料（16）もあることなどから、原石獲得の際には比較的小形の原石が選択的に入手されたものと考えられる。これに対し、神津島産の細石刃石核には原石面はみられない。あるいは前者より大きめな原石から取られた分割素材が、細石刃石核原形にあてられているものと考えられる。また、残核段階でのサイズも前者にくらべ神津島産はやや小ぶりであるといえる。

一方、下呂石の細石刃石核5は、棱柱形をとる黒曜石の矢出川型の細石刃石核とは異なり、直方体の原形をみせる。細石刃剥離作業面も2面あり、作業面転移が認められる。また、平坦均等な打面を持ち、矢出川型の細石刃石核にしばしばみられる打面調整もなされない点で異質である。石材に対する技法・形態・型式の相違がみてとれる資料である。

4 おわりに

矢出川遺跡においては、現の試算では発掘資料・採集資料あわせて、細石刃5000点以上・細石刃石核644点におよぶ膨大な資料がこれまで得られている。今回は、23点（全体会約3%）という数少ない試料の産地同定にとどまったが、わずかな資料でこれだけ多様な産地が確認されたという意味では、細石刃石器群全体でどのような産地構成をみせるのかが非常に興味深い問題である。この点をふまえ、今後もより産地同定資料を増やしたいと考えている。

最後に、原産地同定を実施していただいた栗科哲男先生に厚く御礼を申し上げたい。

引用文献

- 安藤政雄 1979 「日本の細石核」『駿台史学』47
- 鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8
- 栗科哲男 1996 「野辺山出土旧石器の石材产地分析」『中ッ原第1遺跡G地点の研究』I

* 本報告は平成11年度長野県科学振興会より提携に交付された、科学研究費助成金「信州産黒曜石の分布・利用に関する理化学的研究」の研究成果公開の一部である。

土偶のつぶやき



会員の喜びより

佐藤純一郎

先日、新聞でも話題になった北御牧村の野馬除けの発掘に参加しました。

島田幹子

毎日、ピットの図面と戦っています。

白田武正

現在川上村福祉体験教室の運営委員をしており、ダイ・サービスセンターで介護体験の補助などのお手伝いなどもしています。福祉や介護問題を実感させられるこの頃です。見学会、行けなくて残念です。

長野県弥生土器集成図録のお薦め

今年2月、長野県考古学会弥生部会では「99シンボジウム長野県の弥生土器編年」を開催しました。その際、長野県弥生土器集成図録も刊行しました。中期後半以降の長野県の弥生土器を網羅した標準資料です。県内外から注文が相次いでおり、残部僅少となっています。購読を希望される方は下記までご連絡下さい。住所 〒389-0206 御代田町4108-1880 小山岳夫方価格 5,000円（会員には送料サービスします）

♪ 編集後記 ♪

「八ヶ岳旧石器通信」<http://www.avis.ne.jp/~tsutsumi/>というホームページを開設して早くも半年が過ぎた。八ヶ岳の自然や旧石器の紹介のほか、ミュージアムショップを開き、報告書・グッズなども販売している。アクセスは3468件となり時々は本の注文も舞い込む。いそがしい原稿を送るとき、考古学の情報交換のときインターネットはつくづく便利な道具だと思う。

さて、1999年7月が何事もなく過ぎた。そして迎えるは2000年である。2003年は矢出川遺跡発見50周年だ。先日お会いした由井茂也さんは、なによりお元気そううれしかった。

大沢俊雄

元気でやっています。日曜や祝日は私の半の行事が多く、今回のような見学会などはなかなか参加できず、残念です。

青沼博之

この頃は、まったく自分の時間がもてません。埋文化時代が懐かしく、人間的であったとつくづく感じております。

渡辺重義

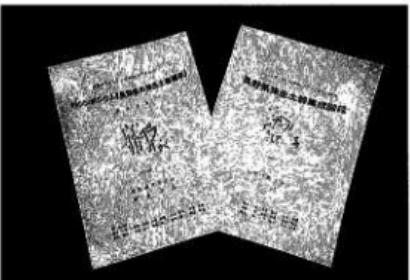
目下、古道・古牧・古仏・古碑や古代の製鉄などに興味をもっています。また、古墳から出土する馬具のことなどについても関心があります。見学会は、車など足がないため、なかなか出かけられません。

水沢教子

現在、長野県埋蔵文化財センターの篠ノ井整理棟で、3000箱の遺物と格闘しています。報告書の締め切りはきびしく述べに頼るこの頃です。

大井源寿

宮平遺跡のある御代田町豊昇区の文化財写真集や、伍賀農協の50年史などの編集の仕事をしています。



佐久考古通信 No.76

発行所 佐久考古学会

〒385-0056 長野県佐久市桜井632-10
林 幸彦 方
郵便振替 00570-9-2842
00267 (63) 1963

発行者 藤沢 平治

編集者 堤 隆

印刷所 ほおざき書籍 制



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡5 世界遺産	周口店遺跡と北京原人	—中国・北京郊外— 1
縄文トーキン 御代田 元気印! 縄文人の暮らし	竹下景子 (女優)	V.S.岡村道雄 (文化庁) 2
柏 垂露跡の尖頭器と黒曜石原産地			由井一昭・堺 隆 6
柄原岩陰遺跡東北部天狗岩岩陰の調査			藤森英二 8
会員訪問 木内捷さん			
土偶のつぶやき		 11

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡5

世界遺産

しようこうざん

周口店と北京原人

—中国・北京郊外—

今年からちょうど70年前にあたる1929年、中国北京郊外の周口店で、ロックフェラー財團の援助によって発掘にあたっていた中国の考古学者裴文中は、きわめて古い人間の頭蓋骨を発見した。

肩ひさしが突き出で、頑丈なアゴをみせる反面、現代人のようにオトガイが発達せず、その頭蓋骨は原人としての形質をよくそなえており、「北京原人」として広く世界に知られるようになった。

北京原人は、同じアジアで発見されているジャワ原人にくらべると華奢で小ぶりであり、身長は160センチほどみられる。



周口店の洞穴

北京原人は今から50万年前といわれる人類である。その骨が発見された周口店は、1987年に世界遺産に選定された。しかし、北京郊外ということもあり、観光ルートからは外れて、比較的ひっそりとしている。

周口店の洞穴には、灰などの堆積層がみられ、北京原人がすでに火を用いていたものと考えられている。ただし、それについては、野火などによる灰の堆積層の可能性があり、火の使用を疑問視する研究者もある。

北京原人の人骨は、第二次世界大戦の混乱によってどこかに持ち逃げだされ、その所在がまったく不明で、科学史最大のナゾとまでいわれている。

不幸中の幸いだが、その精巧なレプリカが今日まで残されており、北京原人の研究を助けている。

本年、北京原人発見70周年の記念シンポジウムが北京で開催された。事前の日本の新聞報道によると、人骨は実は日本にもち込まれており、シンポジウムの際その在り処が発表される、ということで大きな期待が高まった。しかし、日本から参加した研究者に聞いてみると、それはまったくのデマであった。

ナゾの原人骨の行方は、ふたたび闇の中となつた。



北京原人の復元された頭骨（レプリカ）



★ 今なぜ縄文か?

竹下景子

こんにちは。竹下景子です。

今日は岡村道雄さんと、「縄文トーキー」をさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いします。

岡村道雄

こんにちは。文化庁の岡村です。

なぜ、縄文トーキーで竹下景子さんなのか。不思議に思われている方もいらっしゃるかもしれません。

そこらへんからお聞きしましょうか。

竹下

七つは私の主人（写真家の関口照男さん）が、社会人として明治大学に入学しました。彼はとても人間に关心があったので、人類学や考古学を学びたいということでした。

そこで彼は考古学を選択し、弥生時代の絵画土器を卒論テーマとして勉強するようになりました。

私も主人が考古学を学んでいるというきっかけから、考古学に興味を持つようになりました。



竹下景子は、弥生系の顔立ちですか？

竹下

それから長野県にも縄文ビーナスというかわいらしい土偶がでますよね。

私も子供の学校交流で山形県を訪れた際、西ノ前遺跡で日本一長身といわれる縄文土偶を見て、感動したというのもきっかけのひとつです。

岡村

いつだったか文化庁で主催している新しいトピックス資料を集めた考古速報展の会場に、竹下さんが見に来られているとバイトの学生が騒いでいた。

「竹下さんって、元の竹下首相か？」（笑い）

と展示担当の学生に聞きましたところ女優の竹下景子さんであることがわかった（笑い）。

それから親しくさせていただくようになりました。

竹下

竹下元首相の家は私の家のすぐそばですよ。（笑い）

竹下

ところで岡村さん、世はまさに縄文ブームですね。

縄文というと現代にない懐かしさをなぜか感じます。

三内丸山遺跡をはじめとして、なぜ、こんなに縄文ブームがおきているんでしょう。

岡村

現代社会は完全に東京という首都中心で動いていますね。そうした中で、都市の矛盾に対する地域からの批判の声があがってきた。

ちょうどそんな時、北は青森の三内丸山遺跡や、南は鹿児島の上ノ原遺跡などの発見が相次いだ。

「なんだ、かつては地域地域ですばらしい文化が榮かれていたんじゃないのか！」

そんな見直しの中からも日本文化の基層にある縄文が注目を集めているんだと思います。



「今なぜ縄文か？」



★ 繩文人の横顔

岡村

竹下さんは、名古屋のご出身ですし、弥生系の顔立ちですかね。

竹下

そういう岡村さんは、繩文のお顔ですか？（笑い）

岡村

絶対繩文ですよ。顔のエラが発達してて、足が短く、体の重心が低い（笑い）。

そちらにいらっしゃる御代田の町長さんも、繩文系の顔立ちですかね（笑い）。

縄文時代も祖先はムラのリーダーをやっておられたんじゃないでしょうか？（笑い）

土屋清御代田町長

……。

岡村

この会場の中にも、繩文人のDNAをとって比べたら、多分つながる人がいるんじゃないかな。

竹下

ちなみに佐倉市の国立歴史民俗博物館で示されていました繩文人の身長は、私の身長と一緒にでした。

ところで繩文人の寿命はどうだったんでしょうか。

岡村

繩文人の寿命は非常に短かったと思います。栄養的にも衛生的にも抵抗力がないんでしょうね。

15歳の人の平均余命が15年といわれていますから、おそらく30歳ぐらいで死んだんでしょうね。

縄文人は、ガン年齢に達するまでに死んでいた。

竹下

じゃ、私の年齢だと完壁におばあちゃん？（笑い）

岡村

だから年齢的には、イラスト（上図）にあるような、祖母・母・孫というような家族構成は、ほとんどみられないかったんじゃないかな？

孫の顔をみると、おばあさんは生きられなかった。もちろん例外的に長寿の人もいたんでしょうけど。

竹下

このイラストにみるように、最近の縄文人はかなりこざっぱりと描かれていますが…どうだったんですか。

岡村

うーん、どうかな？

縄文人は当然、お風呂には入っていなかったんでしょうね……（笑い）

ああ、ただ温泉には入っていたかもしれません（笑）。妙高山の温泉の湯元からは縄文土器が見つかっているということですから…。

サルだって温泉に入っているぐらいですからね（笑）。

★ 烧町土器の華

竹下

それにしてもこの焼町土器、エネルギーですね。みててドキドキしちゃいます（笑い）。

岡村

浅間山麓の縄文人が元気だった証拠じゃないかな？

竹下

こうした土器は女性が作っていたといわれているんでしょう？

岡村

そのへんはボクは自身がないなあ～。

あっ、このことについては、会場にいる水沢さんのほうが詳しいですよ。

水沢さんは隣り町の軽井沢出身で、ボクの東北大の後輩にあたり、日本でも指折り数える土器製作についての女性研究者です。

水沢教子（会場から）

長野県埋蔵文化財センターの水沢です。

竹下さんにお会いできて光榮です。

竹下

ようこそお越しくださいました。



川原田遺跡

焼町土器



縄文人はお風呂に入っていたいなかったでしょうか

水沢

今日の世界の民族例の中では女性が土器を作る場合がきわめて多いといわれています。

だとすれば焼町土器も女性が作ったと考えることが可能ですか。

ただ、以前、新潟で大型の火炎土器を作っている人に話を聞いたことがあります。こういったものは重すぎて女性ではちょっと作れないんじゃないかな、とおっしゃってたのは印象的でした。

竹下

確かにこの土器、重そうですよね。

それにしても焼町土器って綺麗なデザインですね。

岡村

火炎土器に並ぶくらいにすばらしい土器じゃないかな。こんなにたくさんの土器を作る民族も珍しいですね。世界でもトップクラスじゃないかな？

竹下

でも、この土器の文様で縄文人はなにを表現したかったのでしょうか。ミステリーですね。

メキシコの博物館に行った時、ヘビやジャガーがデザインされた土器をみました。それは一族の出自をあらわす紋章ということでした。

★ 縄文人の食生活

竹下

で、この土器は何に使われたんですか？

岡村

(焼町土器の内部を覗きこんで)

中にオコゲなどが残っていれば、煮炊きに使われたことが証明できるんですが。

竹下

このあいだ、岐阜の飛騨高山の竪穴住居で縄文体験をしてきました。そこにはいろんな食べ物があって、イノシシ・シカ・クマの肉などを食べてきました。イノシシはすごくおいしかったですよ。

また、トチノミのすり潰したものや、キノコ・エゴ

マなども食べました。

こちらでもエゴマは食べるんですか？

吉田御代田町教育長（会場から）

はい、すり潰してオハギなどにつけて食べることができます。

路地などで作っている家もみかけます。

岡村

縄文時代では、エゴマの他、綠豆やヒヨウタンなどを栽培した証拠もみつかっています。

岡村

明治の統計では、長野県は昆蟲食日本一ですよね。縄文人もハチの子やザザムシなどの昆蟲をたくさん食べたんだと思いますよ。タンパク源ですよね。

竹下

その土地でとれた四季折々の旬のものを縄文人たちが食べていたんでしょうね。食べるってことは生きていることの感謝なんだと私は思います。

縄文人も苦労して食糧を得ていたんでしょうね？

岡村

どうでしょうかね。意外と楽をして暮らしていたんじゃないですか。

果報は寝て待てっていうぐらいですから、落とし穴でも掛けた後は、寝てまつたんじゃないですか（笑）。現代の狩猟民の人たちも4時間くらいしか働いてないといいますよ。

竹下

縄文入っていいですね。

私がアフリカにいったときは、おしゃべりしているのは男性で（笑い）、子供や女性はとにかく一生懸命働いていました。

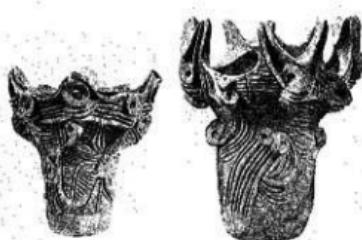
岡村

…………。

★ 元氣印／縄文人の暮らし

竹下

縄文人には苔葉はあったんでしょうか？



川原田遺跡 焼町土器

岡村

古葉がなければ、こんな複雑な社会はできないと思います。
竹下

豊かな自然のなかで木の実がとれたときとか魚がとれたときとかは歌を歌っていたと思うんですが？

縄文人はどんな歌を歌ってたんでしょうか。

岡村

どんな歌でしようかね。そのときにはみんなで祭りをした。最近は酒もあったこともわかっていますので、収穫祭には酒があり樂器があり踊りもあった。女性のシャーマンなんかもいたんでしょうね。

岡村

あっ、そうだ。

こんど縄文の女性シャーマンの役なんかを演じてみてはいかがでしょうか、竹下さん（笑い）。

脚本は私が書きますよ（笑）。

竹下

……。

岡村

縄文人の酒も、現代人のようにカウンターでヤケ酒を飲むようなのはありっこないですね。みんなで明るく元気印で、ワ～っと飲んだんでしょうね。

つい酒の話になりました。私も好きなんですから……（笑）

竹下さんもお好きなんですね、お酒？

竹下

ええ、ほんのちょっとは……

岡村

今度ふたりだけで飲むのはいかがですか？（笑）
…すみません、どうぞさまざまにこんな話を（笑）

岡村

ところで今、歌や言葉の話がでましたが、それは目に見えない部分です。



エルギッシュの竹下景子。漫遊山巒の「文人」が元気だった顔見じゅないかな？



私たち研究者は日の前にある遺物のことしか考えないが、ほんとうは目に見えない部分で何をしていましたかを考えなきゃならない。それが考古学だと思うんです。

逆に考えると考古学は、みんなができる楽しい想像の学問といえますよね。

竹下

ほんとうに夢のある学問ですよね。

竹下

さて、今日の縄文トークの中で、縄文人たちが豊かな自然の中で、四季の味覚を楽しんだり、お祭りをしたり、お酒を飲んだり、元気に暮らしていたことがわかつきました。

私たちも縄文人に見習って元気に暮らしてゆきたいものですね。

（おわり）

縄文トークの楽屋から

縄文トークは、施田土器の国重文指定を記念し、9月18日、御代田町福祉センターに行われました。岡村さんに無理をお願いして、竹下景子さんをご紹介いただき、お二人の超絶密なスケジュールをはってようやく実現にこぎつけました。

その2週間前の打合せの際、本物の竹下景子さんを前に、私はキンチョーしまくりましたが、素顔の竹下さんは、飾らない気さくな方で、ほっ、としました。（竹下景子さんに1,000点！！）

竹下さんは、譲譲されていましたが、すでに三内丸山や上ノ原、桜町など日本の主要な遺跡のフォーラムに出演されており、縄文時代については深い知識をお持ちでした。当日の縄文トークでも機知のきいた話で聴衆を魅了され、さすが、「三沢の女王」（クイズ・ゲーピー）と思わずにはいられませんでした。

さて、NHK「課外授業ようこそ先輩」に出演された岡村さんをご覧になりましたか。かつての無邪気な岡村考古少年の様子がそこにはありました。楽しい考古学を標榜する岡村さん、日本の埋蔵文化財行政のトップとして、ご活躍を期待いたします。

（つづみ）



1 柏垂遺跡

八ヶ岳野辺山高原の西川右岸、標高1,280mの河岸段丘上に、柏垂遺跡は立地している（第2図）。

柏垂遺跡は、芹沢長介教授の指導のもと、東北大学考古学研究室によって1972年に発掘調査が実施された。およそ100平方mの発掘調査区からは、尖頭器やナイフ形石器をもつ石器群が検出されている。

本遺跡での表面採集資料としては、1,000点を超える尖頭器がある。その7割は、長さ10cmを超えない中・小形品である。尖頭器の石材はおよそ8割が黒曜石、チャートが2割で、若干、水晶や安山岩などその他の石材がみられるのみである。

2 尖頭器の黒曜石原産地

今回、柏垂遺跡の黒曜石製尖頭器14点（第3図）について、京都大学原子炉実験所の萬科哲男先生に分析を依頼し、非破壊法である螢光X線分析により原産地同定を実施した。全点由井一昭の所有資料である。

分析結果については「野辺山出土旧石器の石材产地

分析」（萬科1995『中ッ原第1遺跡G地点の研究』IIに所収）にデータのみが掲載されているが、実際に石器の図示等がなされなかったため、今回改めて報告をおこなうこととした。

分析した尖頭器の形態には、両面加工（6・7・9・10・11・12・13）、半両面加工（1・2・8）、片面加工（3・4・5）がある。3・4・5などをみると、縦長片状を素材とし、その打面側を尖頭器の基部にあてていることがうかがえる。

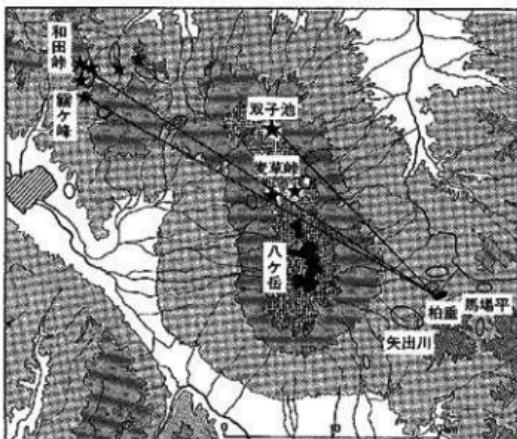
また、1・5などの石器の先端には、いわゆる掩撃剝離が観察され、本尖頭器が剝離の機能をはたしたことがうかがえる。

産地同定の結果、これら14点の尖頭器の黒曜石产地は、竜ヶ峰8点、和田峰3点、双子池1点、NK2点であることが判明した。

NKは中ッ原第1遺跡G地点において、萬科博士によって注意された所在が突き止められていない黒曜石原産地である。今回、中ッ原・矢出川の細石刃石器群に統いて、柏垂の尖頭器において確認された意味は大きい。

なお、こうした柏垂の尖頭器石器群であるが、概年的には、相模台地のB3層上部と比較できようか。具体的には下鶴間長堀第II文化層（大和市教育委員会1984『一般国道246号厚木バイパス用地内遺跡発掘調査報告書』II）などに並行するものと考えられる。

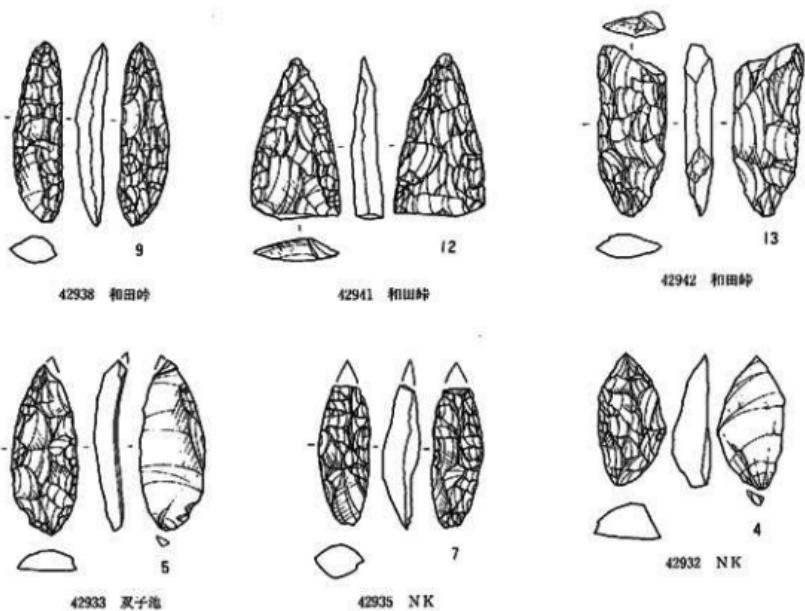
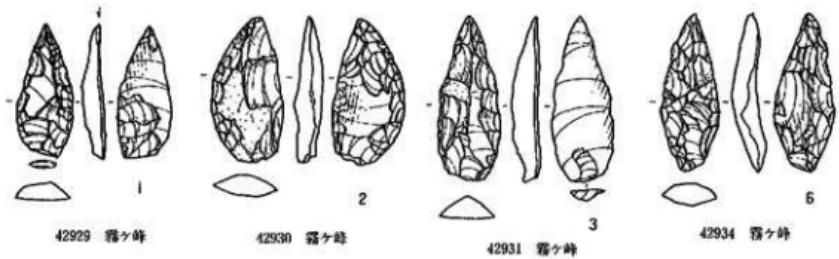
※本報告は、平成11年度長野県科学振興会より提携に交付された、助成金「信州産黒曜石の分布・利用に関する理化学的研究」の研究成果公開の一部である。



第1図 柏垂遺跡と黒曜石原産地



第2図 柏垂遺跡の立地 (1:50,000)



第3図 柏垂遺跡の尖頭器と原产地 (4/5)

柄原岩陰遺跡東北部 天狗岩岩陰の調査

藤森英二

1 柄原岩陰遺跡に存在する複数の岩陰

柄原岩陰遺跡についてはすでに多くの関連書物で紹介されている。しかし八ヶ岳起源の泥流が根木川により侵食されたこの遺跡が、実は複数の岩陰から構成されていることはあまり知られていないようである。北相木村教育委員会では今年10月4日から10月13日の10日間、この柄原岩陰遺跡東北部の岩陰部で試掘調査を行った。ここでは誌面をお借りしてこの調査の概要を紹介したいが、まずはこれまでの調査の経過を駆け足で見ながら、この位置を確認しておきたい。

柄原岩陰遺跡に調査のメスが入ったのは1965年で、ここから1978年にかけて信州大学医学部を中心とし15回に及ぶ発掘調査が行われ、遺跡西南部の岩陰について旧河床面に到達するまでの深度約5.6mの調査が終了している。遺物は縄文時代草創期から早期が中心で人骨を初め数々の優品がある。現在最も知られているのがこの一連の調査で発掘された岩陰部で、これを遺跡西南部「柄原岩陰」と仮称する。しかし1987年に指定された国史跡「柄原岩陰遺跡」には、これ以外に小さな岩陰が1つ、そして現在において最大のテラス部を有する遺跡東北部の岩陰が含まれている。

1983年にはこの最も岩陰部の雨垂れラインよりやや南に下った場所でトレンチを設定し、深さ約2.6m、23層に及ぶ層位の発掘を行っている。ここでもこれまでにない見解をもたらし、中世の内耳土器、縄文時代中期から早期の土器・石器の他、骨角器や獸骨、そしていくつかの石圓いが見つかっている。この調査はその後の遺跡東北部の岩陰調査の必要性を踏まえたものであったが、この東北部の岩陰部を地元の呼び名にならう「天狗岩岩陰」と呼ぶ。

この「天狗岩岩陰」は現在のテラス部が大きく二段に分かれ、「柄原岩陰」と比べると大井部は10m以上高い位置にある。

2 「天狗岩岩陰」の調査

今回遺跡の保存整備のため4つのトレンチを設定し、この岩陰部分がはたして遺物包含層を有しているのか

否かの確認を主な目的として調査を行った。そのため実際に掘った面積は微々たるものであるが、これまでにない多くの情報を得ることが出来た。以下設定した各トレンチごとに状況を記し、全体的な見解を示しておく。

1号トレンチ

現在最大のテラス部から約1.8m下がった二段目のテラス部に設定したトレンチ。上層部では内耳土器の底部が出土、それよりやや下部で弥生土器の底部が出土したが割れ口はかなり磨滅していた。またこれより下の地表面から約70cmの層では縄文時代中期中葉から前期後半の土器片が、さらに調査最下部（地表面から約100cm）では黒曜石製の石器が出土した。しかし落としてきたであろう巨大な岩（泥流）に阻まれ、調査出来的な面積はごくわずかなもので、これらの層が二次堆積であったかどうかは確定出来ていない。

2号トレンチ

雨垂れラインの外側で、川に向かった急斜面に設定したトレンチ。堆積している土はほぼ斜面の傾斜に沿っており、二次堆積だと思われた。しかし何時の時点での堆積かは慎重に考えたい。また遺物は豊富に出土し、このトレンチだけで獸骨約70点、土器2点、石器22点が出土している。これらの供給源は上部のテラス部であろうか？ トレンチ下部ではやはり多くの礫（泥流）が見られた。

3号トレンチ

雨垂れライン内側の平坦なテラス部であり、立地的には最も生活に適しているような場所である。現在も地元柄原地区のお祭りが行われる。地元の方の話では、この岩陰のテラス部分を掘ればすぐに岩にあたるということであった。確かにトレンチ設定の際にもピンボーリが刺さらない場所が多く苦労を強いられた。それでも西側角にトレンチを設定し調査を行ったところ、表面を覆っていた礫（崩落した泥流）とそれが砕けたであろう砂が川側に向かって大きく傾斜しながら堆積しているのが確認出来た。この層では寛永通宝が出土し、少なくとも江戸中期にも崩落があったことを思わせる。一方、より内側では地表面より約25cmのところで黒色の土が現れ土師器が出土し、さらに下では弥生中期から後期と思われる土器片と、条痕文の付いた弥生の土器片が獸骨と同じ層から出土した。地表面からは約130cmである。しかし特に斜面側に巨大な泥流が重なっており、これ以上の掘り下げは断念せざるを得なかった。

4号トレンチ

雨垂れラインから東にはずれ、さらに平坦ではない場所に設定した。やはり土中に崩落の泥流を含んでいるものの、しまりのない黒土が堆積しているのみで、遺物の出土はなかった。

3 展望と課題

以上のような状況から、遺跡東北部「天狗岩岩陰」では、生活面を含んだ遺物包含層の範囲は、ほぼ雨垂れラインの内側に限られそうであり、そのテラス部には少なくとも弥生時代までの包含層の存在が確認された。さらに周辺の出土品からは、これよりも下部に縄文時代の層の存在も予想され、今後の保存にかんしても重要な見解が得られた。

既に1983年の調査でも中世の内耳上器や縄文中期から前期の土器の出土は確認されていたものではあるが、これまで柄原岩陰遺跡と言えば、縄文時代草創期から早期がすぐに思い出されるような状況であった。しかし今回見つかった遺物からも縄文時代前期から中期、さらに弥生時代中期あるいは後期、そして古代、中世、近代と、いく世代の人々がこの岩陰を利用したことか明らかになった。

縄文時代について言えば、今回出土した時期の土器はいずれも村内の、つまり同じ柏木川流域の開地遺跡でも発見されている。このような場所と岩陰の利用の違いも今後の課題と言えよう。

くり返しになるが、これまで柄原岩陰遺跡では縄文時代に关心が集まり、それ以外の時期についてはあまり注意が払われなかったと言えるのではないか。しか

しこれからは積極的に縄文以降の遺物についても取り組まなければならない。『佐久考古通信』No.75には柄原岩陰遺跡より約1km下流に下った小海町大字小海字塙の平に位置する天狗岩洞穴遺跡の調査概報が掲載されているが、ここでも弥生後期の包含層が確認され、今後の研究の課題が述べられている。また古代、中世、近世に関しても、岩陰という環境の利用目的を考え、この地域の歴史を解き明かすべきであろう。

柄原岩陰遺跡を含んだ相木川沿いの「岩陰群」の調査研究はまだ始まったばかりである。今後考古学のみならず地質学、人類学、民俗学、動物・植物学などによる総合的な調査研究が望まれる。



写真3 1号トレンチ調査状況



写真1 県道側から見た「天狗岩岩陰」全景
横んである土のうが2号トレンチ



写真4 3号トレンチ完掘状況。写真右が黒土の堆積部



写真2 「天狗岩岩陰」上部テラス部。写真下が3号トレンチ。

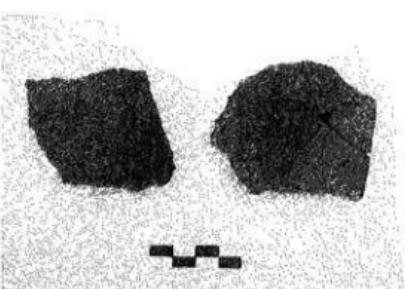
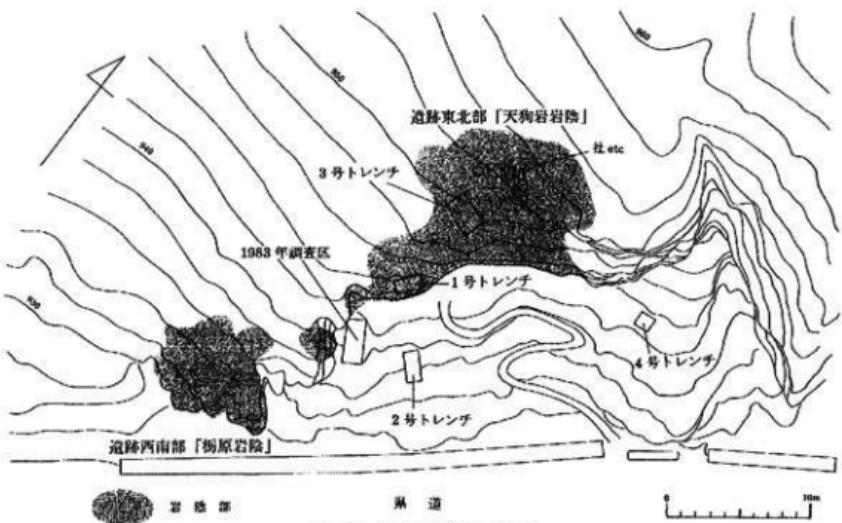
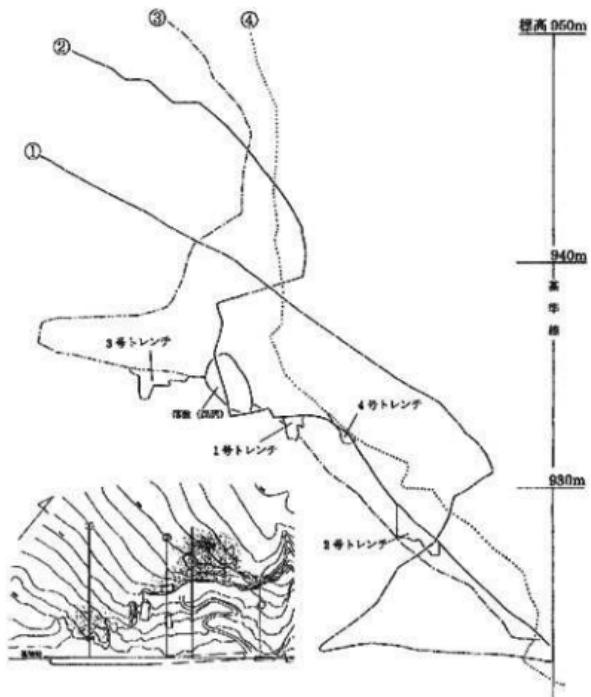


写真5 3号トレンチ出土の弥生土器



第1図 桥原岩陰遺跡平面図



第2図 桥原岩陰遺跡断面図

会員訪問

木内 捷さん



木内捷さんは、本年3月で佐久市役所を退職されました。今日の佐久市は、佐久インター周辺や、佐久平駅周辺の目覚しい発展ぶりに目をみはるばかりですが、そうした発展の礎が、総務部長の重責にあって佐久市を導いてきた木内さんなどのお力によって形作られたるものとおもいます。

また、佐久考古学会の形成期に、事務局長としての采配を振るわれ、発展にご尽力いただいたのが木内さんです。一方では、佐久市教育委員会社会教育課や佐久埋蔵文化財調査センターにおいて、佐久市の埋蔵文化財行政を整備してきたという大きなお仕事もあります。

今回はそんな木内さんをおたずねし、これまでのいろいろなお話を聞きしました。

*

一木内さんが、発掘調査とかかわられたのはいつからですか。

木内 昭和46年(1971)の佐久市新子田の戸板遺跡での発掘調査が最初でした。当時佐久市教育委員会社会教育課おりました。

同じ年には、岩村田の東一本柳古墳が発掘され、金銅製の杏葉などが出土し注目を浴びました。その年は、佐久市で長野県考古学会の大会が開催され、樋口昇一さんや武藤雄六さんが足を運んでくださいました。

一当時印象深い発掘はどんな遺跡でしょう。

木内 やっぱり、岩村田小学校の南で、国道141号のバイパス工事によって調査した上の城遺跡ですかね。それまでの発掘といえば、遺跡のごく一部を掘って終りだったんですが、この遺跡は全面の調査を計画した。当時県の担当だった朝原健さんなどが何度も当局と折衝してくれたりして、ようやく予算を確保し、発掘にこぎつけたことをおぼえています。

木内 その頃の発掘といえば、今のようなアルバイト的な仕事とは性格がちがって、年配の方たちがまさに手弁当で発掘調査を指揮してくれました。武藤金さんなどはその中心人物です。また、今は中堅となっている白田武正君や林幸彦君、高村君なども、当時は若々

しい大学生でした。

一昭和48年には下前田原古墳群などの調査も行われていますね。

木内ええ、西屋敷にあるこの古墳では、土屋長久さんなども調査を本気になって進めてくれました。当時の調査は珍しかったので、故依田佐久市長も長靴履きで見学されたのが印象的でした。

その頃、中道遺跡の奈良三彩など、各遺跡からの出土品を集めて、太鼓棧(旧中込小学校)で展示会などもおこない、大勢の方に見ていただきました。

一昭和49年の市道遺跡の調査は、考古学史に残るお仕事でしたね。地方で市道のような問題意識の報告書が出版されるケースはあまりないのではないでしょうか。

木内 市道のときは、藤澤平治先生に調査の指揮をお願いしましたが、藤澤先生の母校岡山大学や明治の大学生などが多く手伝いに来てくれました。大橋広行君や川島雅人君、前原豊君、林君、花岡弘君や村山好文君など大勢の学生ががんばりました。

学生の収集のめんどうをみたり、洞源湖の風呂につれていったり、飯を食わせたり、酒を飲ませたりといろいろ大変でした。でも楽しい時代でしたし、すばらしい報告書ができましたね。

一その後いったん教育委員会部局を離れられ、昭和60年にはふたたび埋蔵文化財に戻されましたね。

木内ええ、その頃佐久市では大型開発が増加し、それに対応するために佐久埋蔵文化財調査センターが設立されることになりました。その立ち上げのために、力をつくすことになりました。

今までに佐久市内では、総計336件の遺跡発掘調査がなされているということです。ほんとうに歩いてきた道のりの長さを感じずにはおれません。

*

現在、佐久市社会福祉協議会会長としての要職を勤められる木内さん。将来の福祉社会の方向付けとともに考古学会への変わらぬお力添えをお願いいたします。



佐久埋蔵文化財調査センター発足当時

(昭和60年、西裏・竹田峯遺跡)

土偶のつやき



—会員の身近なたより —

内堀 まどか

8年ぶりに佐久に帰ってみて、その変貌にただ驚くばかり。興味の対象は、弥生時代から古墳時代への社会変革の時期です。

当時の人々は時代の波にさらされ、どんな思いだったことか。私の場合、道を覚えるのが大変です。

どうぞこれから宜しくお願ひいたします。

■ 丹後の国との接触

小山岳夫

先口『信濃』10月号にて、「弥生時代の円形周溝墓」と題する拙文を書きました。内容は、方形周溝墓が卓越する東日本の弥生時代で特異な存在感を示す長野県千曲川流域の円形周溝墓に焦点を当てたものでした。

全国視野で弥生時代の円形周溝墓あるいは円形の墳丘を有する墓の初回、分布域を概観した後、信濃に円形周溝墓が発生するにいたった契機を推論しましたが、ただいまいへん多忙な状態にあり、事実関係の確認が不十分なまま筆を執るはめになってしまいました。したがって、できあがった原稿は不出来なもので反響があるなどとは全く思っていませんでした。

ところがつい先日家へ帰ると京都府綾部市から書籍

小包が届いていました。今まで全く接触のなかった地域からのお便りです。また、心当たりのない郵便物を開くのは少しドキドキします。開けると『新庄遺跡』という発掘報告書とともに、「弥生時代の円形周溝墓」掲載しました。当地でも数年前に円形周溝墓の調査があり、一定程度まとめたことがあります。ご利用ください。三好博喜」という手紙が同封されていました。

今回、忙しい中、苦し紛れに書いた原稿は自分自身でも得心の行かないものでしたが、この手紙を見て少し心が晴れました。なぜなら、今回の原稿を通じて今まで全く知らない丹後の人の人と知り合いになるきっかけがつかめたからです。私は今、考古学のために製ける時間が非常に少ない状況にあります。しかし、困難な状況でも時間を見つけ少しづつでも研究を積み重ね、全国に知り合いを増やせたらと思っています。

出澤 ひでさわ 力 つとむ

みなさま、はじめまして。私、性は出澤、名は力、別に「フーテン」という訛ではありませんが、この度、大学を卒業し、4年ぶりに故郷の土を踏んだものでございます。

佐久考古学会で最も体重の重い男ですので、見かけたら「ああ、あいつか」とわかっていていただけるものと思います。

卒論では、15~16世紀の中世の陶磁器や擂鉢・内耳などの関東での分布を取り上げました。

また、佐久に来てからは、深淵遺跡などの調査に携わり、野沢の三原宮遺跡で古墳から平安までの集落を調査しました。そんなことから今、須恵器などにも興味をもっています。

まだまだ、くちばしの黄色いヒヨコではございませんが、お仲間に加えさせていただければ、望外のことあります。黒いなどで姿を見かけたら、声をかけてやってください。

♪ 編集後記 ♪

現在、人類発祥の地という個人的な関心もあって、アフリカ・タンザニアの子供のフォスター・ペアレンツとして、交流を続けている。手紙の中に、日本の綺麗な千代紙などを入れてあげると、とても喜ばれる。

さきの正月、親戚の子供にお年玉をあげたら、あまり嬉しがらない。相場以下の金額だというのだ。

タンザニアでは、マラリアが原因で幼い命を落としている子供たちも多い。ワクチンが買えないのも理由のひとつだ。昨年、私と交流のあったオリバーちゃんが、五歳の命の灯を落とした。無念でならない。

2000年という新世纪は子供達が幸せであってほしい。

佐久考古通信 №77

発行所 佐久考古学会

〒385-0056 長野県佐久市桜井632-10
林 幸彦 方
郵便振替 00570-9-2842
☎0267 (63) 1963

発行者 藤沢 平治

編集者 堀 隆

印刷所 ほおづき書籍舎



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 6 上野原遺跡	1
「仁和の洪水」は「八ヶ岳の大崩落」によっておきたのか? 一大月川岩屑なだれ年代特定の意義	2
千曲川の洪水に埋もれた村と耕地	4
縄文時代のオムギ栽培	5
NHK ETV やってみようなんでも実験	9
佐久市前藤部遺跡出土の軽石製板碑	10
奇報 麻生優先生ご逝去	12

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 6

上野原遺跡

—鹿児島県—

上野原遺跡は、錦江湾に臨む国分市の高台にあり、遠く桜島も見える。この遺跡は、縄文早期前業（9500年前）という全国に先駆けた定住集落として著名である。早期前業段階の定住は、温帯林に育まれた南九州という土地柄だからこそ実現した。おそらく同時期の長野にあっては、いまだ遊動生活がなされていた頃であろう。

遺跡は、上野原テクノパーク建設に伴って調査された。第4工事区で検出された住居は46軒、現在はその一部が史跡公園として整備され、住居が復元されている（写真1）。



写真1 復元された上野原のムラ

上野原遺跡では、焼製用の施設とみられる連結土坑と呼ばれる土坑も検出された（写真2）。この他、兼石造構などもみられる。

上野原の第三工区の出土品である土器・土製品・石器類767点は、平成10年国重要文化財としての指定を受けた。その中でも、出土した壺型土器は、弥生時代の壺と見間違えるばかりのものである。これがアカホヤ火山灰（6300年前）の下から出土し、まぎれもなく今から7500年前の縄文早期後業のものであることは、多くの考古学研究者を驚かせた。

出土した早期後業の土偶も、顔・手・乳房を表現したシンプルなもので、九州最古とみられている。また、石器では、石鍛・打製石斧などのほかに、石皿・磨石類が出土し、豊かな温帯林からとれる堅果などを加工したものと考えられる。

このほか、耳飾りや垂飾、土製円盤、用途が不明のパレット状の土製品も出土している。

遺跡にはボランティアガイドが常駐しており、親切な解説を受けることができる。

南九州の縄文文化に触れる旅もよいだろう。



写真2 連穴土坑（焼製用？）

「仁和の洪水」は「八ヶ岳の大崩落」によっておきたのか?

—大月川岩屑なだれ年代特定の意義—

川崎 保

1はじめに

筆者をはじめ善光寺平の古代遺跡を発掘したものにとって平安時代前半に広範囲に厚く広がる砂層は、これが漠然と「仁和の洪水」に比定されることもある、興味深い研究対象である。

佐久においても浅科村砂原遺跡や佐久市跡部櫛田（あとべまだ）遺跡などの砂層は平安時代の前半であることが、考古学的な遺物から推測され、これが文献でいうところの「仁和の洪水」に対応するとすれば、非常に都合がよい。

「仁和の洪水」が「八ヶ岳の大崩落」によって起因したという元信州大学教授の河内晋平先生の説（河内1983・94・95）があるが、考古学的には今まで賛否両半ばしてきた（菊池1985・島田1988）。

特に年代を決定する方法については土器編年などの考古学的方法論のみでは、ある年を特定することは非常に難しい。また紀年木簡などの資料が出土したとしても、その出土層位や遭構の所属年代をある年に特定するのは、その遺物が廢棄された過程などを考えなければならず、なかなか難しい（川崎1997）。

また、炭素14年代などの理化学的な方法も現在かなり研究が進み、精度が上がっているが、やはりまだ特定の年を限定するのは非常に困難である。

とはいいうものの文献でいうところの「仁和の洪水」の年代と「善光寺平や佐久平に存在する砂層」「大月川岩屑なだれ」の年代が一致するかどうかが、大きなポイントになると思われる。

2「仁和の洪水」と「平安時代前期砂層」「大月川岩屑なだれ」の年代

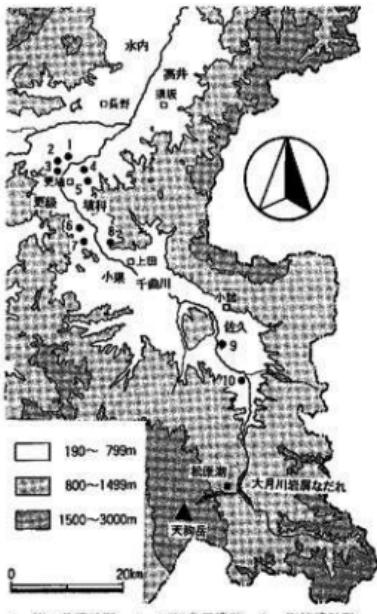
まず、「仁和の洪水」に関する文献による年代は以下の文獻によると

『類聚三才略』卷十七 故除事

重今月八日信濃國山頸河溢。唐突六郡。（中略）仁和四年五月廿八日

『日本紀略』前篇二十 宇多

（仁和四年）五月八日。信濃國大水。山頸河溢。



第1図 平安時代前期洪水砂土遺跡

『扶桑略記』

仁和三年、七月卅日辛丑（中略）、同日大振、官舍多損、海潮漱陸、溺死者不可勝計、其中折津国尤甚、信乃国、大山縣崩、巨河溢流、六郡城塹被地漂流、牛馬男女流死成丘。

文献では仁和3年（887）ないし同4年（888）となる。

これに対し、善光寺平や佐久平の平安時代前期洪水砂に覆われた遺跡や遭構（第1図）から出土した土器などの相対年代は、例えば更地市屢代遺跡群では光ヶ丘1号窯式や篠岡4号窯式が伴っている。前者は平安京民部省跡の「元慶」（877～885）の墨書き模様と共に伴し、後者は貞觀15年（873）銘告知知札木簡、寛平大寶（890初飾）と共に伴している例があることから、これらの窯式は9世紀後4四半期と想定されるという（鳥羽1999）。他の遺跡でもおおよそ9世紀後半から10世紀にかかるような年代が得られている（川崎2000）。

次に大月川岩屑なだれの年代は、河内晋平により炭素14年代が測定され、 950 ± 90 Y.B.P. (1000A.D.) (Gak-9458) という年代が得られていた（河内1983）。炭素14年代としては、887年ないし888年を含んでおり、調和的な結果が得られている。



第2図 写真左上、第3図 写真右上 大月川岩層なだれ中の埋れ木のサンプリング（小海町）



第4図 887年を鑑定したヒノキ材と河内先生(左)、光谷先生(右)

3 年輪年代学

私をはじめ平安時代前期の砂層がある遺跡を調査した人間にとっては、砂層が善光寺平をはじめ千曲川流域を点々と埋める災害規模の大きさにまず驚かされるとともに、さらに、砂層にバックされた形で、土器などの良好な一括資料が多く得られていて、この砂層の年代が決定されれば、これらの土器資料が土器編年基準資料として大いに活用できること、また、土器などの遺物が共伴しなくとも、この砂層がちょうど旧石器時代のATや縄文時代のアカホヤ火山灰と同様に、年代の鍵層になりうると思われる。

しかし、前述のように考古学的な方法や従来の理化学的な方法からでは、文献資料に対比させた形で年代を特定することは極めて難しいので、年代論から追求することは断念し、水田面の状況から、洪水の季節などを推定し、仁和の洪水の記述と如何に整合するかという研究が進められていた（臼居1997・市川1992・宇賀神1998・河西1999）。

ところが、たまたま筆者が奈良国立文化財研究所の年代測定法に関する研修に1997年に参加する機会を得て、同埋蔵文化財センターの光谷哲史先生の年輪年代学の講義を受けることができた。

実は、以前にも年輪年代学の光谷先生の講義は同研

究所で受けたことがあったのだが、ちょうど火山灰降下年代特定などにも年輪年代学が大いに活用され、とくに人為的な変形を受けにくく、試料を得やすい自然災害にも年輪年代学は非常に有効であることが実感された。

それまで、遺跡出土の試料を測定することばかりにとらわれていたわけだが、長野県の広域の自然災害といえば、火山灰の降下ではないが、河内先生の「八ヶ岳の水蒸気爆発と仁和の洪水」に関する研究を、さらに先生の論文（河内1994）にヒノキの写真が載っていたことを思い出した。早速長野県に戻ってから、これらの事実を確認し、河内先生に連絡をとったところ、小海町の現地を案内していただけるとのことで、光谷先生にも奈良から来ていただき、他にも県埋蔵文化財センター有志や御代田町教育委員会の堤隆氏と大月川岩層なだれの年代を測定できるようなヒノキなどの埋もれ木を1998年5月16日・17日に探し、試料採集を行った（写真2・3）。

この日採集したヒノキなどからは残念ながら、年代を測定することはできなかったが、後日、河内・光谷両先生が採取された試料から887年の秋頃であることが判明した（写真4）。

4まとめにかえて

以上、まだこれから試料の分析結果などに関しては、河内・光谷両先生から論文が発表されることになっている。分析結果の詳細が待たれる所ではあるが、新聞などすでに結果の一部が報道されているので、そのいきさつなどについて、佐久考古通信の紙面を借りて会員の諸氏に報告した次第である。

また以下の諸氏からは、多大なるご教示・ご指導があった。大月川岩層なだれの現地を案内してくださった河内晋平先生、年輪年代を測定してくださった光谷拓実先生、試料採取当日にご指導頂いた井出正義先生、原稿執筆をすすめてくださった堤隆氏にはとくに感謝を表する。

市川桂子、市川隆之、宇賀神誠司、河西克造、桜井秀雄、寺内隆夫、鳥羽英樹、中村寛、深沢敦仁、福島正樹、宮島義和、柳沢亮

註

- 1) 1999年12月23日朝日新聞長野版、12月28日中日新聞 単7版ほか

なお、報告書などの文献は省略したので、興味のある方は(川崎1997-2000)を参照されたい。

千曲川の洪水に埋もれた村と耕地 —砂原—

堤 隆

1992年、私達は千曲川を眼下に臨む浅科村砂原遺跡の発掘調査を実施した(堤隆編1993『砂原遺跡』浅科村教育委員会)。遺跡を覆う1m近い厚さの砂層の下からは、古墳時代初頭から奈良・平安時代にかけての集落と、平安時代以降に耕作された畑の歴が検出された(右写真)。

住居は古いものから古墳時代前期(4世紀前半)1軒、古墳時代後期(7世紀後半)2軒、奈良・平安時代1軒がみられた。畑はそれらの住居確認面の最上層に作られていた。

砂層は、畑の歴をバックするかたちで覆っており、その状況からは、千曲川の大氾濫が耕地を直撃した様子がみてとれた。歴のプランクトオバール分析からは、イネの植物珪酸体が検出され、この耕地ではいわゆる陸稻がなされていたことが推定された。

この耕地を文字通り砂原と化した洪水はいったい何時のものだったのだろうか。可能性としては、江戸時代寛保2年(1742)の大洪水「戊の溝水」か、平安時代仁和4年(888)の水害のいずれかが考えられた。ただ、仁和の水害をめぐっては、川崎論文にもあるように、信濃間にあっても、その発生理由や場所に議論があることは確かである。残念ながら、住居とは異なり、

主要参考文献

- 川崎 保 1997 「長野県の遺跡における年代決定法について—樹齢年代と理化学的年代測定法などの対比と用い方—」『長野県考古学会誌』83
- 川崎 保 2000 「いわゆる「仁和の洪水」砂層の比定に向けて—大月川岩層なだれ年代特定の考古学的意義—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8
- 河内晋平 1983 「八ヶ岳大月川岩層の14C年代」『地質学雑誌』89-10
- 河内晋平 1994 「松原湖(群)をつくった888年の八ヶ岳大崩壊—八ヶ岳の地質見学案内・2-1」『信州大学教育学部紀要』83
- 河内晋平 1995 「松原湖(群)をつくった888年の八ヶ岳大崩壊—八ヶ岳の地質見学案内・2-2」『信州大学教育学部紀要』84
- 菊池清人 1985 「仁和4年の八ヶ岳の大崩落」『信濃』37-7
- 島田恵子 1988 「八ヶ岳崩壊の仁和四年説に関する考察—考古学的調査を中心として—」『千曲』56



畑の歴の直接的な年代は決定しにくく、どちらに対応する洪水などの結論は、結局保留された。

砂原の洪水砂は、仁和の水害によるものなのだろうか。河内・光谷先生らの年代推定結果と、千曲川流域遺跡の災害年代の整合性の検討が最重要課題である。



近年、縄文時代における栽培植物の問題が論じられることが多い。例えばコメについては古くから熊本県ワクド石遺跡の晩期前半黒川式の穀痕土器は知られていたが、岡山県総社市南溝手遺跡では縄文時代後期後半福田K III式土器に穀状圧痕が確認され(平井1995)、また高橋謙は岡山県美作村総合原遺跡出土の中期中葉に船元式土器を胎土分析した結果、イネ科植物の存在を示すイネ科植物の細胞壁酸体(プラントオバール)が検出されたという(高橋 1997)。更に最近では岡山県朝翠貝塚の縄文前期の地層からもイネ科植物の細胞壁酸体が検出されたとされる。賀川光夫らによる西日本縄文後晚期農耕論においてその根拠の一つには熊本県熊本市上の原遺跡など九州島縄文後晚期の遺跡から出土した炭化米が挙げられていたが、今日の研究状況はそれを更に進るものとなっている。

ただし栽培植物に関する時期比定は難しいし、各種分析法による研究も乗り越えるべき課題は多いようだ。例えば青森県風張遺跡で縄文時代後期住居址の覆土から出土した炭化米をC14年代で測定した結果2540±240B.P., 2810±270B.P.の年代が得られている(A. C. D'Andrea他 1996)が、これは一般に晩期後半頃のC14年代値であり、晩期後半の炭化米が後期住居に混入したとする可能性が高い。植物種子等はその小ささ故に混入の可能性も時期決定において考慮する必要があるといえる。

またコメの存在を示す「穀状圧痕」についても専門家の鑑定を受けた例は意外に少なく、丑野毅と筆者が数年前に中部高地、関東地方の代表的な縄文時代晩期末～弥生時代前期土器の「穀状圧痕」を丑野が開発し

たレプリカ法で観察したところ、イネ科の圧痕と鑑定されたのは長野県飯田市右行遺跡の五貫森式系浅溝の穀痕のみであり、他の大町市一津遺跡、茅野市御社宮司遺跡、山梨県韭崎市中道遺跡例はイネ科以外による圧痕との結果がでた(中沢・丑野 1998)。縄文式土器の「穀状圧痕」とされるものに対し、その厳密な鑑定の必要性を痛感した次第である。

更に前述の土器胎土等の植物珪酸体分析については科学分析法に疎い筆者がこのようなことを述べる資格はないが、例えば分析対象の土器が埋没から発掘されるまでの過程で、遺物包含層の上面に水田が當まれていた場合など後世の影響がどの程度あるのか筆者には判断がつかない。よってそのデータの扱いには慎重な態度とまた今後のデータの蓄積を待ちたいと考えている。

基本的には筆者自身は縄文時代の植物栽培をある程度認めるが、堅果類を基礎とし、多種多様な食糧資源を利用する生業のはんの一要素と考える立場をとっている。ただ栽培植物の存在をある程度認めるためにはまずその基礎資料集成、検討を行う必要があろう。

縄文時代の栽培植物種子を取り沙汰される折、意外に目立つのがオオムギのデータである。本稿は縄文時代の栽培植物種子の一つであるオオムギについてデータの集成、検討を行うことを目的とする。以下にそのオオムギ出土遺跡の概要を時期ごとに述べる。

[中期]

岐阜県高山市ツルネ遺跡

ツルネ遺跡は高山盆地東部、後背の丘陵頂部平坦面から約40m低い舌状台地に位置する。江名子川沿いの平坦地からは約30m上位にある。海拔630mである。調査では縄文時代中期の住居址3棟、ピット群、弥生時代後期の方形周溝墓1基、古墳時代前期の住居址1棟が検出された。内、第2号住居では縄文時代中期中葉井戸尻II式、瀬戸内の船元II式、北陸の上山田・天神山式が出土した。第2号住居は古墳時代前期の第3号住居址、縄文時代中期の船元III式を出土した第4号住居址と切り合い関係にある。

第2号住居址から出土した植物種子は粉川昭平によると多数のクリ、オニグルミ、ナラ属の他、オオムギと思われる炭化物が1点あるという。またピット群からは多数のナラ属の他、栽培種のマメ科の種子が2点出土している。(高山市教育委員会編 1978)

埼玉県岩槻市上野遺跡

上野遺跡は岩槻台地の南西縁にあって、元荒川を南に臨む地点にある。標高約13mである。調査では縄文時代中期後半加曾利E 1式を中心とする住居址21棟、土坑32基、古墳時代の住居址13棟が検出された。粉川

昭平によると第25号住居址ではオニグルミ、ナラ属などに伴いオオムギとみえる炭化物が4点、第26号住居址ではオオムギ17点、イネ? (炭化穀の不完全なもの1点、炭化穀の基部1点) がナラ属とともに、また第10号土坑ではモモの核が出土したという。

青森県青森市三内丸山遺跡

今更いうまでもない三内丸山遺跡であるが、遺跡の北の谷からムギの種子らしきものが出土しているといふ。

長野県富士見町唐波宮遺跡

唐波宮遺跡は八ヶ岳南麓、猪沢川の右岸に沿う台地の側と平坦な部分に立地する。標高は910m前後である。調査では縄文時代前期4棟、中期初頭1棟、中期後半25棟、平安時代1棟の住居址が検出された。曾利V式の土器溜まりがあり、その上手に接した焼土址の下面から250粒ほどのコムギ、オオムギらしき炭化種子が出土したといふ。報告では土器溜まりからも2~3粒検出されていることから曾利V式期の例と結論付けている。(小林他 1988)

(後期)

福岡県福岡市四箇遺跡

四箇遺跡は室見川中流東岸に広がる高位扇状地上に立地し、標高22m前後の現水田面下の低湿地性遺跡であり、3つの低い微高地が認められる。A~F地点に区分されるが、同一遺跡とされている。微高地上には縄文時代後期後半の西平式、三万田式の住居址、土器棺、柱穴列等を主とし、縄文時代前期墓式、曾煙式、弥生時代前期末~中期、古墳時代初頭の造構も検出された。

A地点では三ヶ月潮状の凹地に形成された後期後半西平式、三万田式の特殊泥炭層では土器、石器、木器、漆器など多量な人工遺物、動物遺存体、植物遺存体が出土した。この後期後半の特殊泥炭層の土壤サンプル及び発掘調査中に水洗選別したサンプルを種子同定した笠原安夫によると、土壤サンプルでは76種1798粒の種実が検出、うち食用かつ栽培利用可能なヤマグワ425粒、カジノキ130粒、6種の野生イチゴ類218粒、木本ニワトコ275粒、纖維のとれるコアカソ131粒、スケ類、カラスザンショウ、イヌホウズキ、カタバミ、タデ類、カナムグラ、ノブドウ類、ズメウリが20粒以上であったが、発掘調査における水洗選別の試料では45種を同定の内オオムギの炭化粒1点、ヒエの穀、センナリヒヨウタンの外皮、アズキ粒が確認された。笠原はこれら栽培種の他、他の各種燃焼雑草種子の検出も考慮し、縄文時代後期の燃焼栽培をも推定している。またこの後期後半特殊泥炭層の上層の砂礫層では炭化穀殻が1点、他ザクロウ、カタバミ、カヤツリグサな

ど燃焼雑草が確認され、陣福の燃焼栽培が示唆されたとしている。ただし報告書では砂礫層出土の晩期の土器が確認できない。(二宮・笠原他 1987)

京都府舞鶴市桑飼下遺跡

桑飼下遺跡は丹後山地から若狭湾へ注ぐ山良川の河口から約13km上流、由良川の右岸に沿って東西に長くのびる自然堤防上に遺跡は立地する。標高は8mである。1972年の調査により縄文時代後期中葉「桑飼下式」(北白川上層式3期)を主とした集落址、炉址、などまた弥生時代、古墳時代等の遺物、造構が検出され、「桑飼下式」を中心とした住居址、48基の炉址群の北側、河川への傾斜面では5×6mの「特殊粘土層」とされた低湿地の遺物包含層が検出され、その時期の多量な人工遺物、動植物遺存体が出土した。

西田正規によると「特殊粘土層」全ての土を水洗選別した結果、80種類の種子が確認され、採集された種子の内多かったものはカジノキ、アカメガシワ、カラスザンショウ、ドングリ、トチ、クルミであった。そして栽培種では2種のマメ(アズキ40粒、大豆大のマメ14粒)、オオムギ2粒、コメ1粒、他穀殻が確認されたといふ。ただし西田はこの「特殊粘土層」がその露出から発掘までの間に風雨にさらされ、また水没したことがある点、第1次の水洗選別を由良川の水で行った点、また発掘者やその道具からも後代の種子が混入する可能性も検討し、慎重な態度をとっている。

なお渡辺誠は出土した大量な打製石斧から根茎類の積極的な採集、「特殊粘土層」から出土した多量のトチ、ドングリ、クリ、シイなどの堅果類から植物採集活動への傾斜、またそれらを遺跡付近へ移植、管理栽培した可能性の高さを指摘し、小型哺乳類や鳥類の狩獵や河川漁も含め、その経済基盤を「桑飼下型経済類型」と提唱した。(渡辺・西田 1975)

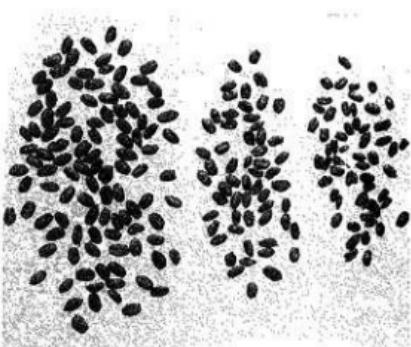


写真1 唐波宮遺跡出土の炭化麦粒(小林他 1988)より

長崎県野母崎町脇岬遺跡

脇岬遺跡は長崎市郊外の野母半島西側、脇岬に所在し、発達した砂丘から背後の低湿地・帶が範囲となる。標高は3~8mである。1965年の予備調査以来、5次にわたる調査が別府大学、長崎大学、長崎県教育委員会により行われた。別府大学、長崎大学による調査では貝層に接近した後期中葉縫合式期とされるIII層C下で炭化殻粒1点が検出され、松本家により長さ4.66mm、幅2.21mm、厚さ2.62mmのオオムギと鑑定された。

賀川光夫は積極的にこのオオムギを評価して、山地脚部を利用した陸作の可能性を指摘している。(賀川 1985)

〔晩期〕

熊本県熊本市上ノ原遺跡

上ノ原遺跡は健軍台地に食い込んだ浸食谷と庄口川の上流部の東側台地上に位置する。標高は約25mである。1969年に遺跡一帯で区画整備が実施され、遺跡の存在が知られ、1970年以降数次にわたり調査が行われた。調査では縄文時代早期、中期、後期、晚期の遺物と遺構が検出されたが、主体は後期後半の御領式から晚期前半「上ノ原式」となる。1971年の調査において晚期前半の住居址床面から炭化したオオムギ1粒とコメ2粒が検出された。オオムギは長さ3.8mm、幅2.0mmである。(小谷 1972)

佐賀県唐津市菜畠遺跡

菜畠遺跡は標高162mの衣干山より延びた低丘陵の先端部南斜面及び裾部に位置する。標高2.2m~5.1mである。縄文晚期後半夜臼I式(山の寺式)期の水田址、畦、水路を検出した遺跡として余りに著名である。縄文時代前期~中期、晩期から弥生時代中期、奈良時代の遺構が層序ごとに検出された。縄文時代晚期後半夜臼I式(山の寺式)の面では北側の丘陵部が集落域、南側の低地が水田域、その中間が遺物包含層となる。中村純による花粉分析では夜臼式単純層とされる第8層下層からオオムギ属の花粉が検出されたという。(中島・田島他 1982)

新潟県巻町御井戸遺跡

御井戸遺跡は角田山の東南麓でも最も低地部、台地縁辺部から台地下の低湿地にかけて存在する。標高は12mから10mである。1991年、1994年に低湿地の調査が行われた。1991年の調査区はI層が近世以降、II層が中世、III層が弥生時代前期~縄文時代晚期後葉、IV-V層が晩期後葉、VI層が前期と大別でき、未分解有機物含有砂疊層のIV層では砂疊層と植物遺体層が互層をなし、植物遺体層からはトナの実9000個体余り、ドングリ類1500個体余り、オニグルミ、クリなど多量な植物種子が出土したが、栽培種では穀殼が295粒、オオム

ギが1粒検出された。植物珪酸体分析でもIII層下部とIV層上部からオオムギ属のそれが検出されている。(前山 1996)

以上、筆者が確認した縄文時代のオオムギの痕跡を示す遺跡の例である。内、新潟県御井戸遺跡第IV層は西日本での弥生時代前期前半に併行する部分ももつ。

さてこれらオオムギが実際に縄文時代のそれら遺構や層位のものなのか否かという混入の問題がある。ツルネ遺跡例などは古墳住居に切られた住居址から出土しており、混入の可能性は常に考慮せねばならないし、唐波宮遺跡例は焼土址の時期が筆者には判断できない。ただ10近くの遺跡で確認されるとなると縄文時代のオオムギもその全てを否定はできないであろう。

勿論、日本列島に野性のオオムギが存在していたとは思えない。何らかの形で栽培種が大陸からもたらされたとするのが一般的である。そこで環日本海地域で最古とされたオオムギを概観するとしよう。朝鮮半島では韓國京機道欣岩里遺跡12号住居で2つの土器から炭化米78粒、別の土器からオオムギ1粒、また別の土器からモロコシ1粒、また他の位置でアワ1粒が出土している。欣岩里遺跡12号住居は無文時中期の孔列文土器がまとまる。12号住居址の木炭のC14年代測定値は 3210 ± 70 BP、 2620 ± 100 BP(同じ木炭を別の機関で測定した場合 2920 ± 70 BP、 2980 ± 70 BP)の値が得られている。また從来の日韓編年対比研究によれば孔列文土器は晩期初頭以降、黒川式以前の幅で収まるようだ。

ロシア沿海州ではマラヤ・パドウシェチカ遺跡でヤンコフスキイ文化期の層中の灰にあった土器からオオムギが出土し、シエニ・スカルイ遺跡でも炉付近の床上でオオムギが出土したという。ヤンコフスキイ文化は紀元前7~6世紀と推定されており、縄文式土器のC14年代法によるデータを単純に当てはめれば、縄文時代後期後半から晩期の間に相当する頃か。

中国では栽培稻作について、揚子江中流域の彭頭山遺跡では新石器時代早期、C14年代法で 9100 ± 120 BP、 8200 ± 120 BPなどの炭化米が出土し、それらが栽培種の可能性が高いとされる。しかしオオムギの出現がどうも判然としない。特に環日本海地域の中国東北部での考古資料としてのオオムギが知られていない。ただし、中国東北部、華北北部では野性のオオムギが分布しているとのことである。

日本列島縄文時代のオオムギを全て報告の時期のものと仮定し、環日本海地域のそれと安易な年代対比をすると、欣岩里遺跡の無文土器中期の孔列文土器、ロシアのヤンコフスキイ文化とともに縄文時代後期前半までを遡りそうにない。とすればツルネ遺跡、上野遺跡、唐波宮遺跡、三内丸山遺跡の縄文時代中期のオオムギ

例は環日本海でも大陸側の現状最古例より年代が古くなってしまう。これは大陸側の今後の資料蓄積を持つべきか、縄文時代中期とされるオオムギの帰属時期が再検討されるべきなのかという問題であろうか。筆者自身は縄文時代中期のオオムギについて判断できないのが本音であるが、三内丸山遺跡の分析結果により今後の見通しを検討したいと考えている。

さて縄文時代中期のオオムギを出土する遺跡が中部を中心にそれ以東に分布があるのに対し、縄文時代後期以降は西日本に遺跡が多いようだ。かつ興味深いのはそれら遺跡ではコメも出土する場合が多い点だ。立地の面ではそれら遺跡は低湿地もあるが、半数以上は台地や丘陵地上にある。陸稟と複合する畑作の可能性を決して否定できないのが現状か。西日本縄文時代後晩期での農耕論は賀川光夫を中心進められたが、最近の研究でも栽培を認める立場は多いようだ。西日本の後晩期のオオムギやコメは地理的にも朝鮮半島から渡来したと考えるのが妥当であろうが、前述のとおり無文土器中期が縄文時代後期までは遡る可能性が少ない点は検討課題といえる。これについては今後の朝鮮半島での資料蓄積待ちたい。

時期的には全く問題がないのは御井戸遺跡例である。IV層からオオムギとともに出土した上野原式～鳥屋2a式は西日本で突帯文土器型式一弥生時代前期前半に併行する。この時期西日本では本格的に水稟耕作の痕跡が考古学的に確認でき、水田址、木製農具、石臼などの大陸系磨石器がでそろう。畑作としてのオオムギもこの時期ならば問題はなからう。ただし畑地の考古学的検出は難しい。御井戸遺跡例の問題は西日本との距離となろうが、長野県松本市石行遺跡で大陸系有柄式磨石器が出土し、福岡県鶴居遺跡や大分県植田市遺跡で大洞C2式後半もしくはA式が出土する今日では、その距離も問題なかろう。

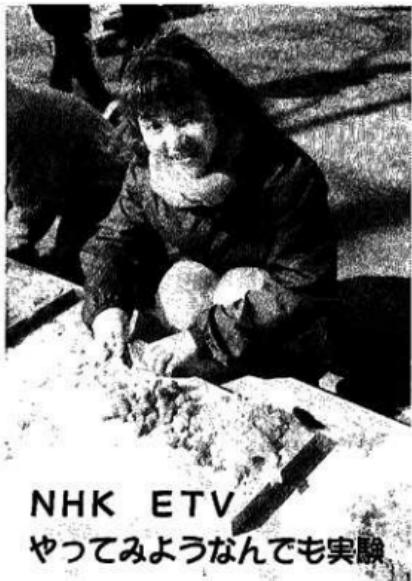
さて前述のレブリカ法による分析について、前回の時点で不明であった山梨県中道遺跡の水I式土器の圧痕について、先般、丑野毅と松谷曉子からオオムギによる圧痕ではないかと指摘をいただいた。その詳細は松谷、丑野による正式報告によるとするが、これが事実とすれば時期的に御井戸遺跡例の妥当性を補強する例となろう。

今回の発表は縄文時代のオオムギに関する現状把握を目的とした。栽培を論ずる場合、特定種のみならず、遺跡で出土する各栽培種の組合せで栽培を検討すべきであるし、縄文時代の生業全体の中で栽培、管理栽培等を検討すべきであろうが、今回はまず基礎文献の解説を主眼とした。御容赦いただきたい。

(平成12年3月16日)

参考文献

- A.C.D'Andrea,G.W.Crawford,M.yoshizaki&T.kudo
1995 Late Jomon cultigen in north-eastern Japan.*Antiquity*69
大貫静夫 1998 「東北アジアの考古学」
賀川光夫 1985 「日本への農耕伝播の一問題」「日本史の黎明」
粉川昭平 1979 「縄文時代の栽培植物」「考古学と自然科学」12
小谷凱宣 1972 「熊本県上ノ原遺跡出土の穀物の意味について(英文)」「人類学雑誌」Vol.80 No.2
小林公明他 1988 「唐渡宮」
埼玉県編 1980 「新編 埼玉県史 資料編1」
佐藤敏也 1971 「日本の古代米」
佐々木高明・松山利大編 1988 「畑作文化の誕生」
下伊那教育会編 1991 「下伊那誌」第1巻
ソウル大学校博物館編 1978 「欣岩里住居址4」
高山考古学会編 1978 「ツルネ遺跡発掘調査報告書」
高橋 譲 1997 「縄文時代中期稻作の探求」「塙田直先生古稀記念論文集」
常木見編 1999 「食糧生産社会の考古学」
寺沢 露・寺沢知子 1981 「弥生時代植物質食料の基礎的研究」「櫛原考古学研究所紀要考古学論考」第5冊
戸沢光則編 1994 「縄文時代研究事典」
戸沢光則 1983 「縄文農耕」「縄文文化の研究2 生業」
中沢道彦・丑野毅 1998 「レブリカ法による縄文時代晩期土器の櫛状圧痕の観察」「縄文時代」第9号
中沢道彦 1998 「縄文時代の終焉」「御代田町誌 歴史編(上)」
中島直幸・田島龍太他 1982 「菜畑遺跡」
二官忠司・並原安夫他 1987 「四箇遺跡」
能登 健 1987 「縄文農耕論」「論争・学説 日本の考古学3 縄文時代II」
平井泰男・渡辺忠世 1995 「南清手遺跡1」
藤尾慎一郎 1993 「生業からみた縄文から弥生」「国立歴史民俗博物館研究報告」第48集
埋蔵文化財研究会編 1991 「第30回埋蔵文化財研究会 各地域における米作りの開始」
前山精明 1996 「縄文時代晩期後葉集落の経済基盤」「考古学と遺跡の保護」
和佐野喜久生編 1995 「東アジアの稻作起源と古代稻作文化」
渡辺誠・西田正規他 1975 「京都府舞鶴市桑洞下遺跡発掘調査報告書」



NHK ETV やってみようなんでも実験

春まだ浅い3月20日、長門町原始古代ロマン体験館において「やってみようなんでも実験」(NHK教育テレビ)のロケがおこなわれた。番組は4月に放送され、ご覧になった方もいるだろう。

ロケ内容は、石器実験製作の世界的権威、國立館大学の大沼克彦教授が、石器の割れる原理を生徒に説明したり、実際の石器作りを教えたり、割った石器の切れ味を試したりという実験であった。

集まつたのは、この春、晴れて中学生となった御代田町と長門町の生徒たち男女3人ずつ。体験館に近い鷹山川の河原では、実際に黒曜石が採集できた。

石器製作実験で大沼教授が黒曜石を割ると、初めてみる黒曜石の割れ方にみんな歎声をあげた。

生徒たち自らも石器製作に取り組んだ。最初はグチャグチャの割り方をしていたが、名人の教えによって次第に良好な剥片を割がすようになった。そして剥がした黒曜石のカケラでナイフを作り、実際に肉や野菜を切って、その切れ味の鋭さにふたたび驚いた。切った具を、縄文土器の中に放り込むと、グツグツと縄文鍋は沸騰し、こくのある縄文スープができる。

最近は博物館活動の中でも体験学習の重要性が説かれている。生徒たちは、生き生きと石器作りや縄文鍋にチャレンジした。こうした体験プログラムの重要性を番組製作から再認識することができた。



写真1 鷹山川での黒曜石採集



写真2 原石を大割りする大沼教授



写真3 大沼教授の技術を学ぶ



写真4 グツグツと縄文鍋

佐久市前藤部遺跡

出土の軽石製板碑

出澤 力

1はじめに

私が卒業した大学はいわゆる佛教系の大学で、その緑かどうかは分らないが幾度か五輪塔、板碑、宝鏡印塔などといった佛教的な石造物の調査に参加する機会を得た。そんな理由から多少石造物に対する知識と興味を持った訳である。

今回紹介させていただくのは佐久市栗毛坂遺跡群前藤部遺跡から出土した軽石製の板碑である。板碑についての説明は次項に譲るとしてこの板碑の出土した前藤部遺跡は佐久市小田井から御代田町にまたがる広さ70,000m²にもおよぶ面積で平成8年から9年にかけて調査された。軽石製板碑が出土したのはその内佐久市側で、奈良、平安時代の住居址から中世の豈穴状造構、土坑、ピット、溝状造構などが確認され、板碑は第4号溝状造構内からの出土である。

以上、次項からは本題に入りたいと思う。

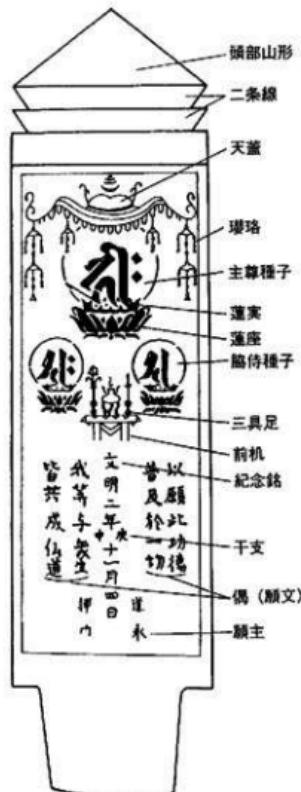
2板碑とは何か

板碑とは鎌倉時代から室町時代の約400年間にかけてほぼ日本全国で造立された死者、あるいは生きている者の死後の利益を願い造られる供養塔の一種である。形状の特徴としては佛教考古学というジャンルの先駆者一人である石田茂作氏が『日本仏塔の研究』の中で「上部を三角に切り、その下に二条の切込みをつくり、中部に梵字または仏像を表し、下方に年月日その他のを刻したもの」としている。その材質は板碑の別名に「青石塔婆」の名がある通り埼玉県の秩父で産出される綠泥片岩という緑色の板状に割れる石を用いたものがもっとも有名で、特に関東ではこの石で作られたものが頗るである。上の形状的特徴を持ち、材質が綠泥片岩の板碑を石田茂作氏は「典型板碑」と呼びまた典型板碑を真似て作った物や異なる材質によって作られた板碑を「類型板碑」として区別している。板碑に記される文字などでもっとも多い物は密教で用いられる梵字で、その中でも阿弥陀如来を表す「キリーグ」の文字が多く見られる。その外にも「南無阿弥陀仏」と名号を記した物、「南無妙法蓮華經」と日蓮宗の題目

を記す物、仏像などの画像を描く物など様々なバリエーションがある。さらにその下に造られた年号や願をかけた人（願主）の名前などが刻まれているのが普通である。板碑の起源には諸説あり、同じ石造物の五輪塔にその起源を求める説や、笠塔婆説、碑伝説、宝珠説など諸説がある。

つまり「板碑」とは塔婆の一形態の一つで、石製で主尊として梵字などを刻み、その下に造立年月日や願主名、願文などを刻む供養塔としての石塔婆なのである。

前藤部遺跡から出土した軽石製板碑は、上の分類から見ると綠泥片岩を用いない「類型板碑」に分類される。次項は佐久市における板碑の様相をふまえ前藤部遺跡出土の軽石製板碑について述べたいと思う。



第1図 板碑の各部の名称 (文献3から引用)

3 軽石製板碑について

前藤部遺跡出土の軽石製板碑は前述の通り第4号溝状遺構から発見された。形状は、頭部を緩やかな三角形に形成し、その下に二条線を掘り込み板碑の形態を踏襲している。大きさは高さ35.5cm厚さは18cmで上から見るとほぼ正方形に近く板碑という印象が薄い。材質は軽石であるからこれは材質の性質上の問題であると思われる。表面には銘文が認められたが主尊と呼ばれる梵字一文字のみで年号や願主の名前等は見られなかった。刻まれた梵字は密教などにおいて中心的な仏として信仰される大日如来を表す「ア」である。板碑の側面には上下に細長く調整を行った痕が走っていた。

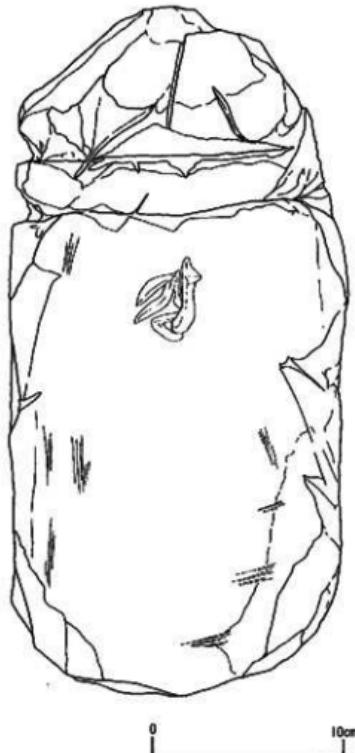
出土板碑は前述分類でいうとその材質からいわゆる類型板碑と呼ばれる物に分類されるが、軽石を用いて作られた板碑は他にあまり類を見ない。緑泥片岩は主に秩父で産出される石材であるから、秩父から南佐久に緑泥片岩が流通し、それを用いた「典型板碑」が佐

久市内において多く認められる。

佐久市では昭和58年旧中込学校資料館において『佐久市の板碑展』が行われており、その資料にさらに補道を加えた『板碑 佐久市板碑図録集』が佐久市教育委員会から刊行されている。それによれば佐久市内に現在する板碑は総数32基を数え、長野県内でも最多を誇るという。

また南佐久地方では昭和5・6年頃に市川雄一郎氏が板碑の調査を行っており、当時の調査では南佐久12町村に33基の板碑を確認したと伝えている。

県下でも佐久市、特に南佐久に板碑が多く認められるのは前述した通り板碑の主な材料である緑泥片岩を産出する秩父地方と南佐久地方が十石峠や武道峠などによって交通交易で繋がっていた歴史背景を鑑みると容易に想像できるのである。



第2図 前藤部遺跡の板碑 (1/3)

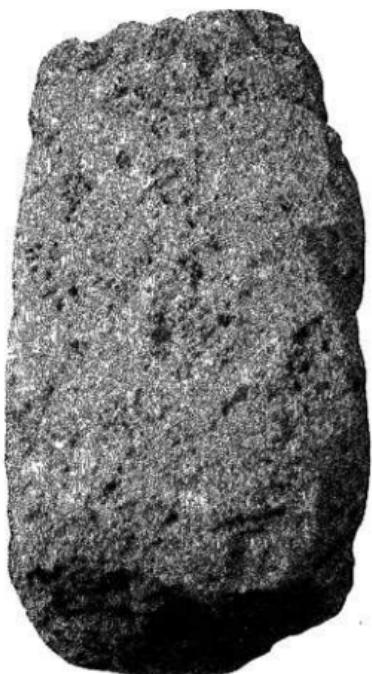


写真1 前藤部遺跡の板碑 (約1/3)

4 おわりに

近年の研究の進展により板碑はその材質や技法の差異を調べることによりその板碑の存在する地域の文化的な様相を知ることのできる考古学的遺物としての意味を増してきている。

前藤部遺跡出土の軽石製板碑について、もっとも佐久という地域の地域性を表す要素はその材質にある。

浅間山の火山活動の影響から佐久地方では多くの軽石をごく自然に見ることができ、多くの遺跡で軽石を用いた石製品が確認されている。こうした自然な背景から身近な石材である軽石が板碑の材料として使われたのだろう。その他に同じく前藤部遺跡から出土した五輪塔の空風輪が軽石と同じ火山性の石材である多孔質の安山岩が特徴的である。

代表的な板碑の材料である練泥片岩を比較的容易に

入手できる佐久地方で作られた軽石製板碑が何を意味するのか、それは軽石という石材が佐久地方でさりに容易に入手できる普遍的な石材でありそれを日常的に使用する文化が存在するという事であり、多少強引ではあるが一つの板碑から地域性が見ることが出来るのではないかだろうか。

以上、拙い筆で恐縮ではありますが、これでひとまず筆を置かせていただきたいと思います。跋文におつき合いくださり本当にありがとうございました。

参考文献

- 佐久市教育委員会 1999 「前藤部遺跡」
- 佐久市教育委員会 1982 「板碑」
- 東大和市史編さん委員会 1997 「中世～近世からの伝言」 東大和市史資料編 6

訃報

麻生優先生ご逝去

日本の旧石器・縄文研究を切り開いてこられた麻生優先生は、4月9日午前8時45分心筋梗塞のためお亡くなりになった。享年68歳という早すぎる他界であった。

先生は、1931年に東京にお生まれになり、明治大学人文学部を修了、千葉大学教授、愛知学院大学教授などを歴任された。

学生時代に先生は、川上村馬場平遺跡や野辺山中ヶ原遺跡などの旧石器調査を経験され、佐久地方ともゆかりが深い。

また、発掘者説話を主催、1970年より長崎県泉福寺洞穴の発掘調査を10年間にわたって実施され、大学の垣根を越えて多くの研究者を育てられた。一方では、最古の土器のひとつである豆粒文土器を発掘、その記録方法も「原位置論」に基づく厳密なものであった。

佐久市遺跡の発掘調査は、先生の「原位置論」



1975年 泉福寺洞穴での麻生先生（中央帽子の人物）

に学んだ若い学生が中心となって方法論的に展開されたものである。

八ヶ岳野辺山のフィールドをはじめ、輝かしい考古学研究の足跡を残された麻生先生に対し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

♪ 編集後記 ♪

現在、「浅間縄文ミュージアム」（仮称）を立ち上げている。重要文化財「焼町土器」が入る博物館なので、免震設計とかガス消化とか24時間空調とか、いろいろ設計が難しい。阪神大震災以降、文化財の危機管理は見なされつつあるようだ。確かにお金かかる。

本年は、尖石考古館も新しくオープンするようだが、八ヶ岳山麓の縄文文化に対し、こちらは小粒ながら、浅間らしい個性のある縄文博物館作りをめざしている。

楽しい体験学習などのプログラムを通じ、浅間縄文キッズをそだててゆけば、と夢見ている。欲しくなるようなミュージアム・グッズも作りたい。（つづみ）

佐久考古通信 No.78

発行所 佐久考古学会

〒385-0056 長野県佐久市桜井632-10

林 幸彦 方

郵便番号 00570-9-2842

■0267 (63) 1963

発行者 原沢 平治

編集者 堤 隆

印刷所 はおぎき書籍印刷



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 7 大森貝塚 一東京都	廣沢雄孝	1
中国少数民族に家族のルーツを求めて	島田恵子	2
男女倉からの報告(4) 一湧別技法の細石刃核資料を中心に	白田 明	6
訃報 三石延雄さん ご逝去		8

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 7

大森貝塚

一 東京都 一

廣沢雄孝

日本で最初に学術的発掘が行われた貝塚であり、「日本考古学発祥の地」としてたいへん著名です。

1877年6月14日、アメリカから日本の貝類の研究のために横浜にやってきた、動物学者E・S・モース博士は、数日後汽車で横浜から東京へ向かいました。途中、多摩川を渡って大森駅を過ぎてまもなく、モース博士は鉄道建設のため、切り削して出来た左側の崖に、貝殻が積み重なって出来た、厚い層があるのを見発しました。

日本の考古学史上、有名なモース博士による大森貝塚の発見です。動物学者であると同時に、アメリカで貝塚発掘にたずさわったことのあるモース博士は、考古学の知識も深く、日本にも必ず貝塚があることを信じていました。この信念が、日本の近代考古学の発祥、



写真1 大森貝塚の碑

大森貝塚の発見をもたらしたのです。

モース博士が、初めて大森貝塚を訪れることが出来たのは、3ヶ月後の9月16日でした。同行したのは、松村任二氏・松浦佐用彦氏・佐々木忠次郎氏でした。

4人は、大森駅まで汽車で行き、駅から貝塚までは線路を歩いて行きました。その途中モースは3人に、これから発掘する品について、「恐らく、網目の文様がついた土器、または土器版を見つけるだろう。それらの土器は蒸焼きで、うわぐすりはかかっていない。また、骨や動物の角で作った道具も見つかるだろう。」などと話し、現場に到着するとモース博士が話した通りだったため3人は、「先生は以前ここに来て下見したに違いない。」と言ったそうです。その後、数回モース博士は仲間を連れ大森貝塚を訪ね、事前調査をしました。

本格的な発掘は10月になってから開始されました。

モース博士は、11月から5ヶ月間アメリカに帰っていましたが、大森貝塚の発掘は松浦・佐々木の画氏の指揮によって続けれられ、翌年3月11日完了しました。

モース博士が再び日本にやってきたとき、大森貝塚はすでに発掘が終了していました。この結果をもとにモース博士が調査報告書『大森貝塚』を英語版で刊行したのは1879年で、序文の日付は7月16日になっていました。



写真2 モース博士像

中国少数民族に家族のルーツを求めて

島田恵子

1はじめに

4、5年前からテレビで、中国雲南省の山間僻地に居住する少数民族の風俗や慣習を伝える番組が、ときおり紹介されるようになった。その中でとりわけ興味をそそられたのが、ナシ（納西）族に含まれているモソ（摩梭）人の婚姻と家族制度であった。

それは、かつて日本にも平安時代以前にあったことが推しはかる妻問婚（男女とも生まれた家を離れずに、男性が女性のもとに通う婚姻形態でその家族の根本は母系制にある。）に類似点が多く見られることだった。

2万葉集から読みとれる妻問婚

万葉集に収録されている「よみ人知らず」の歌は、7・8世紀の庶民生活の様子や心情を語り、妻問婚の存在を裏付けている。たとえば、

○待つらむに到らば妹が嬉しみと笑まむ姿を行きて早見む

これは、妻の家に通って訪婚をしている男性の歌である。1日の仕事を終えて待っている妻のもとに到着したら、嬉しそうに笑う姿を早く行って見よう。といどしい妻へのおもいがにじみ出ている。一方、夜になると訪ねて来る夫を持つ妻の歌は、

○わが背子が朝明の姿よく見すて今日の間を恋ひ暮すかも

夜明けに帰っていく夫の姿を悲しくてよく見なかつたから、1日中恋すごしたよ。と昼間それぞれの家で農作業をし、夜になって訪れる夫と、待ちわびる妻のせつない思いである。

また、恋人関係にある若い娘は、

○かくのみし恋ひは死ぬべみたらちねの母にも告げず止まず通わせ

このように恋づけていたら死んでしまうでしょうから、たらちねの母に告げました。絶えず通っていらしてください。と母に打明け承認を得ている。監視者として母の権威の大きかったことがうかがえよう。

さらに、『中国少数民族の婚姻と家族』（三一書房）



写真1 雲南省 永寧郷開基村阿郷家66才の家母長と（年長者は普段も民族服である）



写真2 調査風景（母屋のいり口）四川省の大家族（四代35人）



写真3 母屋、豚、にわとりと共に生活している雲南省海魚角村阿永米家

で、モソ人の母系家族とその習俗および社会組織を知れば知るほど、私の胸は高なった。家族の進化的な方面で縄文時代まで遡れるなんらかのヒントを得ることができるかもしれない。そう考えた私は、以前中国旅行でお世話になった旅行社に、日程や調査内容を提出したのは6ヶ月前だった。

3 雲南省へ向う

ゴーランヴィークの前後に休暇を重ねて15日間の旅を実施した。関西空港から昆明まで直行便があり、その先是ジープをチャーターして、大理～麗江～寧南～瀘沽湖～永寧～四川省の木里県へと向う計画であった。

出発10日前に女性のアマチュアカメラマンが同行したいとの依頼があった。1人旅では心細くもあり友人が、「生きて帰ってよね」としきりに心配するので快諾したが、遠慮から調査に支障が出てしまった。現地での行動は少なくとも別々であると思っていたら、全て私の行動にピクリと貼り付いて、相手が嫌がってもシャッターを押しつけるのには驚いた。そうしなければよい写真など写せないのかもしれないが、こうしたことは事前にはっきりと決めておく必要がある。通訳は女性をお願いしたのだが、「中国は男社会だからいざ」というとき女性では押し切れないから。と言われてしまいジンジャーを感じつつあきらめざるを得なかった。昆明から4人で、標高2500～3000mの山道を越えて、日本を発つてから3日目の午後ようやく目的地の瀘沽湖に到着した。瀘沽湖は、紺碧の空の色や白い雲を湖面に映し出した神秘的な美しい湖で、北側に獅子山とよぶ岩肌が露出した高い山がそびえている。モソ人はこの獅子山をシンボルとして崇めている。

近年、観光地としてクローズアップされ、政府は急ピッチで麗江から入れる国道建設を進めている。7割程度仕上げており、私達もこの建設中の道路をほこりにまみれて通ってきたので以外に早く着いた。途中寧

蒗の外事弁公室からも1人加わり、さらに永寧郷の副郷長さんが各々の家庭を案内し、通訳してくれることになっていた。副郷長さんはモソ人であり、モソ人は独自の言語と象形文字をもっているからである。雲南省の各地に勤務する政府役人は少数民族出身者が多く、自己紹介をするとき民族名を必ず言う。私達が、「長野県出身です」と県名を言うのと同じ感覚である。

4 母系家族訪問

翌日からいよいよモソ人の母系家族を訪問し、聞き取り調査を開始した。瀘沽湖周辺から永寧・四川省にかけて約1万人以上のモソ人が半畜半農の生活をしながら暮らしている。モソ(摩梭)とは、「牛を放牧する人」という意味で、祖先はチベット方面からの遊牧民であるという。現在、ナシ(納西)族の中に含まれているので、通称モソ人と呼ばれている。農作物は、米・とうもろこし・大豆・小麦・じゃがいも・稗・アワ・キビその他野菜を作り、家畜は、馬・ラバ・黄牛・豚・にわとりを飼い、家族全員で労働し、消費する自給自足の経済生活を営んでいる。

母系家族は、家母長を中心とした家族全員で相談して生産計画・作業の分担などを決め、家母長は財産の管理・生活の手配と家族の健康状態に気を配るほか、宗教祭祀に責任を持ち、家族は家母長に厚い信頼と尊敬を寄せている。どの家庭でも聞き取り調査に応じてくれた家母長は、大らかなものやわらかい態度であった。それは、外祖母から母へ、母から娘へと受け継がれる母系血縁は、家母長になるのは長女とは限らない。…家の柱として、管理能力と協調性に優れた女児を選んで早くから育てる。おだやかな話し方、年長者を尊敬し、年少者をいとおしみ、将来家母長として立派に務めを果たせるよう教育する。その結果、自然に家母長としての風格が身についていくのであろう。

母系家族の家の構造は、一つのバターンで標準化している。中庭を中心にして四方に校舎造りの4棟の家



写真4 四川省の大家族 木里県屋脚村桑連布家
(外国人が調査に入ったのは初めてという)



写真5 四川省木里県屋脚村桑連布家 いざり機



写真6 四川省 橋を渡るモソ人

尾が並び、門の向い側にある大きな平屋の建物が正房（母屋）である。部屋は土間と板の間に区切られ、上間にあるカマドで食事の準備をし、板の間に開かれた窓を開んで一家がなごやかに食事をとる。囲炉裏の際に祖先靈を祀る長四角の立石があり、朝・昼・夕と家族が食べるご飯やおかずの一部を器を使わずに立石の上部に直に供えている。その奥の壁際には火の神を祀った祭壇がある。囲炉裏は男女の座る位置が決められており、左側が女の座、右側が男の座となる。

また、板の間と土間の境に2本の太い柱が左右に離れて立ち、左が女柱、右が男柱と囲炉裏の座と同様の側に定められている。13才になった1月1日の朝この柱の前で、女子は長いギャザースカートを男子はズボンをはく成年礼の儀式を行なう。説話によると、今まで生きていたのはクモや鳥などであり、その生命が終ってやがて人間としての新しい生命が13才からはじまるおまつりを行うのだという。女子の子は成年礼をあげると、母屋の両側に中庭をはさんで向き合う様の客房に個室を与えられる。2階の個室と個室をはさんだ中央の部屋は、チベットの影響を受けラマ教の経堂があり、祭壇はどこの家でも部屋いっぱい立派に飾りたて革やかな感じがした。男の子が多い家では必ず1人はラマ教の修行僧になっている。

豚やにわとりなどの家畜は、中庭で水を飲んだり、糞をついたりしながら家族と共に生活しているが、これらは貴重な食糧で、豚は骨を取り除いたのち丸ごと塩をふりかけて、乾燥させ日々の料理に使われている。にわとりは必要に応じて首をひねり、料理して食卓にならぶ。驚いたのはウリンボガ家畜化されているのである。小海町中原遺跡で出土した土器の把手に、表情豊かなイノシシが多く描かれていたので、繩文時代前期中葉にはすでにイノシシが飼育されていたことを想像していたが、これを見て確信に至った。



写真7 雲南省永寧郷の小学校訪問 粗末な教室だが子供たちも先生の目も輝いていた。

5 母系家族の婚姻

母系家族の婚姻は、二人が愛を育て結婚を望んだならば、家族の承認を得て、男性が女性の個室へ夜ごと訪問することで成り立つ。男性はめとらず、女性は嫁ぐことなく互いに牛家を離れない。だから2人で助け合いながら経済基盤を築く必要はなく、それぞれ別々の生産・生活単位の母系家族に属している。

あるお宅の女性の個室を見せていただいた。ベッドが2つ左右に別れてあり、壁際に衣類がハンガーにかけられていた。男性の持ち物が少量あり、女性の衣類がダンボールに整理されて積んでいた。芳香がどこからともなくただよい、色っぽさを感じられた。訪れる男性は家の者に挨拶することもなく直接女性の個室へ入れるようにになっている。承認を得たならば大手を振って通って来れるのである。

2人の間に生まれた子どもは、母方の母系家族全員で育てる。母親の私的な財産とはならないのである。訪ねた家の50代の若い家母は子どもを抱いたり、幼い子どもがまとわりついで離れなかつたが、授乳期を過ぎると母親にかわって、おばあちゃんである家母長と寝起きを共にしているからである。

娘は、家母長はじめとした兄弟姉妹全員で行ない、男の子は母方叔父から男の仕事として、漁獵や牛耕、家畜の飼育などの技術を学び、女の子は母親はじめとした母娘から、麻糸から機織りまで、刺しゅう・縫いもの・料理・子守りなどを教わる。娘の基本は荒ら荒らしい言葉で叱ったり、手を擧げたりしない。忍耐強くやさしく教える。そのため、子どもたちも、大人も実に穏やかな口調で会話をしている。とくに男性たちがやさしく感じられた。

訪婦は、別れることも簡単なようである。二人の感情のもつれ、男家からしきたり通りの贈り物がない、などの理由から門前払いをしたり、男性が持ちこんだ身の回りのものをまとめて客室の外へ出して拒絶の態度を示す。さらに男性の方でも、新しく訪問する相手

が見つかったために急に遠のいて訪れなくなれば、女性はそれと察するのである。悩んだり、めそめそ泣くようなことはないようである。また、別の相手との出会いがあるからであろう。複数の男性を通わせる女性、複数の女性のもとへ通う男性もいるようである。この問題に関しては、ほとんど聞き取り調査が出来なかつた。気が弱かったり、病弱であれば独身を通さざるをえない男も女もいるようである。

近年、政府が単婚を奨め、母系家族の中に父が同居したり、男子が嫁を迎える例が多くあったが、最近は、またもとの母系家族にもどっているという。15才の少女に、「訪婦をどう考えていますか?」と質問すると、「なによりも大家族が一つにまとまって、仲良く暮れるし、モソの古くからの伝統だからこの制度を続けたいと思います」とはっきり答えた。1人っ子政策は、少数民族に限って2人産んでもいいようであるが、大家族は以前は30人にもものばつたが現在は15人前後に減少している。さらに、商品経済の波がおし寄せ現金収入を得るために、一家の中で1人~2人は近くの町へ出稼ぎに行き家計を助けている。

通婚範囲は、昔に比べると拡大している。かつて、2つの小氏族が互いに通婚していたという温泉郷で聞き取り調査をしたところ、現在は4つの氏族と通婚しているということである。その戸数は、ワーフー13戸、ボーズー12戸、バーミー8戸、グーザー5戸の単位であるといふ。

男性は、夜女性の臥室で過し、明け方には自分の所属する母系家族にもどらなければならぬので、通婚範囲は自己の村か、隣の村に限定されていたが最近は

雲南省永寧郷開基村 阿郷家の家族構成



自転車を使うようになったので、遠距離も可能になったようである。

では次に母系家族の系譜を紹介しよう。

阿郷家は、3代19人であるが、家母長の姉妹がなくなり、現在17人の家族構成である。家母長と姉妹の子どもが男3人、女4人で、孫が男4人、女3人である。子どもを産まない姉が1人いる。さらに、出稼ぎに行っている女性とラマ教の修行僧が各1人いる。モソ人の家族構成的一般的な状態といえよう。

モソ人は純朴で人なづく、親しみをこめてどこの家族も調査に応じてくれた。お昼をごちそうしてくれた家、手づくりのお酒やお菓子でもなしてくれた家もあり、あたたかい人情を感じられた。

少数民族として誇りをもち、伝統的生き方を維持しているモソ人の生活の中には、はるか遠い縄文時代の暮らしのルーツが根付いているような気がする。それらは再度訪問して調査し、別稿にゆずりたい。

2000年・2001年度 佐久考古学会 役員

顧問	由井 茂也 井出 正義	事務局長 林 幸彦
会長	藤沢 平治	事務局幹事
地区委員	軽井沢・御代田・小諸 北御牧・浅科・立科・望月 佐久市 白山・佐久町・八千穂・小海 南相木・北相木・南牧・川上	会計担当 上原 学 研究発表 藤沢 一明 見学会 佐々木宗昭 三石 宗一 佐藤純一郎 木内 捷 羽毛田伸博 佐々木 康 長崎 治
会計監査員	山井 明 井上 行雄	報告会 桜井 秀雄 森泉かよ子 小林 真寿 小山 広夫 白田 武生 花岡 弘 堤 隆 藤森 英二
		講演会 小山 広夫 白田 武生 花岡 弘 堤 隆 藤森 英二
		通信 堤 隆 藤森 英二

男女倉からの報告 4

一 湧別技法の細石刃核資料を中心に

臼田 明

1はじめに

ここに紹介する石器は、かつて永井亀氏が所有していた資料で、以前自分の掘から出土した石器として、10数年前にいただいたものである。いずれも全くの無傷であり、上下が一致する削片系細石刃核を含んだ一連の資料である。しかし筆者には出土地点が不明なこと以上に、関連する石器がどういう性格のものであるのか説明がつかず、長く眠っていたものである。

平成2年、御代田町文化財資料室を訪ねた折、堀氏より「信濃野辺山原の細石刃文化」①削刷りをいただいた。これは実に大きな意味を持っていました。特に5ページ目に示された10点の削片系細石刃核に、私の眼は釘付けになった。

三日月形の削片は男女倉では、時々あったような気がするが、永井氏からいただいた資料と野辺山の資料がそっくりだったからである。まず資料を見てみよう。

2 石器について

紹介する石器は、すべて黒曜石製である。

1は、削別技法による細石刃核原形とみられる。大きさは6.5×3.6cmで57.5gである。一般に細石器やナイフ形石器は、良質の石材を選び、気泡等を含まないものが多いが、本石器も最も良質の黒曜石を素材としている。本原形は、両面調整体の両端からの削片剥離がなされていることがわかる。

2は、削別技法による細石刃核削片とみられ、その大きさは削片が7.8×2.0cmで33.0gで、細石刃核と同一個体である可能性が残る。

3・4は黒曜石の両面調整体で、自然面を残す。1のような細石刃核の素材か、あるいは尖頭器の本製品とも考えられる。

3 湧別技法

エウベツテクニック（湧別技法）という用語は、日本は勿論、世界の旧石器考古学者の間でも知らない人が多い程有名な技術である②。これは1961年以来、北海道白浜遺跡群を調査していた吉崎昌一によって、完

全に復元できる資料から紹介され、湧別川段丘上の遺跡群から命名された。角柱状に整えた母岩から細石刃を取り出す矢出川技法とは大きく異なる。

その技法は

- I 大きさも形も槍のような形に仕上げた母岩を用意する。
- II 水平方向に角骨で打撃すると、先ず断面三角形の上部が落ち、次いで平たい長方形に近い削片が、はがれ落ちる。これらをスパール（削片）と呼び、これを何枚かはがして上面に平らな面（船の甲板に相当する面）ができる。形も船のような形となる。

- III 船の甲板に相当する平らな面を細い角骨で押して、細石刃を取り出す段階。一般に角錐状のものよりは大きいので沢山の細石刃が取れることになる。

- IV Vは2枚の細石刃を取り出しているが、実験してみると一般に5~60枚、200枚にも及ぶことがあるという。つまり、本米ならば槍先形石器1個から、1つの形の石器しか利用できないが、細石刃を取り出し、木や骨に埋めこむことにより、形状も大きさも異なる様々な道具をつくり出すことが出来、修理、修復も可能となつた。

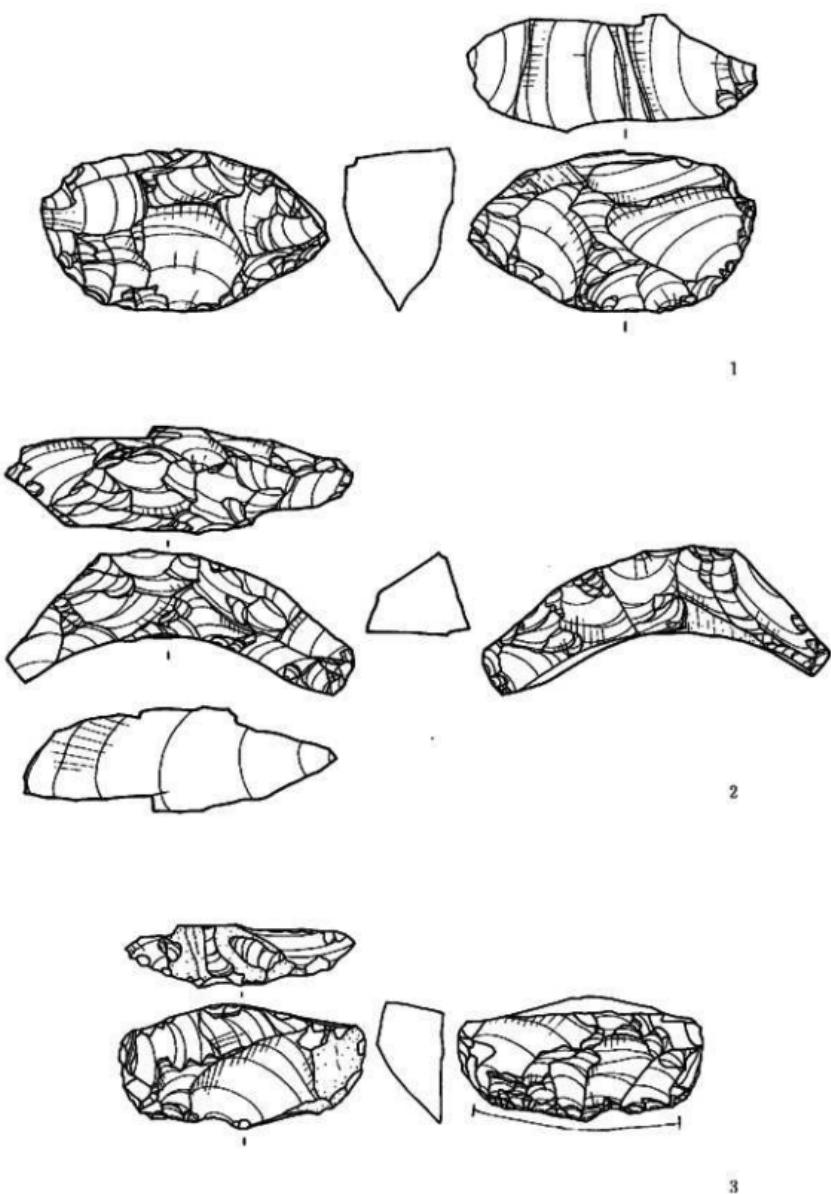
いずれにしても今日の調査では、湧別技法によって作られた細石刃核は東北地方から中部地方までの東日本に広く分布していること、更に荒屋型剝離刀を伴うこともわかつて来ている③。本石器は、まさにI、II段階に該当するものであろう。

では本県ではどのような湧別技法の事例があったのだろうか。

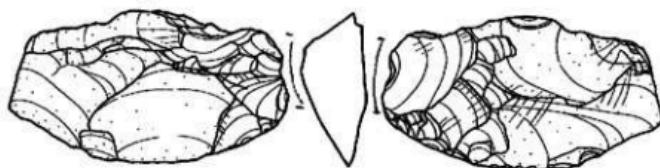
その初見は、①森嶋によって紹介された、千曲川下流の長野市、小野平遺跡の一点であろう④、②次いで柳又Aの細石刃核原形⑤、③更に木曾の丁度反対側に当たる岐阜県、日和田高原池の原の細石刃核の例。④由井茂也らの資料による野辺山矢出川等の出土例等、非常に少なく貴重であるとされている。⑤平成8年、野尻湖畔で原型とスパールが接合する資料が発掘された。これは結果的には失敗し、捨てられたものであったが、地元の石材や、本県特有の黒曜石ではなく、新潟県産の柱資凝灰岩を使用しており、技術解明への一級資料であった。

4 男女倉の変貌

これ以後私は、この種の石器探しに夢中になる。永井氏との交際や協力はその後も続くが、本石器の採集は昭和35年頃で、男女倉日と呼ばれた一帯であろうと考えるようになった。しかし氏の筋は変遷し、昭和30年頃の事を言い、更に質の良い黒曜石はカマスに入れ、業者に売ったとも言う。もっとも黒曜石は入植当時から大量に出ており、石器の区別はほとんど無かった様



第1図 男女倉遺跡の石器 (4/5)



第1図 男女倉遺跡の石器 (4/5)

4

である。氏の柵はすべて遺跡地帯にあり、昭和50年代には原野に戻った土地も出ている。男女倉遺跡の変化は急である。永井氏の畑に限らず、原野に戻りはじめた柵が目につく。

5 おわりに

本稿を書いている時(既に5年前)『中ヶ原第5遺跡B地点の研究』が刊行されていることを知りました。そこでは既に野辺山原で、堤氏らにより湧別抜法の細石刃核が発掘されている事実を知りました。

そして今回の男女倉の事例は、本州中央部のわが国最大の黒曜石原産地にあって重要だと考えられます。この細石刃文化の解明は、佐久や長野県、日本の細石刃文化の解明につながる第一歩だと思います。ふたた

び以降で詳しい報告をしたいと思います。

註

- (1) 『野辺山原の細石刃文化』中ヶ原5B地点の細石刃文化資料から、古代文化42-11 平成2年11月
- (2) 『旧石器の知識』芹沢長介 1961年
- (3) 前掲『野辺山原の細石刃文化』『旧石器の知識』他
- (4) 前掲書によるが原典は『信濃』にある。
- (5) 『御又遺跡C地点』1993年、開田村教育委員会・柳又遺跡発掘調査会
- (6) 平成8年7月20日付(読売新聞)。信濃町柏原大久保南遺跡で、写真入りで紹介され堤 隆氏が解説している。

訃報 三石延雄さんご逝去

佐久考古学会創立期から学会の発展にご尽力され、佐久の数多くの遺跡発掘を成功に導いた三石延雄さんが、6月27日89歳でご逝去されました。

現場の打ち上げには、三石さんの黒田武士の縄りが楽ししく披露されたことが思い出されます。

謹んでお悔やみ申し上げます。

(写真: 学会の多賀城の視察研修。右端が三石さん)



♪ 編集後記 ♪

20世紀も残りわずか、21世紀が目の前までできている。21世紀の考古学は、どのような新しい展開をみせるのだろうか。また、人類の新しい未来を示す羅針盤の役割を果たすのだろうか。

新世紀の考古学は、遺物・遺構のみに偏重した研究から脱却し、人と社会を語る考古学への脱構築が求められているだろう。

就職難といわれるが、新しい考古学を担う若い研究者が安心して研究できる環境を整備したいものである。

(つつみ)

佐久考古通信 No.79

発行所 佐久考古学会

〒385-0056 長野県佐久市桜井632-10
林 幸彦 方
郵便振替 00570 9-2842
0267 (63) 1963

発行者 藤沢 平治

編集者 堤 隆

印刷所 ほおづき書務舎



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 8 熊久保遺跡—長野県—	1
佐久との出会い	2
野辺山シンポジウム2000「人類の適応行動と認知構造」に参加して	5
過去から現在へ—鳥居龍蔵・八幡一郎両氏の著書を今読む—	6
標高1,200m木次原遺跡の発掘	8
祖母の贈り物～ノンフィクションエッセイ～	10

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡 8

熊久保遺跡

—長野県—

今回は地元長野県の遺跡である「熊久保遺跡」を紹介したい。熊久保遺跡は長野県東筑摩郡朝日村に位置する。松本平西南部、標高2,446mの鉢盛山を源とした、奈良井川の支流頸川の左岸に発達した河岸段丘に残された遺跡である。晴れた日は東に美ヶ原や高ボッチの山々が望める。標高は約800mである。

1962年には樋口昇一氏らが回目の調査を行い、縄文時代中期の住居址9軒を検出した。このうちの一軒では、住居址の落ち込み内に大量の土器が発見された状態が確認され、「熊久保パターン」として紹介されたことから、土器の発見論にも一石を投じている。

その後の調査も含めると、時期は縄文時代早期から平

安時代にまで及ぶが、やはり縄文中期が抜きん出でいる。これまでの調査は部分的な試掘や緊急調査が主で、集落の全体像は未だ見えていないが、それでもこの時期の住居址はかるく100軒を超える、特異な配石や巨大な火葬など、特殊な遺構が数多く存在することなどからも、遺跡の規模の大きさが伺える。

遺物も優品が多く、美しい蛇紋岩製の磨製石斧、顔面把手付の土器、唐草文土器を中心とした数々の埋甕など枚挙に暇がない。どの土器も丁寧につくられている感じがする。土器づくりの名人でも居たのだろうか？ 中でも中期中葉の焼町土器は、優れた造形美に圧倒される。佐久地方との関連を考える上でも大変重要であり、ぜひ実物を目にされたい。また從来唐草文土器という名前で呼ばれていた土器に対して、学術的立場から「熊久保式」という名称も提唱されている。

遺跡には村の歴史資料館や復元された竪穴住居があり、訪れる人を縄文の世界に引き吊り込む。

現在、この多くの成果を公開すべく、調査報告書刊行に向けた、整理作業が行われている。一般の土器のオンパレードになるだろう。



写真1 後方が遺跡の上に建つ資料館。手前は第7次調査の竪穴住居址



写真2 熊久保遺跡出土の焼町土器(左)と熊久保式の埋甕(右)

佐久との出会い

神村 透

信州の南端下伊那で生まれ育った自分にとって、東北信地方は遠い存在でした。東信の一角である佐久へ訪ねたのは学生時代の2回と長野県教育委員会社会教育文化財係の時の調査でした。その後何回か訪れることがあった。

1 学生時代

1949年正月、自分が中三の時でした。大場磐雄先生が松本へきた帰りにわざわざ下伊那まで足を伸ばして訪ねてきた。父は大学教授が訪ねてきたとのことで、自分の考古学を認めてくれた。その3月、父の職場にいたことのある小諸市の先生が、市内にも遺跡があるから案内するので遊びにこないかと誘ってくれた。3ヶ月休みに自分が訪ねた所、先生は与良清先生、美済津一夫さん宅へつれていってくれ、石神遺跡と諸遺跡で表面採集をした。美済津さんが集められた石神遺跡の遺物をすごいなあと見たこと、石神遺跡で縄文後期土器片や石器を探集した。ここで骨片が散在しているのを不思議に思った。与良先生の大きな家は記憶しているが、どんな遺物を見せてもらったかは思い出せない。諸遺跡ではこんこんと湧きでている清水に驚き、まわりの烟で表探した。縄文のある底座を探集して大喜びでした。この時の遺物は現在、飯田市の下伊那教育委員会教育参考館考古室の陳列棚下にある木箱に保管されている。

1953年、秋の六大学野球で何年振りかで明治大学が優勝し、大学から靖国神社まで提灯行列、自分もその一人として参加した。そんな興奮の10月末、芹沢長介さんから川上村馬場平遺跡の旧石器を発掘するからと誘われた。自分は文化祭の準備があったので途中参加となつた。11月4日の夜行で神沢第一さんと出かけ、5日早朝に川上村についた。早速遺跡現場へいく。先発隊の調査でローム層中に台石があり、その周囲から尖頭器が出土していた。尖頭器は旧石器であることが実証され、自分もローム層中から尖頭器を掘り喜んだ。この時、由井茂也さんに会い、所蔵する遺物を見せてもらった。

このこともあって、長野県の教員になる時、佐久を

希望したが駄目でした。

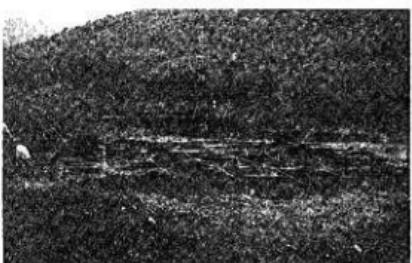
1955年、永峯光一さんが小諸市水道跡を調査するからと説かれた。大場先生の関係で自分は國學院大学に出入りしており、先輩や学生たちと親しかった。また、信濃史料の調査が大場先生を中心にはじまっており、永峯さんは県内の調査をしており、下伊那では自分が案内したこともあると説かれた。自分も調査区の一つを担当して発掘した。晩期土器がすごい出土量で驚いた。この時の資料は卒論資料に使わせてもらい、拓本や実測図は今や自分の大事な財産となっている。

2 長野県教育委員会社会教育課文化財係

1968年、私は長野県教育委員会勤務となつた。当初中央自動車道用地内遺跡を担当する予定であったが、用地買収がすます調査できないため県庁勤務となつた。自分の担当は発見届、発掘届の事務処理と県下開発予定地の遺跡分布調査でした。分布調査は現地を歩き、多くの遺跡、遺物を調査し、そのため現地の研究者の方々に案内してもらつた。自分にとっては樂しみな出張であり、2年間に県下全域を歩くことができ、学校現場においてはとてもできない体験をさせてもらつた。佐久地方では入山峰、佐久市内、浅科村、南牧村、川上村、南相木村、北相木村と歩かせてもらつた。調査した結果は「分布調査報告書」として刊行した。自分の手許には野帳、日記、フィルムが残っている。

(1) 地域の仲間

考古学仲間は同じ道を志すということで、初対面でもすぐ親しくなるし、顔見知りでも行を共することで結びつきが強くなる。こうしたきっかけの基には長野県考古学会設立にあり、分布調査では会員名簿から協力をお願いした。佐久といえば設立当初から世話をなつた竹内恒先生がおられ、先生から何人も紹介してもらつた。高山忠雄さん、渡辺重義さん、奥水利雄さん、由井茂也さん、黒岩忠雄さんがそうでした。竹内先生の奥さんが自分の母と女子師範学校で同級とわかり親しみを強くした。先生から佐久に泊まつて調査を説かれたが、長野からの白田特急バスがあつたので毎日通つた。今にして思うと、一泊し佐久の皆さん

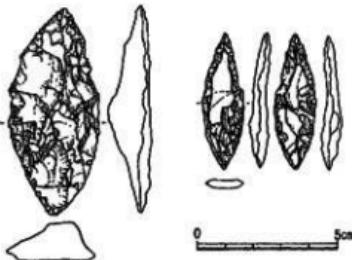


写真：入山峰の発掘調査風景（神村氏撮影）

とゆっくり語り合っておけば後悔している。渡辺さんは入山峠以来ずっと参加してくれた。自分が木曾の学校にもどつてからの学習会にも木曾へとでかけてくれた。自宅に集めた遺物を展示してあり、入山峠の石製模造品も実測させてもらった。まだまだ元気で活躍されているのがうれしい。興水さんは桶原洞穴の発見者ということで名前を存知していた。興水さんの自動車にのって、車内で遺跡発見時の様子や、調査のことを開いたのがなつかしい。また日本一の石棒、北沢遺跡にも案内してもらった。飯田市石子原遺跡旧石器を発見と報道された時、佐久から遺跡現場まで訪ねて下さった。縁といえば、1983年、福島邦男さんが望月町の田戸式土器のことで、浦和市の資料を二人で見にいった。その時、浦和市立博物館を訪ねたら、職員の岩井重雄さんが、私は軽井沢の出身で、立正大学生の時に入山峠の試掘調査に参加した、という。卒業後は浦和市に就職したとの事でした。思わず所の出会いに驚き、その後、文献交換を続いた。

(2) 自分に残っている遺跡

入山峠。戦前から石製模造品を出土する遺跡として



第1図 学史的に重要な川上村馬場平遺跡の尖頭器

知られており、東山道にかかる時遺跡として西の神坂峠と共に注目されていた。この峠に国道18号線のバイパス計画が持ち上がり、1968年に現地協議となった。群馬・長野両県にまたがるということで、文化庁、両県教育委員会、松井田町教育委員会、軽井沢町教育委員会と建設省国道維持事務所と関係者が集まつた。結果、遺跡範囲の分布調査となり、11月7・8日に2日間、群馬県の都合で長野県教委と軽井沢町教委とで実施した。9地点のグリッドを入れて5地点で石製模造品を確認した。うち1地点が長野県で、遺跡の大半は群馬県側にあった。群馬県側ではあったが、軽井沢町が事業主体となって国学院大学が調査することになった。自分は神坂峠の石製模造品発見に関係し、試掘調査に参加した。入山峠でも試掘調査にかかることになつていい経験となつた。入山峠からの浅間山と妙義山な

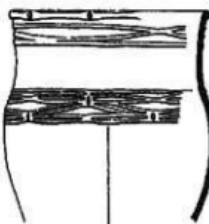


第2図 北相木村の坂上遺跡では平成10年度の調査で多量の陶文土器が見つかった。図は後期堀之内式の壺壷

どの群馬県側の異様な山容が強く印象に残っている。

浅科村土合1号古墳の石室内を清掃したいので指導をと教育委員会から連絡があった。1969年5月に調査した。石室内には一部天井石が落ちていたので、その部分をさけて埋まっていた土を取り除くと、鉄平石で2室に区切られた石室が露呈し、礫を敷きつめた床面から残っていた副葬品が検出された。直刀・鐵鎌・堤瓶・金環・勾玉・管玉・白玉・小玉などが出土した。大室古墳群の調査でも盗掘されて埋まっていた石室からいくつかの副葬品を検出しており、盗掘古墳の再調査が必要だと思った。

相木川には洞穴が多い。桶原洞穴は信州大学が調査して素晴らしい成果をあげている。この洞穴は左右に長く未調査部分も多いので、より確実な層位での調査が期待された。最近発見されたという南相木村のいおり沢洞穴を見る。谷底水出を見下ろす南側にあって、片栗根がつけられ農作業の休み場となっていた。高校



第3図 標識遺跡となった小諸市水遺跡の水1式土器

生が調査したいというので、高校によって見せてもらうと、前・中期土器片と、決状耳飾、骨や貝などあって、発掘調査をしてみたいなと思った。もう30年もたつが、この洞穴などはどうなっているかと思う。

歩いていて、いくつも注意しなければという遺跡があって、佐久地方の考古学調査はこれからだなと思い、地域の活動に期待を残した。

(3) 気になった遺物

分布調査では遺跡を歩くだけでなく、出土遺物も見せてもらった。個人所蔵や学校保管のものである。そんな中に思わず遺物を見つけて喜んだり、出土地が記入されていないで残念に思ったりした。30年たって、特に個人所蔵の遺物はどうなっているかと心配である。

佐久市で平根小学校の遺物には出土地が書かれていた。台紙に張られた石器の中にポイントの形が白く残っていて、聞くと大学生が持っていたとか、心ない仕打ちに憤りを感じた。伴野さんのお宅で社宮寺遺跡出土の銅鏡片、鉄器と土器底部を見せてもらった。この遺物は現在どうなっているでしょうか。南牧村では野辺山分校の遺物を見た。やはり出土地の記入がなくて残念だった。縄文前期土器が多く、中期は少なくて八ヶ岳南麓とは違うかと思った。表振でも中原遺跡で前期土器が多く、旧石器だけでなく、前期も注目しなければと思った。南相木小学校では古宿遺跡出土の古錢とそれをいれてあったという瓶があり、じっくり調査したかった。北相木小学校では坂上遺跡出土の縄文中期土器が、未整理で洗浄されていなかったが、完形土器もあって、整理をし報告書をまとめる研

究者がないのが残念であった。柄原分教場をつくる時に出土したという阿玉台式土器もいい資料であった。こうした未報告の資料が各地にあるのを知るにつけて、地域資料の掘りおこしと報告が大事だと痛切に思った。

(4) 開発と保護

1968年の分布調査報告書では、自分にとって最初の仕事であり、現地での開発と保護の対立、どちらかというと開発優先になっていた。そのことで私見をあとがきにかえて書いた。入山跡については、計画が、開発側からも、地元教育委員会からも県教育委員会に連絡がなかったこと指摘した。建設省と文化庁と保護措置についての覚書が結ばれていないこともあって、建設省側の主張が強かった。佐久平園場整備事業については、分布調査する前に事業が実施されていた。埋蔵文化財保護について県報通達があり、事前協議するようになっているのに協議がなかった。現地を歩いてみると事業地内に遺跡が多い。これを調査するとなると調査費や調査期間がかかる。調査費が原因者負担となると受益者の負担がかかり、地元農民の負担となる。国や地方公共団体の対策が必要と指摘した。その後、この園場整備事業内の調査を確認していない。

地域に担当者のいない町村では、開発の把握と遺跡保護はどうしても後手後手となっているのが現状である。それだけに佐久地方も心配が多い。

先日、坪井清足先生とご一緒にした時、長野県では八ヶ岳山麓という、西南麓の諏訪地方が注目されているが、山麓全体を山梨県、佐久、上田といった全城を見ないのかといわれた。全くその通りだと思った。

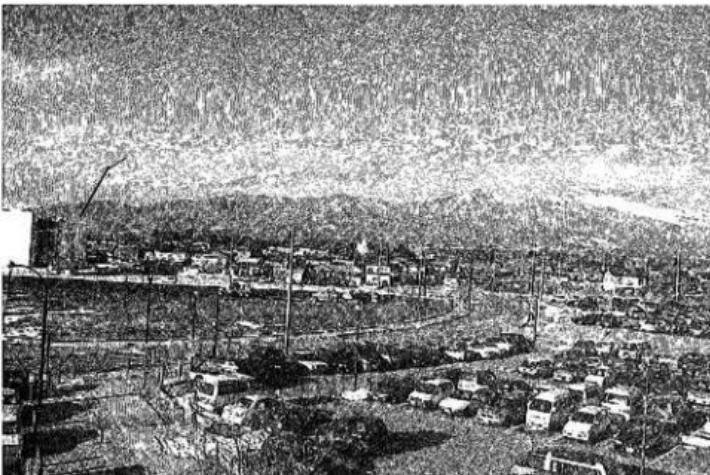


写真2 変わりゆく佐久平の風景。私は何を残せるだろうか？（文中の写真・図は調査（藤森）で付けさせていただきました）

野辺山シンポジウム2000 「人類の適応行動と認知構造」に参加して

藤森英二

去る10月13日から15日、南佐久郡南牧村の野辺山高原にて、本会員の堤隆氏を代表とする八ヶ岳旧石器研究グループ主催の「野辺山シンポジウム2000人類の適応行動と認知構造」が開催されました。全国各地、本当に北海道から九州までの研究者、約100名が野辺山にみえていたことになります。

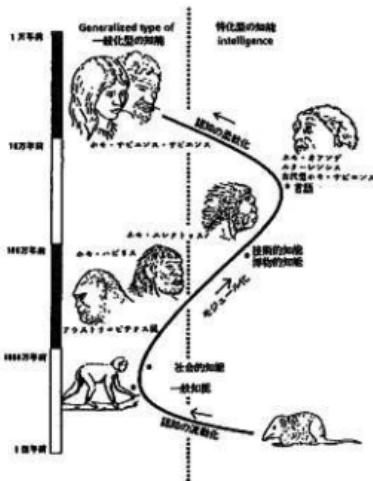
テーマに掲げられた「適応行動」あるいは「認知構造」という言葉にあらわされるように、旧石器時代の石器研究から大きく視野を広げる課題を持ち、シンポジウムの冒頭では人の心に迫るという問題提起もされていました。

肝心の内容については、やや難解な部分も多かったものの、普段土器や石器の分類のみに踏み止まる自分のような怠け者には大変刺激となるものでした。特に遺物の背後にいる人間の行動を探るために、しっかりとした方法論が必要とされること。そしてそのためには発掘調査の現場における調査者の問題意識も重要なだと改めて感じました。単に出たものを記録を取り上げると、そこに調査側の問題意識を投影するのでは、後の研究での資料的価値はやはり遠ってくるのでしょうか。もっともこのシンポジウムではそのようなレベルの話をしていた訳ではないのですが、浅学の身の悲しさか、ここから先はとても文書に出来ません。参加された方々はさらに深い意識でのご意見をお持ちであったと思います。

と言うように、結局のところ内容についての見解を述べる事は出来ませんが、会場となった八ヶ岳の裾、野辺山高原から千曲川の源流に近い川上高原は、日本ではじめて細石刃文化が確認された矢出川遺跡や、やはりはじめてローム層中から尖頭器が確認された馬場平遺跡などを舞台とした、旧石器時代研究の先進地だったことは言うまでもありません。学史的な話はこれまで多くの場で語られていますが、この研究の歴史に本会の方々も深く係わられていることは周知の事実です。そして研究のみでなく、矢出川遺跡の保存運動などを取り上げても、佐久の地で考古学を学ぶもの、いやここに生きる人々すべてにとっての誇りと言って

いいでしょう。私などはその歴史に係わったわけではありませんが、今でも八ヶ岳の雄大な姿を見とれ、繰り広げられた人間ドラマと、遙か1万年を越える人々の風景を考えるのは自分だけではないと思います。このような土地に全国から時代をリードする研究者の方々が集まつたということに感動を覚えるしだいですが、主催者の堤氏が参加者の方々に「是非みなさんに八ヶ岳を見ていただきたい」とおっしゃっていたのが印象的でした。

私もまたこの広大な裾に立ち、佐久で考古学を学べる喜びに浸りたいと思います。



第1図 認知考古学のモデルの例。この図では進化心理学を組み合わせ、人の認知構造の進化を模式的に示している。現代人類と初期人類では認知の構造が違うと捉えることで、多くの考古事象も説明が付くという（シンポジウム資料・松本直子論文より）



写真1 八ヶ岳と野辺山高原。日本の旧石器研究における数々のドラマを生んだ

過去から現在へ

—鳥居龍藏・八幡一郎両氏の著書を今読む—

馬場伸一郎

三年前、「考古学雑誌」で各時代の研究史が特集されたことがあった。それを読んだ時、意外だった研究史を見たり、また自分が研究する分野の定説が長き議論を経た末の結果ようやく定着した学説だったりと、驚きの連続だったことを思い出す。自分が弥生時代の石器と縄文時代の石器を研究していることもあり、特にその二つの分野の研究史は戦前から今日まで理解しようと私が必死の頃だった。

そのなかで、戦前の石器研究の学史に常に登場する人物がいた。鳥居龍藏・八幡一郎の二人である。二人には縄文・弥生の石器研究史上ふれなければいけない研究が多くある。信州というフィールドから発信された研究成果が当時の学会全体に与えた影響も大きいものであつただろう。この紙面を借りて、信州の資料から多くの学説が生まれていった時代を手短に振り返ってみよう。

鳥居龍藏といえば日本列島のみならず朝鮮半島・中国大陆でのフィールドワークを何回となく重ね、多くの研究成果を発表したことで有名である。「有史以前の日本」(鳥居1918)には氏の主要な研究成果がまとめられている。弥生時代の文化が中国東北部や朝鮮半島と非常に類似した文化であることを指摘し、弥生文化大陸起源説を用意したのは鳥居龍藏、その人である。実は大陸起源説の支柱となった資料は石器だったというあまり知られていない事実がある。この辺の事情については石川日出志氏の論考に詳しい(石川1996)。鳥居龍藏は、弥生式の石器と類似する石器が中国東北部に存在することを確認し、以後、大陸側と弥生式の文化的類似性を石器から積極的に説いていく。

このように中国大陆・朝鮮半島の調査で得た氏の博識が生かされ『諏訪史』第一巻(鳥居1924)が刊行される。それを紐解くと、以後の石器研究で論争的となる個所が多く含まれている。台湾の民族誌を参考にした沼田頼輔やマシローによって打製石斧が農具であることが既に指摘されており、『諏訪史』では沼田・マシローの見解を一步進めて「原始的な農業」の存在を示す資料と想定している。この問題は藤森栄一の縄文中

期農耕論で再び学界全体で取り上げられることになることは周知の通りである。いまだ決着のついていない古くて新しい石器研究の課題であることも指摘しておきたい。さらに『諏訪史』での磨製石斧の分類と分布では、日本海側の地域で定角式(I式)が多く、天竜川流域と遠江地域では乳棒状石斧(II式)が濃密であるという今日的理解が既にこの段階で指摘されている。なお、III式とされた弥生時代の太形蛤刃石斧についての記述は不十分で、この部分は後の八幡一郎により追究されていく部分となる。一方磨製石鐵の記述では、諏訪地域で発見される磨製石鐵の集成・分類・系統について記述しており、諏訪地域の磨製石鐵と旧満州・朝鮮半島の磨製石鐵の型式には違いがあることを指摘している。その内容とは、①【磨製石鐵の鐵身に鏽があり、穿孔のない朝鮮半島・旧満州の磨製石鐵】と、②【断面がレンズ状で鏽がなく、穿孔される諏訪地域の磨製石鐵】に分類し、①は豊後・筑前・日向に濃密に分布し、若干、甲斐・信濃の伊那谷・美濃に分布すると言う。ただ、九州地方に分布する①の磨製石鐵を大陸系としながらも、①の分類に含めた甲斐・信濃の伊那谷・美濃の磨製石鐵を②と「同一系統」と強引に結びつけてしまったのは、分類結果ではなく人種・民族論との整合性を優先する当時の背景が如実に表れている。

このような鳥居龍藏著作の『諏訪史』と『先史及原史時代の上伊那』(鳥居1926)の成果が次の地域史である八幡一郎著『南佐久郡の考古学的調査』へと受け継がれる。鳥居龍藏とともに調査に加わっていた八幡一郎は鳥居の基本路線を継承し、以後1930年代の石器研究をリードしていく人物一人となる。この著書で南佐久郡の考古学研究の端緒を切り聞くことになる八幡は、著書の磨製石斧の分類で重要な指摘を行っている(石川1996)。八幡の磨製石斧の分類では、『諏訪史』の段階での三型式の分類に、第4類の扁平片刃石斧を加えている。そして第1類(乳棒状石斧)、第2類(定角式磨製石斧)、第3類(太形蛤刃石斧)、第4類の系統関係を論じ、乳棒状石斧から定角式磨製石斧が生まれ、そして乳棒状石斧に「外的刺激」つまり大陸の影響で太形蛤刃石斧が生まれたと指摘している。さらに定角式磨製石斧に大陸の影響が加わって扁平片刃石斧が生まれたとも指摘している。つまり、弥生時代の磨製石斧が縄文と大陸の双方に系統が迫ることを明らかにし、石器の系統の問題に新たな解釈を試みている。ただ、これは山内清男の提唱した縄文伝統・大陸要素・弥生時代に新出する要素という三要素で弥生時代の文化を理解するという方式から実践された系統整理ではなく(山内1939の註37参照)、縄文文化と弥生文化はあくまで断絶するものであるという発想から生まれた系

統関係の整理であることには注意しておきたい。つまり八幡と山内の弥生時代觀は根本から違っているということである。八幡は、弥生土器特有の土器研磨手法が加曾利B式の擦消繩文に影響を与えると指摘しており(八幡1938)、同時期併存する弥生文化と繩文文化という鳥居龍藏以来の圓式のなかで磨製石斧の系統關係を考えることは明らかである。山内が使用する繩文系統や繩文伝統という意味と、八幡のそれとは意味が異なることを再確認しておきたい(馬場1999)。

ちなみにIII式の太形蛤刃石斧の石材に「閃綠岩」が利用されることが嘆賞化されている。数年前、長野市の櫻田遺跡が弥生時代の磨製石斧生産遺跡であると確認され、そこで閃綠岩製の太形蛤刃石斧や扁平片刃石斧が生産されていることが判明する。古くから指摘されていた広域分布する閃綠岩製磨製石斧の存在に対し、今ようやく次なる研究の段階が見えてきている。

以上、鳥居龍藏の『諜訪史』と八幡一郎の『南佐久郡の考古学的調査』を中心に振り返ってみた。両氏の著書には考古資料から論議を展開するという姿勢が貫かれている。鳥居龍藏は、確かに人種・民族論の枠組みのなかで繩文・弥生研究を実践していたものの、コロボックル論争に代表される人種・民族論争の場合と異なり、考古資料を中心に据えて論議を展開する手法が取られている。この点、八幡も同様である。このような手法で研究を実践していた両氏の姿勢は当時の研究のなかにおいては評価すべきであろう。ただ、繩文文化と弥生文化の断絶性を強調する資料の位置付けと資料解釈が両氏の基本姿勢であることは明白である。鳥居龍藏により明確に提示された「繩文人=アイヌ人、弥生人=日本人」という構図は、以後八幡一郎の繩文・弥生文化觀に継承され、さらにその構図は戦後まもない時期まで著名な弥生研究者を「弥生人=日本人の直系の祖先」と言わしめるほどの根強い考え方である。そもそもこのような構図・考え方方は記紀神話から発したものであり、記紀神話に依存した歴史觀は当時の日本國の国家思想でもあった。最古の弥生土器である遠賀川式土器の広がりに「神武東征」を重ね合わせる論理は記紀神話と考古現象を結びつけた代表例である。しかし、記紀神話に依存した歴史觀は戦後教育のなかで棄却され、科学的な根拠に基づいた事実による歴史觀の構築が基本方針となった。

ただ、そのような方針に基づき構築された歴史觀が今、存在するのだろうか? これは現在の世情を反映しているのだろうか、人間機械論的な思考が発達し、システムの中で人間本体をチエスの駒のように動かすような考え方から考古資料を解釈することが現在の主流であると私は感じている。つまり一つの構造体がある一つの目的に向かって機能するという、1950年代に

社会学者バーソンズが提唱した構造-機能分析(社会システム論)が資料解釈のバックボーンとしていまだ考古学では健在であるということである。社会システム論は一種の決定論のかたちをとるため、例えば「環境適応したからこののような社会が成立した」という説明がなされることが通常である。また、社会システム論的な思考では、考古現象をまずシステムの構成要素に分解し、システム解説のために要素相互の関係を明らかにするという視点が重視される。考古現象がどのように現れるのかという問題や、また考古現象と考古現象との関係性の究明へと現在研究の優先順位が転換していくのはこのような視点で研究が実践されているからだと思う。その上、数値化されたデータが考古資料に氾濫する一つの理由も、メカニズム解明を目的とする研究に数値化データは必要不可欠だからである。

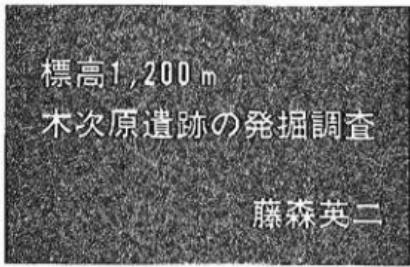
このように、國家により統一された歴史觀の下で著作された『諜訪史』・『南佐久郡の考古学的調査』と、考古現象のメカニズム解明に力が注がれる現在の研究を比較すると、研究方法の時代差というのももちろん感じる。しかしそれ以上に我々は世情に無意識にも強く影響を受け、研究を進めていることがわかる。過去の研究も現在もこの部分は変わらない。

(2001年1月8日)

この文章は学術論文ではありませんので、註は掲載せず、参考文献は基本的なもののみ掲載しました。

【参考文献】

- 石川日出志1996『3. 弥生時代(2) 石器』『考古学雑誌』82-2
坂詰秀一1997『太平洋戦争と考古学』歴史文化ライブラリー 吉川弘文館
千田 稔1999『高千穂幻想—「國家」を背負った風景—』P H P新書
鳥居龍藏1918『有史以前の日本』岩波甲陽堂
鳥居龍藏1924『諜訪史』第一巻 信濃教育会諜訪部会、古今書院
鳥居龍藏1926『先史及原史時代の上伊那』信濃教育会上伊那部会、古今書院
馬場伸一郎1999『繩文時代の石器研究史—戰前を中心』『酸苔史学』107
八幡一郎1928『南佐久郡の考古学的調査』同書院
八幡一郎1938『繩文式文化』『日本文化史体系』第1巻 誠文堂新光社
山内清男1939『日本遠古之文化』補註付新版



1はじめに

佐久を南北に貫く国道141号線をJR小海線小海駅付近で東に折れ、県道小海上野線を行く。千曲川の支流相木川を沿うように登るこの道は、その途中に有名な柄原岩陰遺跡があり、やがて武道峠を越えて群馬県上野村に行き着く。

今回紹介する木次原遺跡は、すでに群馬側にほど近いこの峠道の袂、標高1,200mの高冷地に位置する。相木川の右岸で、現在は畑とカラマツの植林地となっており、西南に緩やかに傾斜する日当たりの良い場所となっている。

1980年の村内分布確認調査でも縄文時代の遺物が採取されていたが、過去の工事において土を削った際に出来たカッティング面に、時期は不明確ながらもローマ層中まで掘り込みのある遺構の断面が見えていた。村教育委員会では平成10年度よりこの箇所を中心に調査を行ったが、正式な報告書は更なる調査を行ったあとに取って置くこととして、ここではこれまでの成果を紹介し、北相木村の原始古代を覗いてみたい。

2古代の住居址

工事の際のカッティング面に現れていた遺構で、県道からもすぐに確認出来る。これまでの調査では、方形と予想されるプランが確認された。ただし推定3.5m四方のプランのうち北側がわずかに残されていたのみ



第1図 木次原遺跡位置図 (1:50,000)

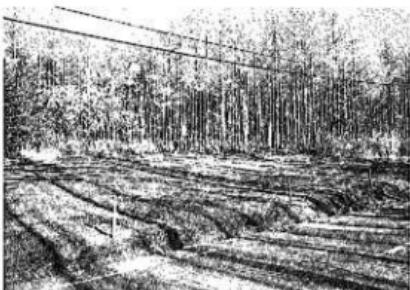


写真1 木次原遺跡。奥は群馬に抜ける武道峠である

であり、大部分は破壊されていた。遺構確認面（ローマ層上面）から床面までは30cmほどであった。

遺構からは土器片2点と多くの炭化材が出土した。このうち炭化材は住居址覆土から床面まで見られ、特に床面ではかなり原型を留めて残されていた。その後この炭化材を放射性炭素年代測定法にて分析したところ、約1,300年のものと判明し、数字の上からは奈良時代のものとなった。今後出土した土器や佐久地方の山沿いの遺跡との比較検討が必要であるが、いずれにしろ奈良から平安時代の古代住居址であると言えるだろう。但し柱穴やかまどの跡は発見できなかった。

ちなみにこの遺構の断面は、長野県立歴史館白沢勝彦氏の指導のもと土層剥ぎ取りを行っており、現在展示方法などを模索している。

3 縄文時代前期の住居址

昨年の調査では、先の住居址の他にも遺構を検出すべく、幾つかのトレーンチを設定し調査した。その結果、昨年から今年にかけ、幾つかの土坑と縄文時代前期前半の住居址が確認出来た。

確認出来た住居址は直径6m程の円形と思われ、今回の調査では全体の確認には及んでいない。しかし覆土中からは数点の縄文時代前期前半の表面に羽状縄文を持った織維繩文土器の破片が出土し、さらに石器では、チャート製の石鏃等が大量に出土した。まだ詳しくは分類していないが、製品の石鏃や、途中で製作を放棄したかのような未製品が数点であるのに対し、残核、剝片はおびただしい量である。住居址の全体を調査したわけではないので結論を急ぐことは出来ないが、チャートを持ち込み、石鏃をつくり、完成品は外に持ち出していたという当時の姿が浮かび上がる。いわば「チャートの矢じり工房」である。ただしこまでの調査では石を叩き割る時に用いたような、いわゆるハンマーストーンなどは出土していない。

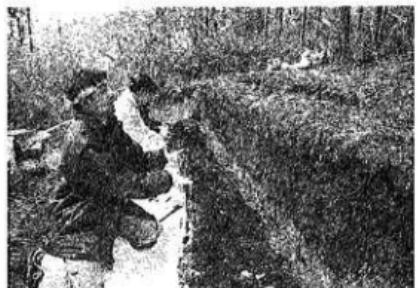


写真2 断面剥ぎ取り作業

4 謎の土坑

この他には土坑が一ヵ所のみ確認されたが、不定形で複数が重なった状態とも思える。チャートの剝片が数点見つかっているが、時期や目的は未確定である。遺構確認面から深さ60cm程のローム層中まで掘り込んだ底には、人頭大以上もありそうなチャートの原石が埋まっていた。これはローム層中に自然の状態で含まれているチャートと思われるが、上記した石器の製作場と併せて考えると、このチャート原石を目指した採掘坑という考えも浮かぶ。が、無論推論に過ぎない。第一チャートという石は、相木川の河原でも多量に拾えるのである。

5 今後の課題

まず古代では、遺物そのものが村内では極めて少ないので比較等は難しいが、近隣との検討を通じて、この山深い地に人々の住みはじめた時期と、その意味を追求していきたい。一体、どんな生業の集団が住んで

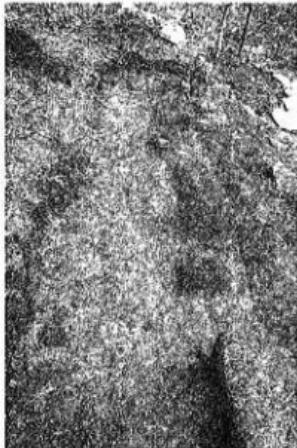


写真3 1号住居址発掘状況

いたのだろうか？

次に縄文時代であるが、今回の調査ではまだまだ不明確な点が多いものの、あるいはこの時期（縄文時代前期前半）の石器製作の工程を捉えることが出来る可能性が高まった。既に佐久地方でも縄文前期の前半で在地系の石材を多く用いる事が指摘されているが、このようなチャートの石器の製作場と考えられる遺跡は、やはりこの時期にのみ展開したものなのか、あるいはチャートの原産地ともいえる当地にあっては時間的に幅を持ち存在するのか？ そして採掘活動があったのか？ 興味は尽きない。

また今回の調査は村の方々を中心に行った。北相木村内の歴史に対する興味をそそるには、充分な材料であったようである。



写真4 2号住居址。続きはまだ未検出。



写真5 2号住居址出土石器。上段残核2点、下段左から剝片、チップ、石鏃未製品、石鏃2点。全てチャート製。

祖母の贈り物

～ノンフィクションエッセイ～

水沢教子

1 望月の夜

1988年の12月3日、提出を1ヶ月後に控え、卒論を書き進んでいた筆が止まった。「未明におばあちゃんが亡くなった…」母からの電話を受けた私は原稿を持ったまま、午後の新幹線やまびこに飛び乗って、ふるさと信州へ向かった。

卒論の内容は、東北地方に広く分布する大木8b式が大木9式に向けて変容を遂げる様相を、宮城県登米郡中田町の浅貝貝塚出土土器の属性から追求するといった、ごく平凡なものであった。しかしながら、その時期、かなり広域に類似した土器が関東・中部地方に広がる背景がおぼろげに引っかかっていた。そんな疑問をまとめた卒論の冒頭部分を書いたのはこの車中であったと思う。

大宮で新幹線を降り、信越線で碓氷峠を越える頃はもう夜であった。小諸駅に降り立った時、山国の初冬の澄んだ空に浮かぶ満月が私を迎えてくれた。

望月の町中、中山道沿いにある母の実家には親戚が集まっていた。祖母はたくさんのお花と一緒に、既にお棺の中にいた。くも膝下出血で倒れて8年。闘病生活を感じさせない安らかな表情がそこにあった。

私の長い12月3日はこうして終わった。

2 祖母を送る

翌日、佐久は青空だった。午前8時出棺。集まつた近所の人に深々と頭を下げる叔父と叔母の姿が今でも目に焼き付いている。

そして何時間か後には、天に向かう祖母の髪を見つめる私がいた。物心付いてから毎年参加した望月の縁祭り、中学時代つれていってもらった下吹上の復元住居、一緒に散歩した裏の鹿曲川のせせらぎ、高校入学の挨拶に行った時の笑顔…。思い出が次々にあふれ出し、とどまるところを知らなかつた。

3 信濃川を遡る

明けて1989年。その夏は記録的な猛暑だった。新潟県荒屋遺跡の現場で私は初めて37℃を体験した。そし

て暑さも少し和らいだ頃、祖母の新盆に出たため、最終日を前に、1日早く現場を上がって、飯山線に乗り込んだ。途中、なんとなく津南町歴史民俗資料館に立ち寄った。ふと、古びた棚を見たときの驚きといったら…。そこには東北地方で見慣れたものと非常に似通った縄文中期後葉の土器が並んでいた。器形は若干違う。しかしながら文様要素、要素と要素を繋ぐモチーフの類似性はなんとしたことか。ひっそりとした信濃川沿いの山間に、太古の昔、人から人へ伝えられた仙台湾の息吹を感じられた。この時から、この川の上流で、いつか東北系土器が出土するのではないかとのかすかな声が耳元を離れなくなつた。

8ヶ月ぶりの望月も猛暑であった。そこで困らずも、今度はこの土地の縄文土器との初対面を果たした。突然の門外漢達の訪問にも拘わらず、教育委員会の福島さんは大変親切な説明をして下さった。

4 12月3日、再び…

あの夜の（というより未明と言った方がいいのかもしれないが）夢は今でも忘れない。まだ七色の光の中に一際強い黄金色の光があった。私がその光の方へ行こうすると、両面一杯に祖母の姿が見えた。そして近づこうとする私を制止するかのようにこう言つて微笑んだ。「今日、とってもいいことがあるよ…。」

目覚めて初めて気づいた。それは祖母の4度目の命日、1992年の12月3日であった。

その後私は、夏に突然襲った数年前の交通事故の後遺症に悩まされながら、更埴市崖居遺跡群の古代・古墳・弥生時代の集落調査の渦中にいた。期限が迫り、寒さは日一日と厳しくなる。2000m²に200軒と、足の踏み場も無い程に切り合っていた住居跡も、順に調査のメスが入り、黄色いシルト層の「地山」が出来れば調査は終了のはずであった。大量動員の現場もようやく先が見え、その日もいつものように懐ただしく終わるかに思えた。ところが…。

突然、SD5005という中世の溝の底を探っていた部隊に呼ばれた私は、一振りの土器を見せられた。その溝は地表下2.5メートルに達する深さで、底部を検出するのに、多くの作業員が集中していた。洗された土器を水たまりで洗って、弱い夕刻の太陽に掲げて見たとき、職務が走った。大きな筋の縄、無造作に引かれた沈線、それはなんと、摩耗の無い縄文中期の、それも後葉の土器群であった。松代の松原遺跡で中世の井戸の調査中に縄文土器が見つかって前期末から中期前葉集落の調査が始まった話は聞いていた。しかし、同じことが自分の担当する地区で起こるとは予想だにしなかった。

その夜、落ち着いたところで、土器を洗いながら、

今朝の夢が思い出された。
長い長い12月3日の終わりであった。

5 祖母の贈り物

この発見以降、屋代遺跡群の地表下4mに縄文時代の生活面が存在するらしいことを、トレンチ調査などで悩んだ長野県埋蔵文化財センターは、翌1993年から、集落の調査に乗り出した。屋代遺跡群は千曲川右岸の自然堤防上に立地する。弥生・古墳面を重機で剥ぐこと3m、後世の擾乱の無い、無垢の状態の地表面が、今から4000年前の姿を現した。深く密やかに埋もれていた土器群は、貝塚から出土する土器のように美しく、また大量であった。さらに住居跡内土壤の水洗選別の結果、サケ科、コイ科、ドジョウ科魚類の骨や歯が発見され、千曲川での漁労活動が証明された。遺物は石器も含めると計3,000箱以上に上った。住居跡も竪穴住居、板石住居、平地式住居と多彩であり、合計80軒、さらに1/2は調査区外東側に広がる大環状集落であったことも解った。

しかしながら、私にとって最大の感動は、大木8b式から9式の過渡期の土器がこの遺跡から発見されたことであった。卒論の頃、資料不足でその分布すら明かすことのできなかったヒレ状に隆起した溝巻文が添付された深鉢が、人骨脇から出土したとき、様々な謎が氷解していくのを感じた。大木8b～9式の情報は、かなりリストレーントで屋代遺跡群まで達していた。そしてそれを模倣した土器群がこの地域を中心に、千曲川上流域にかけて作られていたのではないか…。

6 13回忌を前に

ところが屋代遺跡群の衝撃は縄文面の発見に止まらなかった。翌1994年、隣の地区の清と流路で、大量の木製遺物に混じって130点の木簡が出土し、古代信濃史に一大センセーションを巻き起こしてしまった。この余波を受けて、縄文遺物は3年の間、上田の倉庫に封印されてしまう。

そして、2000年。2年間の整理作業を経て、ようやく突貫工事の報告書が完成した。今年の12月3日は祖



中世～弥生時代の遺構が
重複

◆黄色いシルト層の「地山」

VII 縄文晚期前半

X 縄文後期前葉

XII-1a 縄文後期前葉

XII-2 縄文中期後葉

約80軒の住居跡
を検出

XII-2 縄文中期中葉

XIV-1～3 縄文中期前葉

XV 縄文中期前葉

写真1 屋代遺跡群(5)b区東壁セクション（報告書より転載）

—千曲川が運んだ土砂に覆われて、縄文人の生活跡は深く、ひっそりと眠っていた—



写真2 SK9071（土坑）出土の大木9a式土器
(報告書より転載)

母の13回忌にあたる。その日は屋代遺跡群の地下から縄文土器が蘇って8歳の誕生日でもある。13回忌をする人の魂は極楽へ到達し、逆に7歳を過ぎると神の子は人の子となるという話をどこかで聞いた。さすれば次は、8歳を迎えた土器達を、ふるさとの歴史の中へしっかりと位置づけなければなるまい。破片1点1点ですらあの日の祖母の笑顔に見えるこの土器達を。それはきっと、祖母のくれた、果てしなく続く課題となるだろう。

祖母は大正2年、小県郡武石村の生まれ。学問を志して上京したが父親の急逝で呼び戻され、村役場に勤めた。「武石小町」と呼ばれた21歳の頃、望月に縁いだという。
(2000. 7. 11)

参考文献

水沢教子編 2000 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 一 縄文時代編ー』本文、造構図版、遺物・写真図版 長野県埋蔵文化財センター



縄文人の母子三代(さかいひろこ画「御代田町誌」より)。

♪ 講集後記 ♪

今号より編集を担当致しました。不手際で本号の発行が遅れたこと、まずお詫びいたします。さて、昨年は日本の考古学にとって大変残念な出来事がありました。インターネットなどでは今日も熱い論議が交わされているようです。起こってしまったことを取り返すことは出来ませんが、わたしたち地域の研究者の今すべきこととは何でしょう。なかなか答えは出ないものの、年末の本会による遺跡報告会に、会員以外の方が見えていたことを大変うれしく感じました。このような会の雰囲気を維持し発展させていくことも大切ではないでしょうか。(藤森)

佐久考古通信 No.80

発行所 佐久考古学会

〒385-0056 長野県佐久市板井632-10
林 幸彦 方
郵便番号 00570-9-2842
電話番号 02027 (63) 1953

発行者 藤沢 平治

編集者 藤森 英二

印刷所 ほおづき書籍



佐久考古学会
シンボルマーク